

新・翻刻「春城日誌」(一)

——「菰月蘋風樓日録」一、四卷 明治十八・十九年——

藤原 秀之

一、はじめに

東京専門学校が早稲田大学となった一九〇二年(明治三五)にその図書館長となった市島謙吉(春城)は、図書館人としてはもちろん政治家、ジャーナリスト、文筆家としても知られており、彼が残した膨大な自筆資料等⁽¹⁾は、早稲田大学やその図書館の研究だけでなく、日本の図書館史、近代政治史、社会、文化研究など多方面で重要な役割を果たしてきた。特にその日誌は、春城が日々体験したできごとを中心に、大隈重信、高田早苗、坪内逍遙といった周辺の人々との私的な関係も含めて具体的な証言が残されており重要な資料とされてきた。そのうち春城の図書館長在職中の日誌については「春城日誌研究会」により翻刻が進められ、当紀要に掲載された⁽²⁾。今日、早稲田大学図書館に収蔵されている春城の日誌⁽³⁾はこのほかに、今回紹介する「菰月蘋風樓日録」全四卷(以下、本資料とする)にはじまり、途中欠けている部分もあるが一九三九年(昭和十四)の「小精廬日誌」まで綿々と書き続けられることとなる。その後はまとまった日誌は残っていないが、その間に記された筆録には自身の生涯に触れたものもあり、また絶筆ともいえる手帳には一九四四年(昭和十九)三月十五日から、日付が判読できるところで四月十七日までの日誌が記されてい

る。⁽⁴⁾生涯にわたって日誌を書き続けたと言ってよい春城は日誌以外にも数多くの筆録を遺しており、それらの自筆資料は紹介するに値する内容を多く含んでいる。⁽⁵⁾今回から早稲田大学図書館が所蔵する「春城資料」のうち、現存する日誌についてあらためて最初から順次翻刻し、さらなる研究の端緒としたい。

二、春城に関する伝記的な研究

「春城日誌」が早稲田大学や近代政治史などの多方面に多大な情報を提供してくれることは前述のとおりだが、それ以前に市島春城という人物研究の基礎資料となることは言うまでもない。日誌の翻刻を始める前に、これまでに積み重ねられてきた春城の伝記的な研究について、とくに自筆資料の紹介状況を中心にまとめておこう。

春城に関しては『市島春城伝』のような形で単著としてまとめられた自伝、評伝の類は存在しない。あえて挙げるとすれば、春城自身による「春城八十年の覚書」⁽⁶⁾、「自叙伝材料録」⁽⁷⁾が翻刻、紹介されているくらいである。「春城八十年の覚書」は、晩年の春城が自らの生涯をつづったもので、幼年期や学生時代、さらには政治活動をおこなっていた時代を中心にしたものである。思いつくままにまとめたメモ書きのような内容で、図書館長時代や大隈の葬儀に関する記述もあるが、全生涯を時系列でまとめた内容とはなっていない。「自叙伝材料録」もまさにその標題どおり、あくまでも執筆のための材料をまとめたもので自叙伝そのものではない。⁽⁸⁾また春城が自身の生涯について述べたものや、生家角市家や市島宗家に関する研究もあるが、いずれも春城の生涯をまとめたものとはなっていない。⁽⁹⁾幼少期からその晩年まで、さまざまな人と交流し、多方面にわたる春城の生涯をたどることは容易ではない。ともすると「図書館長」「随筆家」「政治家」といった活動の一面のみをとらえて論じることになることもあろう。ただ、やはり最終的には市島春城という大きな存在を全体でとらえることが重要である。そこで今回、春城の生涯を知るための基本資

料である「春城日誌」について、現存するものを順次翻刻紹介することとした。これにより、あらためて春城の生涯を、彼自身がのこした言葉によって見つめなおすこととした。

第一回として紹介する「菰月蘋風樓日録」全四巻は現存する「春城日誌」の最初のもので、一八八五年（明治十八）から八六年の内容を含んでいる。これまで翻刻紹介された図書館長時代のものをはじめとして、現存する多くの「春城日誌」が榛原や相馬屋製の縦約十九cm、半葉一〇行の青罫の料紙一〇〇丁ほどを綴じた冊子を使用しているのに対し、縦は約二〇cmと一回り大きい、一冊の丁数は二〇丁程度と少なくなっている。また冒頭の自序にもあるように一部については別に執筆した日誌を、いわば清書したものであり、その点も大きく異なる。ただ春城が日誌を継続して執筆することを積極的に意識して始めたのは本資料からであり、ここから「春城日誌」の翻刻を開始することとする。

三、日誌執筆以前の春城

前述のように春城の日誌は一八八五年、春城二五歳からはじまっている。そこで、本資料の紹介の前に、それ以前の春城の経歴について確認しておこう。

一八六〇年（安政七）二月、越後国水原に生まれた春城は、幼時には漢学、英学を学び一八七五年（明治八）に上京、その後東京大学に進学し後に盟友となる高田早苗、坪内逍遙らと知り合う。さらに高田の紹介で小野梓と出会う。鷗渡会に参加、小野を通じて大隈重信と出会うこととなる。一八八一年（明治十四）十二月、卒業を前に退学届を提出、翌年正月に正式に受理され退学し、小野梓の紹介もあって同年三月、三菱会社に就職する。退学の理由について春城自身は「大隈伯が冠を掛けて野に下り、改進黨を組織する時であつたから、学問どころではないと感じ」たためと述べているが、一方で大学に提出した退学願では「自家不幸之災厄打統（中略）昨十三年ニ至リ遂ニ破産ニ立至リ（中略）」

父儀又難治之重病ニ相罹」ったことを理由とし、三菱入社の理由についても「生計上の都合から」と述べている。ただそれに続けて、就職後わずか半年で退職した理由を「三菱ニ不満のあつた訳でハ無く、政治ニたづさハることが面白かつたから」と記していることからすると、政治活動への思いと経済的な理由、どちらもあつての退学という決断だったのだろう。この年（一八八二年）立憲改進黨が結成されると春城も入党、機関紙である『内外政事情』の編集に携わることとなるが、同紙は翌年廃刊、春城は郷里新潟で創刊される『高田新聞』の経営に参加することとなった。当時、自由民権運動は激しさを増しており、対する政府の弾圧も強力になっていた。春城の『高田新聞』も高田事件に関連する記事が官吏侮辱罪とされ、春城は有罪、一八八四年（明治十七）六月、収監されることとなった¹⁴。そして翌年出獄した春城はふたたび上京して活動を始めることとなるが、本資料はまさにこの年の年末から記述が始まる。ここから途中断絶もあるが、半世紀にわたる「春城日誌」が幕を開けることとなる。

四、各巻解題

ここからは本資料「孤月蘋風樓日録」の内容を見てゆくことにする。

全四巻を収載されている日付によって分けると次のようになる。

首 巻 Ⅱ 自序・明治十八年十二月十三日～明治十九年二月十六日（本文二二丁）

第二巻 Ⅱ 明治十九年二月十七日～三月二九日（本文三二丁）

第三巻 Ⅱ 明治十九年三月三〇日～五月二五日（本文三三丁）

第四巻 Ⅱ 明治十九年五月二五日～七月三〇日（本文三四丁）

このように八か月程度の内容が四冊に記されている。年譜によれば¹⁵、これは小野梓の死、さらには東京専門学校の



「孤月蘋風樓日録 首～4巻」表紙

改革案策定、そして『新潟新聞』主筆としての新潟行きが決定する時期にあたる。春城やその周辺の人々にとつて、政治的な支柱であった小野の死は、彼らに自ら考えて行動することを強いることになり、鷗渡会、東京専門学校、それぞれの今後について議論するきっかけとなつてゆく。また、この段階での新潟行きによつて春城はその後の政治活動の基盤を築くことになる。

以下、各巻の内容を見てゆくこととする。

〈首巻〉

冒頭、自序として日誌執筆の経緯を記している。まずこれまでに二回日誌を書こうとしたことがあるとして、その最初が「橋場ノ僑居ニ」いた折に「日記ノ必用ヲ感」じて始めた「孤月蘋風樓日録」という本資料と同名の日誌であり、二度目が「(明治)十六年ニ至リ再タヒ」始めた日誌だとする。春城が「橋場」、すなわち隅田川のほとりに居を構えていたのは東京大学を退学した一八八二年(明治十五)頃のことである。数か月で執筆

は途絶え、二度目はその翌年からはじめたものの、高田に行くこととなったのを機にやめたという。高田にはこの年の三月に赴いているので、こちらは三か月も持たずにやめたことになる。自序では「日記ヲ保続スル能ハサル者ハ偏ニ記事ノ精ヲ欲スルニ由ル」(1オ、以下特に断らない限り本巻の丁数、表裏)としているが、これが自身のこれまでの日誌執筆が短期間でやめることとなった理由、言い訳ということであろう。

過去二回の失敗を踏まえ、簡単な記述でもいいから長続きさせようと思い一八八五年(明治十八)十二月十三日から印刷局の「懷中日記」⁽¹⁷⁾を使用してつけはじめた三回目的日誌が本資料の元となったものである。そして何よりも小野梓の死と、その伝記編纂における小野の日誌「留客斎日記」の存在の大きさが、あらためて春城をして日誌執筆を思い立たせることとなった。「於是乎懷中日記ヲ癡シ別ニ日録ヲ製シ、旧題ヲ冠シ菰月蘋風樓日録ト云ヒ、自ラ戒メテ之レヲ癡セサランコトヲ期ス」(2オ)と、日誌執筆開始を宣言している。

自序に続いて本文となるが、「十八年十二月十三日ヨリ十九年二月十七日ニ至ルノ日記ハ懷中日記ヨリ謄写セルモノニ係ル」とあることから、本巻については過去の記録を写したものであることになる。

日誌本文は「明治十八年日録」⁽¹⁸⁾として十二月十三日に開かれた東京専門学校校友会開会とそこに至る経緯に関する記述からはじまっている。それから約一か月たった翌年の一月十二日、春城のもとに小野梓の訃報が届く。この年、春城は年明け早々に高田早苗とともに静岡を訪問し演説会を行っている。これは山田一郎の招きに応じたもので、小野の訃報に接したのは、帰京して岡山兼吉に静岡での活動と山田一郎の様子を報告しているときであった。日誌には「小野梓君ノ訃ニ接ス、驚愕措ク所ヲ知ラス」(12ウ)としつつも、高田らとともに葬儀の準備を進め、遺稿編纂などについて協議している。この月の十七日、山田一郎から「寄鷗渡会員書」が届く。その内容は「小野君ノ死ニ関シ政族ヲ激セントスル」(14ウ)ものであり、山田の檄を受けて春城もまた同月二十八日、「今夜深更灯ヲ剔リテ寄鷗渡会員

書ヲ筆ス、蓋シ會員ヲ会シテ激切大ニ政族ノ事ヲ論セント欲スルナリ」(17ウ)と、同じ題の一文をまとめているが、その具体的内容は春城が別にまとめた筆録の中に見ることができ²⁰る。「鷗渡會員各位足下末席謙吉白ス」として一月三一日付で小川為二郎²⁸、岡山兼吉、高田早苗、山田一郎、天野為之宛で記された文章は、四〇〇字詰原稿用紙八枚にわたるもので、小野の死を悼みつつも「逝者ハ追フ可ラス」とし、「進ムテ我政族前途ノ事ヲ計画シ、小野君ノ遺志否吾人曾盟ノ主義ヲ貫徹スヘキナリ」と、今後の活動方針について検討すべき時であるとする。ここでは政治活動のみならず「吾人今日ノ業務ハ營ニ目下政治上ノコトノミニ止マラス人材ヲ陶冶シテ他日ヲ經營スルコトモ亦大ニ務ムヘキ所ニシテ(中略)今日既ニ全キカ折々東京専門学校ヲ創立セルハ本邦學問ノ独立ヲ計リ、將來私立大学ノ翹楚タラシムルニ在リ、其業ヤ至大、其計ヤ至難ナリト云フヘシ」と、東京専門学校創設とその苦難にも言及している。

日誌ではまさにその東京専門学校での日々についても記載が見られる。本巻の冒頭からほぼ毎日のように「昇校書生ニ課ス」との記述があり、この頃の春城の生活では東京専門学校講師としての時間が多くを占めていることがわかる。のちに図書館長や大学の基金募集の中心としての活動が注目される春城だが、草創期の東京専門学校にあつては一講師という立場で経営に参加していた。ただ、校友会創設や後述する学校改革にかかわる重要な事案にかかわっていることから、ただ単に決められた時間に教壇に立っただけではなく高田早苗らとともに東京専門学校草創期を支えた面々の一員であつたことがわかる。

〈第二巻〉

この巻では「学校改革」が大きな話題となっている。首巻末尾近く、一八八六年(明治十九)二月八日、「昇校課書生、放課後田原ヲ伴フテ高田ヲ訪ヒ、大ニ学校改革ノ事ヲ議シ、夜三時ニ至ル、遂ニ家ニ還ル能ハス、田原ト高田ノ家ニ

宿ス」と、高田早苗、田原栄とともに学校改革について議論し、翌日には「改革案綱領ヲ筆シ了ル」とあるように春城自身が改革案をまとめている。東京専門学校は創立時よりもより、その後も財政面では大隈家からの支援によって成り立っていた。⁽²¹⁾ そうした状況を改善し、大隈家からの「学校の独立」⁽²²⁾ を成し遂げるための手段として学費の値上げが検討され、結果として一円の月謝を一円八〇銭に値上げすることで大隈家からの自立をはかったと言われる。この経緯については高田や春城の随筆にも詳しいが、春城の日誌を見ると前述のように田原栄とともに高田宅に泊まり込みで改革案の検討をおこない、この後も毎日のように高田らと改革案の検討を重ねていることがわかる。そして二月二四日「今夜大隈邸ニ学校改革ノ会議ヲ開ク、臨メハ議員講師皆ナ集マル、既ニシテ議事ヲ開ク、大概原案ヲ良シトセサルナシ」⁽²³⁾ とあるが、この時は最終案を得るに至らず、その後も春城は「校ニ登ル、高、天、田等ト学校改革実行ノ事ヲ処ス」⁽²⁴⁾（三月十一日、12才）のように、高田らとともに改革案策定を進めている。結局三月十八日の評議員会で学費値上げなどについて決定することになるが、⁽²⁵⁾ 当日の春城の日誌では触れられていない。ただ、後に刊行した随筆の中で春城は学費値上げについて詳述しており、特に原案作成の過程については「此の改革案を作つた当時の事を追懐するのに、高田氏が主として案を立て、私が文案を草し理由書を綴つたのであるが、確か高田氏の家で夜を徹して十枚計りの案が出来た。（中略）記念のため此案の草稿だけは私の手に保存してある」⁽²⁶⁾ とあるが、事実彼が残した筆録の中には「東京専門学校改革考案」と題する四項目、表紙共十六丁におよぶ改革案が収録されている。⁽²⁷⁾ 標題を付した表紙につづけて記された全体の趣旨では私立大学設立に向けた将来計画の立案の必要性が市島謙吉、高田早苗、天野為之、田原栄、坪内雄造、⁽²⁸⁾ アキマ、恒徳⁽²⁹⁾ の連名で訴えられている。それに続く本文では改革案を四条に大別してそれぞれの理由と具体的な方策が記し、

以上四條ノ改革案ヲ実行スルハ皆ナ与ニ本校目下ノ急ナリト雖トモ、就中補助金ヲ仰カスシテ本校ヲ維持スルノ方

案ハ最モ切要ナル者ナリ、

として、大隈家からの支援を受けずに学校経営を維持することを最大の課題としている。このころ春城は並行して「論学問之独立」と題して一文を著しているが（二月二日、首卷19ウ）、のちの随筆でも次のようにこの点に触れている。

学校の建学の趣旨は「学問の独立」であるけれども、人より補給を受けて成り立つのでは学校は独立してゐるとは言へぬ、学問の独立を期するには先づ学校それ自身が自立せねばならぬ、（中略）いつまでも人に頼つて立つといふことは意気地のない訳である。²⁸⁾

なお改革案として示された四条とは次のような内容である。

第一、補助金ヲ仰カスシテ本校ヲ維持スルノ方法ヲ定ムヘシ

第二、本校ノ組織ニ改良ヲ加フ可シ

第三、教務ニ改良ヲ施スヘシ

第四、舍務ノ改良ヲ計ルヘシ

さらに第一については三項（甲・丙）、第二は六項（甲・己）、第三は二項（甲・乙）、第四は三項（甲・丙）、それぞれ具体的な方策が示されている。そのうち第一については次のような記載がある。

甲 従来ノ月謝金一円、教場費三十銭合計壹円三拾銭ヲ改メ月謝金一円五拾銭教場費三拾銭合計壹円八拾銭ト為スヘシ、

とあり、その説明として当時の慶應義塾の月謝が一円七〇銭（教場費別）²⁹⁾であることなどの事例をあげ、それらと比して「本校ハ政治法律ヲ教ユルノ外、英学ヲ兼修セシムルカ故ニ生徒ノ享クル処ノ利益ハ（中略）其月謝ヲ金壹円五拾銭ト為スモ敢テ過当ニアラサルナリ」としている。この数字が確かであれば、従来言われており、また春城も随

筆で述べているような一円から一円八〇銭への値上げではなく、正確には教場費とも一円三〇銭から一円八〇銭への値上げということになる。³⁰ 第一条ではこれに続けて、乙として学費未納を防ぐ方策を案じ、さらに丙では学生たちに對する教課書貸与の仕組みを定めている。

こうした学校改革案を定めつつ、春城は日々の講義に精を出している。二月二四日、政治科の学生たちから「試験問題ノ多クシテ時間ノ足ラサルヲ訴ヘ減センコトヲ請フ」てきたが、春城はそれに応じなかった。学生たちは各自が一、二問減らして回答してきたため、「徒ラニ生徒ヲシテ放恣ナラシメ校制為メニ乱レン」ことを恐れた春城が学生を呼び出し、彼らの対応の非を論じ再試験の実施を伝えたと、翌日になって学生の代表が春城のもとを訪れ、謝罪したので再試験は実施しなかったというが（2ウ→3オ）、春城の教育姿勢を示す逸話と言つてよいだろう。

また三月には千葉で新設校の開校式に臨んでいるが、その際同地で「同攻会ノ支会」設立を画策している（17ウ）。同攻会は、東京専門学校の学生、講師らが知識を共有し、学術を攻究するために組織された団体で、一八八四年一月に邦語法律科の上野喜永次、昆田文次郎らが中心になってはじまった「以文会」をその始まりとする。³¹ 高田早苗らを規則取調委員として正式な規則制定を進め、同年三月、同攻会と改称、六月には大隈重信、河野敏鎌、前島密、小野梓らを来賓に迎え発会式がおこなわれた。以文会、さらには同攻会では共同で書籍を購入し、閲覧することを目的の一つとし、それらの書籍は東京専門学校図書室に排架され、のち、図書館に寄贈されることとなる。さらに翌年（一八八五年）三月、機関誌『中央學術雜誌』の刊行を開始する。³² 『中央學術雜誌』一号収載の「同攻会々員氏名表」に春城の名は挙がっていないが、第九号（同年七月刊）の「同攻会々員氏名表」にはその名が見えている。³³

そして巻末近く、いよいよ新潟行きが話題となってくる。三月二七日、出校した春城に対し高田が大隈の意向を伝える形で、渡英する吉田熹六にかわつて『新潟新聞』の主筆としてゆく気はないか、と尋ねてくる。これに対し春城は、

事小ナラズ、北越ハ余カ郷土ニシテ知人少ナカラズ、余ノ到ル、或ハ我政族ノ為メ便ナラン、然レトモ暫タ学校ヲ奈何セント、談話数刻、心稍々決ス、而シテ未タ明言セス、

として、即答を避けている。その後、大隈や尾崎行雄、前島密らからも新潟行きを強く勧められるが最終的に決定するのは、つづく第三巻でのこととなる。

《第三巻》

前述のとおり本巻には一八八六年（明治十九）三月三〇日から五月二五日までの記事が収載されているが、そこには春城が新潟新聞主筆として新潟行きを決定するまでの顛末がつつられている。前巻の終わり近くに新潟行きを打診された春城は、周辺の人々と相談を重ねた結果、ほぼ新潟新聞主筆就任の意を決したようで、前任の主筆である吉田熹六と元主筆の尾崎行雄に対し、自身の新潟行きの決定を促している（四月七日、3ウ）。ところがその翌日、吉田からの返書には新潟行きの暫時延引のことが記され、四月一〇日には「余概ね新潟行ノ破レタルヲ知ル」（4オ）と、破談がほぼ決定的となり、同月二五日、春城は尾崎に対し正式に新潟行きを謝絶している（9ウ）。その後さらに状況が変化したようで、五月三日「新潟ノ人漸ク降参ノ意ヲ伝セ余カ承諾ヲ請フ」（12オ）とあり、春城は新潟行きの準備を進め最終的には五月十三日条（16ウ）に、

新潟行初メテ決ス、新潟行ノ決セサル于茲一月有半ヲ餘セリ、彼レ人ニ対スルノ道ヲ知ラス、無礼咎ム可キ者尠カラス、余豈ニ之レカ招聘ヲ快シトスル者ナランヤ、只タ余ハ他ニ目的ヲ有ス、新潟ノ聘ヲ謝絶スル、余カ目的ヲ併セ損スルヲ奈何セン、両般ノ思想、一ハ惹キ一ハ推ス、而シテ余カ辞セサル者、余カ有スル目的ノ少ナラサル者アレバナリ、

とあるように、新潟行きを決定することになるが、この間に何があったのか。日誌本文中には、吉田や尾崎、さらには高田早苗、山田一郎らと協議を繰り返している様子が記されているが、決まりかけた新潟行きが頓挫し、最終的に「新潟ノ人漸ク降参」したことで実現するに至った背景には何があったのか。ここには春城の思惑と、新潟新聞側の考えの対立があったことが考えられる。

新潟県下における自由党を中心とした自由民権運動とそれに対する弾圧は、一八八三年（明治十六）三月の高田事件で一つの頂点を迎え、春城も投獄されたことは前に述べたとおりだが、この時期（一八八六年）になると一八九〇年の国会開設に向けて、立憲改進黨系、旧自由党系双方の人々が党勢拡大のための活動を展開していた。春城が自身の新潟行きについて「余ノ到ル、或ハ我政族ノ為メ便ナラン」（第二卷20オ）と考えたのも、そうした中での判断であった。

一方、当時の新潟新聞社長であった鈴木長蔵は、「保守的温和派」⁽³⁵⁾であったため、春城以前の主筆で同じく改進黨の吉田や箕浦勝人に対して「改進黨色をあまり出させなかつた」⁽³⁷⁾というから、春城と対立することはあきらかであった。のちに春城も「此一年間（入社直後の一年間＝引用者）は、自分もやはり前任者の如く自由の働きを許されず、随つて主義の爲めに十分貢献するなど、いふことは出来なかつた」と述べている⁽³⁸⁾。そうした鈴木との対立が、春城の新潟行きの障害となったことは想像するに難くない。前掲の日誌の記述に「人ニ対スルノ道ヲ知ラス、無礼咎ム可キ者尠カラス」とあるように春城もかなり憤慨しているが、しかし最終的には新潟新聞側が春城を受け入れることとなり、春城の新潟行きが決定する。なお翌年（一八八七年）には春城ら改進黨が経営権を掌握し、以後新潟新聞は改進黨系の機関誌という位置づけになってゆく⁽³⁹⁾。

五月十三日に新潟行きが決定すると、その後の動きは早く、東京専門学校講師の後任選定や近い人々への連絡を済ませ、十八日に送別会、二〇日には家族とともに新潟に向けて出発している。そして続く第四卷の冒頭近く、早く

も新潟新聞に出社し、社説を執筆している。

第三巻の主な記述としては、ほかに政学講義会から「東京専門学校講師」の肩書で講義録『政治原理』⁴⁰の執筆、刊行に言及している点も挙げてよいだろう。これまで高田早苗、山田一郎らとの共著として『主権論』⁴¹を出版した経験はあったが、単独での著作刊行はおそらくこれが最初ではないか。のち随筆を中心に多くの著書を刊行する春城の、著述家としての出発がここにある。

〈第四巻〉

第四巻は、前巻から直接文章が続く形で始まる。⁴²『政治原理』出版にかかわる事務処理を行い、その後は出社して社説を執筆する日々が続いている。ここで、この時期の春城がどのような社説を執筆していたか確認してみよう。五月二三日に新潟に着いた春城だが、翌日以降しばらくは関係者との懇談、宴席が続き、二八日にはじめて新潟新聞出社と社説執筆について言及している。当時の『新潟新聞』を確認すると、一八八六年（明治十九）五月二六日までは無記名の社説が掲載されており、まさにこの日から春城の署名入りで「草茅危言」と題する社説が掲載されている。⁴³

「草茅危言」については本資料第一巻、一月十五日条に「家ニ還リテ草茅危言ヲ筆ス、蓋シ頃日ノ時事ニ感スル所アリ、我素望ヲ提シテ政府及ヒ民間ニ質サントスルナリ」とあり、さらにその翌日には「草茅危言ヲ山一兄ニ寄せ、大務新聞ニ載セシコトヲ托ス」と『静岡大務新聞』への掲載を山田一郎に託している。⁴⁴はたして『新潟新聞』掲載の社説と、一月執筆のものは同一のものなのか。あらためて新聞掲載の「草茅危言」を確認すると、五月二八日（二七三七号）の「第一章 維新以還政治の沿革略」に始まり、六月十六日（二七五三号）「第十二章 結論」まで、途中未掲載の日もあるが、ほぼ連日掲載されている。この前後の社説を見ると、おおむね一日分で一話完結、多くても

二、三日の連載で終わっているのに対し、「草茅危言」は長期連載となっていることがわかる。全体を章立てしていることから、長文の原稿を分割して連載したと考えてよいだろう。また第一章の冒頭に「明治十八年朝廷大更革の事を論せんとするには先づ維新以来政治社会の状況如何を查察せざる可らず」と前年を振り返る文章で始まっていることから、社説掲載にあたり五月に新稿を起こしたというより、かねて執筆してあった原稿を活用したと考えてよいのではないだろうか。山田に送るにあたり「文稿通シテ十篇載セテ春城論稿ニ在リ」とあるが、今日この形で知られるものは見当たらないが、『新潟新聞』掲載のものにより、その内容を知ることができるのである。こうした既存の原稿を転用する事例は他にも見ることができる。それは五月十五日、横浜鳶座での演説会で「支那人学ブベシ学ブ可ラズ」と題する演説を行っているが（第三冊18オ）、『新潟新聞』二七六〇（二七六二号（一八八六年六月二四・二六日）に「清国入学ふ可し嫌ふ可らず」、さらに続く二七六三号（同月二七日）には「清国入学ふ可らず」と題する社説を掲載しており、これらは五月の演説に拠ったものである。

新潟到着後は、日誌に登場する人物も東京専門学校や大隈とその周辺の人物等から郷里新潟の「政族」や親戚、縁者へと変わってゆく。連日地元の名士や改進黨関係者との会合、酒席、演説会が続き、ときに「酔倒寓所ニ帰ル能ハス、酔裡金円ヲ失フ」（3ウ）こともあったようだが、すべてが新潟における改進黨勢力拡張を期してのものであった。

この頃の新潟県内の政党事情については永木千代治『新潟県政党史』に明快な説明がある。少し長いが引用しておこう。

当時県下の改進黨と旧自由派の勢力関係を見るに、自由派では明治十四年いちはやく馬場辰猪や板垣退助らが県下を巡遊して同志の獲得につとめ、さらに翌十五年には同じく高橋基一が県下を遊説して勢力の拡張に努め相当の効果を収めた。従つて明治十七年自由党が解党した後も同派は県内に根強い勢力を持っていた。一方改進黨は自由党

より後れて明治十六年一月、掌事小野梓が吉田熹六を伴うて県下を遊説したが、この頃は既に有志の多くが自由党に走つた後であつたため期待した成果は望み得なかつた。しかしなお上越には室孝次郎、大井茂作、中川源造、中越には内藤久寛、山口権三郎、下越には坂口仁一郎、市島謙吉らの有志が居つたことであるから党勢も次第に伸長されつつあつた。そこへ明治十八年になつてから東京専門学校（早稲田大学の前身で大隈重信経営）を卒業した川上淳一郎、広井一、大沢邦太郎、上野喜永次らが帰郷して市島謙吉らとともに各地に学術講演会を開いたり、また新聞雑誌等に執筆して盛んに改進黨を鼓吹したので共鳴者も増加し、明治十九年の頃には改進黨もまた相当の勢力を占めるようになった。⁽⁴⁵⁾

日誌には、右にあるような春城らによる党勢拡大のための活動が具体的に記されている。第四卷のなかから、春城が参加した会合の記録を探すと、主なものとして次のような場が設定されている。

- ・ 六月十三日「午後明治協会ニ臨ム、初メテ樋口元周二面ス、」
- ・ 六月十六日「今夜水曜会ナリ、例刻臨席ス、初メテ篠崎県令ニ接ス、又タ今井成秀ニ邂逅ス、成秀、新津病院長ナリ、頃日衛生会ニ臨席スル為メ来港セルナリ、」
- ・ 六月十九日「洪沢栄一來港シ、本タヲトシテ堀田楼ニ港地ノ有力者ヲ招ク、余又与ル、六時小崎ト共ニ行ク、来集スル者、無慮七八十名、県官、若クハ港地ノ紳商ナリ、新交ヲ結ブ人少ナカラス、」⁽⁴⁶⁾
- ・ 六月二〇日「午後、信城ト共ニ同窓会ニ臨ム、同会ハ中学校生徒ノ立ル処、出席員七十余名、余為メニ一場ノ演説ヲナシ、了リテ家ニ還ル、」
- ・ 六月二二日「小崎又タ追撰シテ来ル、相携テ堀田楼ニ到ル、今夕懇親会場ナリ、会スル者十余名、酔ヲ尽シテ還ル、」⁽⁴⁷⁾
- ・ 六月二五日「六時同所ニ到ル、官民ノ紳士来会、盛宴ヲ開ク、皆ナ渡辺収税長ノ招ニ応スルナリ、鈴木昌司ニ邂逅

ス、

・六月二七日「午後一時湊座ニ到リ疑論ヲ演ス、本日偶々日曜ニ属シ、聴衆堂ニ溢ル、終リテ島清ニ到ル、島清ハ余ヲ招クノ懇親会場ナリ、且クシシテ衆皆ナ集マル、皆十区内有名ノ人ニシテ、余カ旧識殊ニ多シ、大沢開会ノ趣意ヲ述ベ、余モ又一場ノ演説ヲ為シテ答フ、会衆五十余名、近来稀ナルノ盛会ナリト云フ、」

・七月十一日「朝瀛船ニ搭シテ亀田ニ赴ムク、同所ノ協会ニ臨マンガ為メナリ、大沢嘉登屋ニ在リテ待ツ、談話頃刻会場ニ到ル途ニ大倉ヲ訪ヒ、遂ニ会場ニ到ル、会員畠山嘉三、玉井貞太郎、渡辺貞次郎、大沢邦太郎、山川惣太、小林恒敬、小沢晋作、大沢徳次、佐藤八四三、村木禎二郎、児玉晋爺、大倉悌次、来り会ス、皆ナ当地富豪ノ子弟ナリ、談話協会将来ノ事ヲ議シ、遂ニ会員タルコトヲ諾シ、毎会臨席講義ヲ為スコトヲ約ス、先ツ政治学第一回講義ヲ為ス、終リテ置酒、余立テ一場ノ演説ヲ為シ、協会及ヒ書籍館設立ヲ賀ス、」

他にも日々人と会い、さまざまな問題について話し合っている。このうち、もっとも注目すべきはやはり「亀田協会」への参加であろう。亀田協会は春城を中心に「中蒲原郡の有力者が結成した集団であ」り、「その目的は会員が時々集会して、市島から時世の話や、政治上の評論や近く実施されるべき自治制度の講義を聞くこと」⁴⁸で、ここを春城は「運動の策源地」⁴⁹だとしている。

六月二〇日、大沢邦太郎が亀田協会の講師を依頼すべく春城のもとを訪れ、さらに翌月八日には畠山嘉三から同月十一日の亀田協会出席依頼の書簡が届いている。当日は大沢、畠山らとともに「当地ノ富豪ノ子弟」が集まり、春城がそこで「談話協会将来ノ事ヲ議シ、遂ニ会員タルコトヲ諾シ、毎会臨席講義ヲ為スコトヲ約」¹⁷（オ）しているのも、この集まりが組織作りに重要となると考えたからであろう。前述のように新潟県下の自由民権運動は、一八八三年（明治十六）の高田事件、さらには一八八四年一〇月の自由党解党を経て「崩壊・混迷の状態」⁵⁰にあったが、一八九〇年

の国会開設に向けて「政党復興」⁽⁵¹⁾の時代を迎え、いわゆる「不平等条約」改正なども論点とした活動が、旧自由党系、改進黨系の人々の間で繰り広げられることとなった。その過程でいかに多くの同志を集めるか、組織づくりが重要となり、春城が新潟に來た理由もそこにあつたわけで、亀田協會への参加もその一環ということになる。

こののち、一八八八年の同好会結成やその母体となつた殖産協會、さらには越佐議政会設立へと進む春城の改進黨勢力結集の動きは、これにつづく日誌のなかで触れることになる。

春城は日誌の他に毎年数冊の筆録や貼込帖などを残しており、そうした春城自筆の資料や春城自身が収集した資料は、近代日本の政治、社会、文化などを考察するうえで重要な情報を提供してくれる。これまでも部分的な引用や紹介はされているが、今回の日誌翻刻の再開を機に、あらためてその全容を明らかにすべく、調査をすすめてゆきたい。

注

(1) 早稲田大学図書館所蔵「市島春城関係資料」(請求記号・イ四 一九一九)は一括して特別資料扱い(貴重書)となっている。以下「春城資料」と称す。春城関係の資料としてはほかに「春城文庫」(新潟県立図書館蔵)がある。

(2) 「翻刻『春城日誌』」一〇二九『早稲田大学図書館紀要』二六〇六三、一九八六〇二〇一六年)。春城が館長に就任した一九〇二年(明治三五)から館長を辞した翌年、一九一八年(大正七)までが翻刻紹介されている。

(3) 春城の日誌には「春城日誌」、「小精廬日誌」などの名称が各冊に付されているが、ここでは特に断らない限り、全体の通称として「春城日誌」という名称を用いることとする。全体の概要を示すと次のとおりである(末尾の数字は「春城資料」の小番号)。

菰月蘋風樓日録 首〓四卷 明治十八・十九年 (五一六〓五一九)

桃浪書院日録 上・中・下 明治二一・二二年 (五二〇〓五二二)

庚寅日誌 明治二三年 (五二三)

春城日誌 明治二八～四二年 (五二四～五五三)

雙魚堂日誌 明治四三～四四年 (五五四～五五六)

雙魚堂起居注 明治四四～大正二年 (五五七～五六〇)

雙魚堂日誌 大正二～十二年 (五六一～五八八)

小精廬日誌 大正十二～昭和十四年 (五八九～六三六)

- (4) 「市島春城手帳」(春城資料 七七〇)。他の日誌、筆録が墨書であるのに対し、この手帳は鉛筆書で、病で手の自由が利かなくなった春城が日々のできごと、新聞記事について記しており、最後まで書き続けようとする何か執念のようなものを感じさせる。
- (5) 「春城資料」は新たに収蔵される市島春城関係資料を追加しながら、春城自筆の写本を主に、刊本、貼込帖など約一、〇〇〇点からなっている。日誌はその多くが一冊一〇〇丁程度の冊子に書き綴られている。

- (6) 春城資料 七六八。『春城八十年の覚書 附・平民論』(早稲田大学図書館編刊、一九六〇年)。

- (7) 春城資料 七五一～七五五。拙稿「翻刻解題 市島春城「自叙伝材料録 一～五」」(『早稲田大学図書館紀要』六四～六七、二〇一七年～二〇二〇年)。

- (8) 「自叙伝材料録」を執筆したのは一九一八年(大正七)のことである。この年は春城や高田早苗らが、大学経営の第一線を退くこととなった、いわゆる「早稲田騒動」と呼ばれる一大事に一応の区切りがついた年であった。そうした時期に春城は自叙伝執筆を思いついたという。このあたりの経緯については、前掲注7拙稿参照。

- (9) 以前、春城の随筆集を復刻した際の解説として春城の生涯と業績をひとりとおりまとめたが、詳細に述べるには至っていない(①拙稿「解説と解題」、『市島春城随筆集』十一、クレス出版、一九九六年)。また図書館長時代の日誌を翻刻していた春城日誌研究会が春城の年譜をまとめており(②春城日誌研究会「市島春城年譜」、『早稲田大学図書館紀要』五七、二〇一〇年)、研究会の中心だった金子宏二により、春城自筆資料がいくつか紹介されている(③金子宏二「市島春城自伝資料『憶起録』解題・翻刻」、『早稲田大学図書館紀要』五八、二〇一一年。④金子宏二「市島春城自伝資料『枕頭日誌』解題・影印・翻刻」、『早稲田大学図書館紀要』五九、二〇一二年。⑤金子宏二「市島春城自伝資料『慟哭録』解題・翻刻」、『早稲田大学図書館紀要』六〇、二〇一三年)。さらに春城の生家、角市家については⑥拙稿「市島春城の生家、角市市島家の歴史について 翻刻・新渴

県立図書館所蔵『吾家之歴史』（「早稲田大学図書館紀要」六二、二〇一五年）がある。

(10) 春城の生涯や小野、大隈らとの出会いについては前掲注6、7、9の各論考による。

(11) 前掲注6、五ページ。

(12) 「退学願書」（「愧存経歴文書」、春城資料：八九五）。

(13) 前掲注7第二冊。

(14) 「高田事件」は一八八三年（明治十六）三月の新潟県頸城自由党员に対する政府の弾圧事件。自由党は春城の立憲改進黨とは相対する立場にあったが、高田事件は「反対党の嫌疑事件であるが、藩閥政府を敵とする点に於てハ反対党も同様」だとして自由党擁護の立場で論陣を張った。そのなかで高田警察署長の言い間違い（「干戈」を「干才」と言ったという）を記事にしたことが罪に問われたという（前掲注7第二冊）。

(15) 前掲注9②。

(16) 前掲注6書一〇、三八ページ。この家は「墨田川を見はらす風流」な場所にあり、小野梓の家も近いこの家を、春城は「枕江楼」と名付けていた。家が破産し、大学を中退、父の病氣療養という状況にあって、日常生活の状況をつぶさに記しておく必要を感じたことが執筆のきっかけということかもしれない。

(17) 日本で初めて作られた本格的な手帳といわれている（井原泰樹「手帳」、『日本大百科全書』ジャパンナレッジ版）。

(18) 草創期の早稲田大学（東京専門学校）校友会については、拙稿「早稲田大学草創期における校友会の事情 市島春城」『越佐会二十五周年記念演説』による（「早稲田大学図書館紀要」六一、二〇一四年）参照。

(19) 山田一郎（一八六〇～一九〇五）は春城や高田早苗らとともに東京専門学校、立憲改進黨の活動を進めていたが、この当時は静岡にあって主として『静岡大務新聞』で筆を執っていた。薄田貞敬『天下之記者 一名・山田一郎君言行録』（実業之日本社、一九〇五年）、高島俊男『天下之記者「奇人」山田一郎とその時代』（文藝春秋、二〇〇八年）。

(20) 「春城雑纂」十四（春城資料：六八三）。

(21) 創立当初、大隈家からは年額二千元、月額一六六円余、一八八三年一月から一八八五年八月まで月額一五〇円、さらに翌年三月までは月額七五円と減額しつつも支援が続いていた。『早稲田大学百年史』第一卷（早稲田大学、一九七八年）五一七ペー

ジ、第十三章「学苑の危機」月謝値上げ問題。

(22) 高田早苗『半峰昔ばなし』「次ぎは学校の独立」(早稲田大学出版部、一九二七年)。

(23) ①前掲注22、②市島春城「校史に記銘さるべき建議」「大会議」「八十銭の増額は学校の独立問題」(随筆早稲田、翰墨同好会・南有書院、一九三五年)。

(24) 『早稲田大学百年史』第一巻(前掲注21) 五二三ページ。

(25) 前掲注23②書、二五ページ。

(26) 「東京専門学校改革考案」(「春城雑纂」十四、春城資料、六八三)。

(27) この時提出された改革案については『廿五年記念早稲田大学創業録』(早稲田大学、一九〇七年)でも次のように触れている。すなわち「明治十九年三月に至りては、講師高田早苗、天野為之、坪内雄蔵、田原栄、市島謙吉、三宅恒徳(法学士故人)氏等の大隈伯爵に提出したる学校改革案に基づき、断然独立経営の道を講ずることとなし」とある。

(28) 前掲注23②書、二四ページ。

(29) この数字は春城の筆録によるものである。

(30) 一八八五年(明治十八)七月の「東京専門学校規則要領」(「中央学術雑誌」九、一八八五年七月、国立国会図書館デジタルコレクション収載)によれば、「学資金」として通学生には束脩(一円)、月謝(一円)、教場費(三〇銭)、寄宿生にはそれに加えて膳料(二円八〇銭)、塾費(三〇銭)と定められている。「束脩」は入学金と考えられるので、一般的な通学生の負担は月に一円三〇銭ということになる。ただ東京専門学校開校時の「開設広告」には「受業料毎月金一円」とあり、教場費については触れられていない。『郵便報知新聞』附録掲載、『早稲田大学百年史』第一巻(前掲注21) 四三九ページ収載。

(31) 同公会については『早稲田大学百年史』第一巻(前掲注21) 五七六ページ「同公会の成立」、『早稲田大学図書館史』資料と写真で見える一〇〇年(同館、一九九〇年)参照。

(32) 持主兼印刷人・高田早苗、編輯人・檜崎俊夫、発行所・団々社支店。国立国会図書館デジタルコレクションに第一号から九号までの画像が掲載されている。

(33) 同公会はあくまでも「東京専門学校講師得業生学生、其他東京専門学校ニ縁故アル法理文三学篤志ノ人々ノ会合」(「中央学

術雑誌」一号「例言」であり、「互ニ智識ヲ交換シ學術ヲ攻究シ永ク交誼ヲ保持センコトヲ企テ」（『同号』「同政会沿革」）るものであるが、発会式の来賓には大隈とその周辺の政治家たちが揃っている。春城が千葉でその支会設立をはかった背景には、のちの新潟での活動がそうであるように、政治的な組織づくりがあったと考えてもよいのではないか。

- (34) 一八六〇～一八九一。明治時代の新聞記者、政治家。慶応義塾にまなび、郷里で徳島立憲改進黨を組織。一八八四年（明治十七）新潟新聞主筆。欧米に遊歴後も新聞人として活躍（『日本人名大辞典』ジャパンナレッジ版）。

- (35) 新潟の豪商で新潟市長、衆議院議員もつとめた。家は江戸時代には廻船問屋を営み、自身も明治になってから東京新潟間、新潟長岡間に船を走らせた。新潟新聞では一八七七年（明治一〇）の創刊当初より社長となり、一八七九年には尾崎行雄を主筆に迎えた。①村島靖雄編『越佐人名辞書』（同書刊行会、一九三九年、歴史図書社、一九七四年復刊）、②阿部恒久「新潟新聞」（『国史大辞典』ジャパンナレッジ版）。

- (36) 松井敬「新潟県新聞史」（『新聞研究』十九、一九五二年）。

- (37) 前掲注35②。

- (38) 市島春城「郷国に於ける政争時代 附 記者時代」（『春城代醉録』、中央公論社、一九三三年）。

- (39) 前掲注35②。

- (40) 『政治科講義録 政治原理』第一、二回（横田敬太〈政学講義会幹事〉、一八八六年六月、国立国会図書館デジタルコレクションに全文が掲載されている）。

- (41) 傍木哲二郎編『主権論』（丸家善七、一八八二年）。標題紙、奥付の編者には傍木の名があるが、編者による緒言に東京大学学生であった山田喜之助、岡山兼吉、高田早苗、山田一郎、市島謙吉が「討議講窮」して作成した原稿を編纂したものであることが記されている。国立国会図書館デジタルコレクション参照。

- (42) 書き上げた日誌を後から製本したのであれば、こうした形にはならないので、製本済の冊子を使用して書かれたものと思われる。また冒頭五月二六、二七日の記述を欠き、二八日からの三日間は日付を誤記していることなどから、執筆にあたり何らかの混乱があったことが考えられる。あるいは、第一巻だけでなく、全巻について後日書き写した可能性も考慮すべきだろう。

- (43) 『新潟新聞』については早稲田大学李健熙記念図書室所蔵のマイクロフィルムに拠った。なお、五月二七日はマイクロフィル

ムに収載されていない。

(44) さらに三月七日には小川為次郎にも贈っており(第二冊8オ)、まとまった形で複製作成されたものと思われる。

(45) 永木千代治『新潟県政党史』(第二版、同書刊行会、一九六二年) 一三六ページ。第一版は一九三五年刊。

(46) 洪沢はこの時期、神奈川、静岡、愛知、さらには滋賀から北陸各県をまわり、視察をおこなっている。洪沢の日記によれば、五月二六日に自邸を出発、仙石原で牧場を視察、そこから沼津、藤枝、豊橋、熱田の各地を巡り、四日市では紙質製造所、紡績機械などを視察している。その後、桑名、大垣から長浜を経て北陸に入り、金沢では製糸所を一覧、高岡では郵船会社の倉庫なども見て回っている。この間に各地の経済界、官界の人々との会合を繰り返しており、六月十五日に糸魚川、その翌日には柏崎で地元の銀行関係者らと懇談、この日(十九日)の午前、ようやく新潟に到着している。「洪沢栄一日記」明治十九年四日市伏木新潟巡回紀行(洪沢青淵記念財団龍門社編『洪沢栄一伝記資料』二九、同書刊行会、一九六〇年)参照。

(47) 一八四一―一八九五。越後国頸城郡の地主の家に生まれる。県内最初の政治結社である「明十社」の創設に参加、一八七九年(明治十二)の第一回県会議員選挙に中頸城郡から当選、一八八一年には頸城自由党結成に参加するなど新潟における自由民権運動では中心的役割を果たした。江村栄一「鈴木昌司」(『国史大辞典』ジャパンナレッジ版)、前掲注45書。

(48) 兼近輝雄「立憲改進黨の倶楽部組織について 同好会を中心として」(『内田繁隆先生古稀記念 政治の思想と歴史』、記念論文集刊行会、一九六三年、三八ページ)。

(49) 前掲注6書、六ページ。

(50) 阿部恒久『近代日本地方政党史「裏日本」化の中の新潟県政党史運動』(芙蓉書房出版、一九九六年)五七ページ。以下、この時期の新潟県下を中心とした自由民権運動については、本書および『新潟県政党史』(前掲注45)を主に参照した。

(51) 前掲注45書、一三六ページ。

(52) 前掲注48、50の各論考、および林茂「立憲改進黨の地方分布」(『社会科学研究』九一四・五、一九五八年、のち、同『近代日本政党史研究』、みすず書房、一九九六年に収載)等参照。

〔翻 刻〕

凡 例

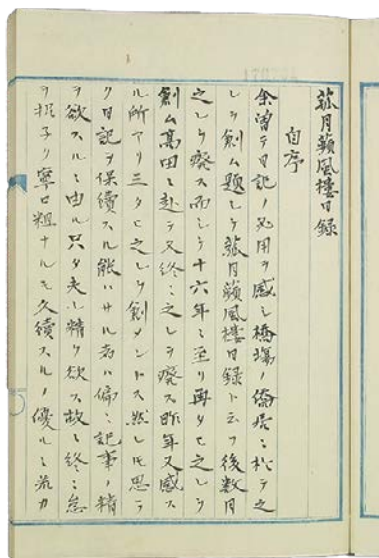
- ・各丁の裏表は「」で区切り、一丁表は(1オ)のように記した。
- ・翻刻にあたり読点を補記した。文中の傍点(、、)は特に断らない限り原本のままである。
- ・旧字、俗字、異体字等はおおむね常用漢字を用いた。具体的には、昇、高、吉、京など、同一人物、事象で混用していることもあるので、いずれも昇、高、吉、京に統一した。
- ・合字「ㄅ、メ、氏」は「コト」「シテ」「トモ」とした。
- ・原本の修正箇所は修正後の形のみを記載し、明らかな誤字については、初出部分に()で示した。
- ・人名、地名等で省略しているものについては適宜()で補記した。
- ・日付下の一字(二部二字以上) 空きは原本のママである。

新・翻刻「春城日誌」(一)

料紙等

縦二〇・二×横十四・八cm (二巻のみ三一・一×十四・九cm)、
青野半葉一〇行、匡郭子持枠、版心に魚尾(上のみ)、
下部に〇。本文墨書。

〇首 卷



首卷1オ(自序)

翻 刻

「菰月蘋風樓日録 首」(イ四 一九一九 五一六)

〈表紙左端〉

「菰月蘋風樓日録 首卷」

〈表紙見返〉

「38—9302」（黒ナンバリリング）

〈遊 紙〉一丁

〈二丁表上部欄外〉「176781」（紺ナンバリリング）

〈本 文〉

菰月蘋風樓日録

自序

余曾テ日記ノ必用ヲ感シ、橋場ノ僑居ニ於テ之レヲ創ム、題シテ菰月蘋風樓日録ト云フ、後数月之レヲ癡ス、而シテ十六年ニ至リ再タヒ之レヲ創ム、高田ニ赴テ又終ニ之レヲ癡ス、昨年又感スル所アリ、三タヒ之レヲ創メントス、然レトモ思ラク、日記ヲ保続スル能ハサル者ハ偏ニ記事ノ精ヲ欲スルニ由ル、只タ夫レ精ヲ欲ス故ニ終ニ怠ヲ招ねク、寧口粗ナルモ久続スルノ優ルニ若カ」（1オ）スト、印刷局製スル所ノ懷中日記ヲ購フテ客年十二月十三日初メテ筆ヲ起シ、爾来怠ラス今日ニ至ルヲ得タ

リ、然ルニ去月小野梓君ノ逝去ニ遭ヒ、君カ伝ヲ編セントシ、遺族ニ就テ資料ヲ求ムルニ、君カ手録ニ係ル留客齋日記^①六卷アリ、明治十二年二起リテ君カ逝去ノ前月ニ至ル記事、明瞭公私細大ノ事漏ラスナク皆ナ漢文ヲ以テ筆シ、間々加フルニ君カ隨時心中ニ浮フノ議論ヲ以テス、由テ編伝ノ際、大ニ便利ヲ覺ヘリ、以之大ニ感スル所アリ、余今微賤天下ノ休戚」（1ウ）ニ関スル所ナシト雖トモ、春秋尚ホ富ミ、前途甚タ遠シ、焉ンゾ自ラ棄ツ可ケンヤ、小野君ニシテ日記ナクンバ人誰レカ君カ功烈ヲ知ランヤ、日記失フ可ラス、於是乎懷中日記ヲ癡シ別ニ日録ヲ製シ、旧題ヲ冠シ菰月蘋風樓日録ト云ヒ、自ラ戒メテ之レヲ癡セサランコトヲ期ス、

明治十九年二月十七日 春城学人誌「春城氏」（朱文方印）「子謙」（白文方印）（2オ）
（2ウ白紙）

菰月蘋風樓日録

首卷

此卷明治十八年十二月十三日ニ始マリ明治十九年 月 日

二畢ル、

十八年十二月十三日ヨリ十九年二月十七日ニ至ルノ日記ハ懷中日記ヨリ謄写セルモノニ係ル、(以下余白) (3オ)

(3ウ白紙)

明治十八年日録

○

十二月十三日 晴、信濃學生懇親會員ノ招キニ応シ、築

土松風亭ニ一席ノ演説ヲ為ス、午後高田^(早苗)、天野^(為之)ト野村

文夫⁽²⁾ヲ団々杜ニ訪ヒ、中央學術雜誌印刷売捌依頼ヲ解

カンコトヲ談ス、局ヲ結ハス、十六日再議ヲ約シテ帰

ル、三時富士見町富士見軒ニ校友会開会ノ宴ヲ開ク、

蓋シ校友会ハ東京専門学校得業生ノ為メニ設クル者ニ

シテ、益々親睦ヲ固フシ、学校ト永ク関係ヲ完フセシ

メンガ^(4オ)為メナリ、曩キニ田原^(実)原余ニ語ルニ、

此会ヲ設クルノ必用ヲ以テス、余又タ平素之ヲ思フ、

遂ニ相議シテ方案数条ヲ定メ、今日発表ノ運ニ至リタ

ルナリ、会スル者講師、議員、得業生四十余名、酒杯

ノ間演説沸クガ如ク、余モ又タ一場ノ演説ヲ為ス、帰

路小川^(為次郎)ヲ訪ヒ、深更家ニ還ル、

十四日 昇校書生ニ課ス、家ニ帰り書ヲ桐原捨⁽³⁾ニ投ス、

蓋シ中央學術雜誌印刷ノ事ヲ商議スルナリ、

十五日 曠課ノ日、校ニ昇ラス、竹村⁽⁴⁾、中村来リ、賃⁽⁴⁾

ウ⁽⁴⁾幣論ノ講義ヲ受ク、

十六日 昇校書生ニ課ス、

十七日 昇校書生ニ課ス、

十八日 風邪、校ニ昇ラス、尽日爐ヲ擁シテ監獄原論ヲ⁽⁵⁾

校ス、

十九日 昇校書生ニ課ス、此日寒凜大ニ加ハル、午後三

時、遂ニ藤六⁽⁵⁾ヲ飛ハス、満街須臾銀世界ト化ス、初夜

地震フ、此日在岡山^(静岡)田^(二)一ノ書ニ接ス、冬期学暇ヲトシ

テ静岡ニ遊説センコトヲ勸ムルナリ、^(5オ)

廿日 休暇日、午前政学研究会ニ臨ムテ一席ノ演説ヲ為

スノ約アリ、感冒全ク愈ス、咽喉傷ムコト劇シク発声

ニ便ナラス、遂ニ使ヲ飛ハシテ臨席ヲ謝ス、坪内^(前)兄ヲ

訪フテ事ヲ話ス、橘^(南)兄来リ会ス、遂ニ橘兄ヲ伴フテ上

野蓮塘ニ散策ス、道路泥濘深フシテ漫步ニ便ナラス、蓬萊亭ニ一酌ス、一醉大ニ咽喉快ヲ覺ユ、初夜家ニ還リテ温臥ス、

廿一日 咽喉未タ快ヲ覺ヘス、且ツ雜誌條約ノ事迫ルヲ以テ之レヲ処理センガ為メ校ニ昇^(5ウ)ラス、桐原ヲ三益社ニ訪フ、遇ハス、岡山ヲ訪ヒ再タヒ桐原ヲ訪フ、又タ遇ハス、車ヲ飛ハシテ学校ニ到リ雜誌改良ノ主意書ヲ筆ス、帰路高田ヲ訪フ、遇ハス、坪内、橘ニ兄ト木下ヲ訪ヒ事ヲ話ス、

廿二日 午前桐原ヲ三益社ニ訪フ、遇ハス、枝元^(辰辰)ニ会シ事ヲ話シ桐原ニ伝シム、帰路岡田ヲ団々社ニ訪ヒ改正條約案ヲ示ス、午後三時偕樂園ニ日本經濟会ノ妄年会ヲ開ク、余又タ赴ク、酣醉、帰路小川ヲ訪ヒ心事ヲ話シ家ニ還ル、今^(6オ)夜、山田一兄ノ電報ニ接ス、
念三日 校ニ昇リ生徒ニ課ス、午後大隈校主自邸ニ妄年会ヲ開キ、議員、講師ヲ饗ス、余又与ル、前島^(密)、北島^(密)、沼間^(密)等諸人会ス、席上内閣更迭ノ内情ヲ聞ク、初更家ニ歸リ小川、学友社、団々社等ノ書ニ接ス、

念四 校ニ昇リ書生ニ課ス、斎藤和太郎、静岡ヨリ来リ余ヲ学校ニ訪フ、斎藤ハ政治学得業生ニシテ、現ニ静岡大務新聞ノ主筆ナリ、余及ヒ高田ノ遊岡ヲ促サンカ為メ、殊ニ来セルナリ、放^(6ウ)課後相伴フテ高田ヲ訪フ、歎談頃刻、遂ニ遊岡ヲ諾ス、本日学校ヲ閉テ冬期学暇ヲ与フ、

念五 午前、岡山ヲ訪フテ遊岡ノ事ヲ告ケントス、遇ハス、演題ヲ筆シテ山一二送ル、蓋シ遊岡ノ際、演説料ニ供センガ為メナリ、午後一時、学校忘年会ヲ二州橋青柳楼ニ張ル、会スル者六十余名、初更高田ト相携テ帰ル、帰路書肆ニ入り醉古堂掃^(龍徳)一部ヲ購フ、

念六 午後、天野ヲ訪ヒ事ヲ話ス、田原来リ会ス、告クルニ前々懇親会席上股野^(辰野時中)ノ亡状ヲ以テ^(7オ)シ、処分法ヲ問フ、高田ヲ待テ決セントス、来ラス、意見ヲ遺シテ去ル、六時桐原ヲ三益社ニ訪ヒ雜誌ノ事ヲ話ス、

廿七日 高田ヲ訪フテ団々社契約ノ事ヲ話セントス、遇ハス、天野ヲ訪ヒ相伴フテ団々社ニ到リ、野村、岡田

ト契約ノ事ヲ談シ、遂ニ條約ヲ締結ス、夜間高田来リ訪フ、

念八 在家、武市彰一來リ訪フ、贈ルニ阿州徳島産ノ砂糖ヲ以テス、三益社契約案ヲ筆ス、

念九 昼間街頭ニ漫步ス、晩間高田、天野ト上埜^(7ウ)

蓬萊亭ニ登リ桐原ヲ招ネキ置酒、條約ヲ結了ス、

三十日 朝、香坂ヲ訪ヒ事ヲ話ス、尽日家ニ在リ、監獄
原論ヲ校ス、

三十一日 家人ト迎歳ノ備ヲ為ス、晩間田原ヲ訪ヒ事ヲ話ス、還家一浴、家人ト送年ノ杯ヲ挙ク、今夜親姻故
旧ニ賀状ヲ発ス、(以下余白)(8オ)

(8ウ白紙)

明治十九年日録

○

一月一日 暁起、家人ト猷酬、熊倉老ヲ四谷ニ訪ヒ家大人ヲ番町ニ訪フ、帰寓後賀状ニ接ス、蓋シ例年府下祝賀スル所百処ニ過ク、而シテ明旦静岡ニ赴クノ約アリ、行李ヲ整フニ忙ハシ、故ニ廢ス、

新・翻刻「春城日誌」(一)

二日 午前八時高田兄ヲ待テ發セントス、結束待ツコト数時ニシテ来ラス、車ヲ飛ハシテ新橋停車場ニ至ル、十一時兄来ル、余ニ告クルニ昨夜云^(9オ)々ノ事アリ、為メニ定刻来ルコトヲ得スト、余聞テ愕然、即チ火車ニ登リ神奈河^{アヅマ}ニ至ル、直チニ馬車ヲ命シテ大磯ニ抵リテ哺シ、夕陽小田原ニ達シ、小伊勢屋ニ投ス、此夜雜誌改良ノ廣告案手続等ヲ筆シテ天野、檜崎^(度去)ニ投ス、

三日 払曉、籃輿ヲ雇フテ函山ヲ踰ユ、寒風凜烈、骨ヲ刺シ、毛衣絹帛猶ホ勝ヘス、漸ヤクニシテ湖水ニ達シ、一茶店ニ憩フテ一酌、僅カニ寒ヲ防セク、咳嗽甚シク感冒ノ氣アリ、午後更ラニ籃輿ニ上リテ發ス、晩間追分甲州舍ニ投ス、疲^(9ウ)勞甚シク浴後直ニ寢ニ就ク、
四日 暁起、腕車ヲ僦フテ興津ニ抵リ、一碧樓ニ登リ三保田子ノ風光ヲ馳眺シテ一酌ス、感冒益々甚シク、前年此地ヲ經過セル時ノ快想アラズ、興津鯛¹⁰数尾ヲ購フテ腕車再タヒ發ス、小吉田ニ抵レハ一僮夫アリ、余カ車ヲ遮リ一札シテ問フテ曰ク、諸君ハ東京ノ賓客ニア

ラズヤ、山田先生諸君ヲ待テ此地ニ在リト、一茶店ニ入ル、山田兄迎テ余等ヲ階上ニ導ク、此辺ノ有志者四五輩来リ会ス、一酌シテ与ニ静岡ニ」(10オ) 赴ムキ大万舎ニ投ス、岸小三郎¹¹、余等ニ先ツコト一日来リテ同舎ニ在リ、今夜大務新聞社員ト芙蓉楼ニ飲ム、感冒益々甚シキヲ覺ユ、

五日 森某、吉見某等、余等ヲ旅寓ニ訪フ、午後六時演説会ヲ桜川座ニ開ク、余「処世ノ要ハ資格ヲ弁スルニ在リ」ヲ演ス、会スル者千二百余人、蓋シ未曾有ノ盛会ナリト聞ク、

六日 朝餐了リ高田兄ト求友亭ニ登ル、求友亭ハ割烹店ナリ、余等ノ旅舎ニ在ルヤ来客織ルガ如クニシテ寸暇ヲ得ス、今之レヲ避ケタ」(10ウ) ルハ學術雜誌ノ稿ヲ筆センガ為メナリ、午時齋藤、鈴木等来リ訪フ、相携テ街上ヲ漫步シ、遂ニ仙源ニ遊ムテ旅舎ニ帰ル、今夜官民懇親会ヲ芙蓉楼ニ開ク、余等又タ与ル、会スル者百三十名余、会主ノ需ニ応シテ一場ノ演説ヲ為ス、帰路山田兄ト一店ニ入り飲食シ、共ニ心事ヲ語ル、旅

舎ニ帰レバ岸独リ蔭ニ在リ、客窓無聊ニ堪ス、遂ニ相携テ双街ニ遊ブ、

七日 山田、高田両兄ト石部村ノ温泉ニ到ル、温泉静岡ヲ距ル二里許、海ニ瀕シテ眺望佳ナリ、」(11オ) 蓋シ来客ヲ避ケ与ニ政治上ノ事ヲ閑談セント欲スルナリ、一浴終リテ杯ヲ呼ヒ、閑話数刻ヲ移シテ帰ル、今夜大務新聞社主佐倉常民、齋藤、坂井等ト求友亭ニ飲ム、

八日 懇親会場ノ演説ヲ筆シテ大務新聞ニ投ス、午後山田ヲ訪ヒ与ニ心事ヲ閑談ス、今夜森某ノ招ニ応シ、芙蓉楼ニ飲ム、会スル者六七輩、皆静岡屈指ノ商賈ナリ、

九日 晴、今晩静岡ヲ発ス、岸事アリテ止マル、山田、齋藤、三島ノ政談演説会ニ赴クノ約アリ、」(11ウ) 与ニ行ヲ啓ク、坂井又送リテ駅端ニ来ル、路々清見寺ヲ過ク、諸人入りテ見ンコトヲ欲ス、乃チ一覽シ、一碧楼ニ午哺シ六時三島ニ達シ相模屋ニ投ス、有志者両三輩来リ訪フ、晚餐終リ山田、高田、二兄ト蓬萊亭ニ飲ミ、別ヲ告ク、泥酔遂ニ旅舎ニ帰ル能ハス、

十日 払曉籃輿ヲ雇フテ発ス、函山ノ氣候前日ノ如ク凜

寒ナラス、且ツ興丁脚捷ニシテ能ク坂路ヲ走ル、感冒初メテ快ヲ覚ユ、六時間函嶺ヲ越へ、馬車神奈川ニ至リ、夜十一時家ニ還ル、」(12オ) 賀状ニ接ス、一酌寢ニ就ク、

十一日 雑誌ノ事ヲ処理センガ為メ校ニ昇ラス、午前家ニ在リ、雑誌ノ稿ヲ草ス、終リテ天野ヲ訪ヒ雑誌ノ事ヲ処ス、小川ヲ訪フテ晩間家ニ還ル、

十二日 休暇日、岡山ヲ訪ヒ静岡行ヲ話シ、山田兄ノ事ヲ語ル、忽チ小野梓君ノ訃ニ接ス、驚愕措ク所ヲ知ラス、岡山兄ト後事ヲ語り、山田兄ニ書ヲ投シテ之レヲ報ス、

十三日 昇校書生ニ課ス、信書ヲ筆シテ、小野君」(12ウ)ノ訃ヲ諸友ニ報ス、且ツ高田等ト葬送ノ事ヲ商議ス、小川ヲ訪ヒ小野君余烈ヲ発揚センコトヲ議ス、

十四日 小野君葬式ノ為メ、本日校ヲ閉ツ、午後二時出棺、谷中天王寺ニ葬ル、親故旧縁送ル者十余人、埋葬ノ際、^{痛恨}帳惆悲ミニ堪ス墓地ヲ去ル能ハス、会葬者既ニ去リテ、余、岡山、小川、高田ト止マル、帰路相携テ

上埜鳥八十二到リ小野君ノ芳烈ヲ発揚スルノ策ヲ議ス、遂ニ遺稿ヲ編スルコト、伝ヲ編纂スルコト、石碑ヲ建設スルコト等ニ決ス、^⑫即チ席上信書ヲ草シテ、山一兄ニ報」(13オ)ス、

十五日 校ニ昇リ書生ニ課ス、家ニ還リテ草茅危言ヲ筆ス、蓋シ頃日ノ時事ニ感スル所アリ、我素望ヲ提シテ政府及ヒ民間ニ質サントスルナリ、

十六日 校ニ昇リ書生ニ課ス、草茅危言ヲ山一兄ニ寄セ、大務新聞ニ載センコトヲ托ス、文稿通シテ十篇載セテ春城論稿ニ在リ、今夜小川、岡山、高田ト小野義真^⑬ヲ橋場ニ訪ヒ、梓君ノ事ヲ議スルノ約アリ、五時岡山ヲ英吉利法律学校」(13ウ)ニ訪フ、既ニシテ小川来ル、而シテ高田来ラス、刻ヲ過キンコトヲ恐レテ言ヲ高田ニ遺シ車ヲ飛ハシテ橋場ノ水莊ニ義真ヲ訪フ、義真門ヲ開テ余等ノ到ルヲ待ツ、梓君ノ死ヲ吊シ、且ツ君在世ノ事歴ヲ談シ、将来ヲ議ス、義真大ニ覚ル所アリ、厚ク余等ニ礼ス、時正サ二十一時、共ニ辞シテ今夜月將サニ明々、墨江ニ映シテ激灑銀ヲ漂ハス、余顧

ミテ歎シテ、嗚呼吾人カ初メ改進黨ヲ樹立スルヤ、深夜此処ヲ往来シテ小野君ト党事ヲ談セルコト」(14オ) 僅カニ三年前ニ在リ、月色ハ旧ニ由テ明カニ、水声ハ其音ヲ改メス、而シテ人ハ既ニ無シ、慨スルニ勝ユ可ケンヤ、低徊去ル能ハサル者久シ、既ニシテ家ニ還レバ、既ニ十二時ヲ過ク、一酌寒ヲ護シテ寝ニ就ク、十七日 日曜、家ニ在リ、死生之理ヲ筆シ了ル、雜誌ニ登載センガ為メナリ、午後信濃學生親睦会ニ赴ク、家ニ還リ山一兄ノ書ニ接ス、寄嶋渡会員書ナリ、蓋シ小野君ノ死ニ関シ政族ヲ激セントスルナリ、」(14ウ)

十八日 校ニ昇リ書生ニ課ス、

十九日 朝餐前香坂ヲ訪ヒ事ヲ話ス、校ニ昇リ書生ニ課ス、放課後小川、天野、佐藤慎等ヲ訪フ、家ニ還リ山一兄ノ書ニ接ス、間行東京ニ来リ事ヲ議センコトヲ約スルナリ、

念日 校ニ昇リ書生ニ課ス、改良雜誌印刷成ル、裁レ体佳ナラズ、世ニ公ニス可ラズ、遂ニ高田ト議シ発売ヲ止メテ更ラニ改良ヲ加ヘンコトヲ議ス、相伴フテ天野

ヲ訪ヒ意見ヲ陳ス、天野諾ス、車ヲ飛ハシテ桐原ヲ訪フ、逢ハス、家ニ還リ」(15オ) 前川亀次郎ノ書ニ接ス、贈ルニ氏カ著學術叢談ヲ以テス、之レヲ中央學術雜誌ニ登録センコトヲ請フナリ、

念一日 雜誌印刷談判ノ為メ校ニ昇ラス桐原ヲ仲徒士町ニ訪フ、遇ハス、三益社ニ訪フ、亦タ遇ハス、手塚ニ面シ談判ノ要領ヲ話ス、夜ニ入リ与ニ桐原ヲ訪ハンコトヲ約シテ帰ル、今夜桐原ニ会シテ談判ヲ開ク、半ハ成リテ家ニ還ル、山一兄ノ電音ニ接ス、

念二日 校ニ昇リ書生ニ課ス、放課後高田ヲ訪」(15ウ) ヒ雜誌原稿ヲ筆シ、且ツ将来雜誌事務ノ整理案ヲ定ム、余ニ専ラ任センコトヲ請フ、諾ス、今夜高田ヲ伴フテ桐原ヲ訪フノ約アリ、夜深フシテ果サス、

念三日 校ニ昇リ書生ニ課ス、本日午後二時横浜學術演説会ニ臨ムノ約アリ、放課後家ニ還リ結束行カントス、遇々小川ノ来書ヲ得、先ツ訪フ、小野君伝ノ事ヲ談ス、頃刻ニシテ停車場ニ赴カントス、三益社ヲ過キ桐原ヲ訪フ、遇ハス、手塚ヲ桶町ニ訪フ、又タ遇ハス、雜誌

談判ノ」(16オ) 結局急ヲ要シテ与ニ在ラズ、思フニ遷延セハ或ハ事ヲ誤ラン、遂ニ車ヲ飛ハシテ桐原ヲ仲徒士町ニ訪フ、又タ遇ハス、時既ニ夕陽、電信ヲ横浜ニ通シテ遂ニ臨席ヲ辞ス、

念四日 家ニ在リ、雑誌ノ稿ヲ編輯ス、檜崎来リ助ク、桐原、手塚来リ、雑誌印刷ノ談判ノ局ヲ結ブ、

廿五日 校ニ昇書生ニ課ス、放課後高田ヲ訪ヒ雑誌印刷條約ノ事ヲ話ス、還家中村弼来リテ帰京ヲ報ス、」(16ウ)

念六 雑誌原稿ヲ三益社ニ送ル、午後昇校檜崎ト雑誌ノ事ヲ処ス、遂ニ三益社ニ到リ雑誌発刊ノ順序ヲ商量ス、高田来リ話ス、坪内来ル、小説ノ資料ヲ与フ、

念七 昇校課書生、坪兄来ル、小説ノ資料ヲ与フ、山一ニ電音ヲ通シ来京ヲ促ス、小川ヲ訪ヒ小野君伝ノ事ヲ談ス、遇々山下保馬來ル、材料ヲ余ニ送ルコトヲ約ス、今夜雉橋⁽¹⁶⁾ニ憲法會議アリ、小川ヲ辞シテ赴ク、隣席員少数ニシテ開会スル能ハス、」(17オ)

念八日 昇校課書生、山下、小野君伝ノ資料ヲ送ル、午時資料調査ノ為メ校ヲ辞シテ家ニ還ル、青地雄次郎、

山一ノ書ヲ齎ラシテ静岡ヨリ来リ余ニ与フ、披展文字激切、余力怠慢ヲ咎ム、事当ラサル者アリト雖トモ、余兄ガ心切平素ニ異ナラサルニ服ス、高田ヲ訪フ、遇ハス、田原ノ書ニ接ス、晚間田原来リ校事ヲ議ス、今夜深更灯ヲ剔リテ寄鷗渡^(老)、會員書ヲ筆ス、蓋シ會員ヲ会シテ激切大ニ政族ノ事ヲ論セント欲スルナリ、此日政学研究会ニ臨ムノ約アリ、忙ヲ」(17ウ) 以テ辞ス、

念九日 在家寄鷗渡^(老)、會員書ヲ筆シ了ル、午後東洋伝ノ資料ヲ調査ス、今夜一時、門ヲ叩ク者アリ、開ケバ即チ山一兄静岡ヨリ来ルナリ、欣然迎テ置酒、安着ヲ賀シ、族事ヲ談シ、遂ニ天明ニ到ル、

卅日 今朝車ヲ飛ハシテ小川、天野、岡山ヲ訪ヒ、山一ノ来京ヲ報シ、且ツ明日ヲトシテ余カ家ニ会シ大ニ政族ノ事ヲ議センコトヲ約ス、書ヲ山下、高田ニ投ス、午後高田来リ訪フ、此日、光^(老)」(18オ) 明天皇^(大正)際、枕山扁額^(老)星巖ノ扇面ヲ購フ、

卅一日 日曜日、家ニ在リ、夜来降雪甚シク、小川、高田、天野、岡山等ノ来ラサランコトヲ患フ、既ニシテ

小、高、天、雪ヲ踏ムテ来ル、歎談時ヲ移ス、而シテ岡山病ヲ以テ来ル能ハス、政族ノ談ヲ開ラクヲ得ス、明日池の尾ニ再開センコトヲ約シテ散ス、

○

二月一日 前日ノ降雪尚ホ融セス、本日学校ヲ閉ツ、故ニ校ニ昇ラス、午前高田ヲ訪ヒ山一ノ(18ウ)意ヲ伝テ子カ意見ヲ叩ク、或ハ同スル者アリ、同セサル者アリ、家ニ還レバ田原来リ、山田ト話ス、五時車ヲ馳セテ池の尾ニ到ル、小川既ニ在リ、既ニシテ高田、山一、岡山、天野来リ会ス、即チ族事ヲ談論ス、余寄鷗渡會員書ヲ朗読ス、衆又各々意見ヲ述フ、而シテ紛然決スル所ヲ知ラズ、夜将サニ三更ニ到ラントス、終ニ一事ヲ決ス、向後鷗渡会ヲ有形ノ組織ト為シ、幹事一人ヲ挙げ、毎月第一水曜日ニ開會、族事ヲ商議ス、是レナリ、余幹事ノ撰ニ当ル、尚ホ三日神保(19オ)園ニ会センコトヲ約シテ散ス、時ニ夜将ニ一時、山兄ヲ伴フテ芳原ニ遊ブ、

二日 曉天、車ヲ飛ハシテ上埜ニ到リ一旗亭ニ飲食シテ

家ニ還ル、書ヲ山下ニ投ス、雜誌原稿ヲ整頓シテ三益社ニ送ル、校ニ昇リ雜誌ノ事ヲ処ス、家ニ還リ論學問之独立ヲ筆ス、蓋シ雜誌ニ登載セントスルナリ、

三日 昇校課書生、家ニ還リ一浴、政族ト神保園ニ会ス、前会ノ議ヲ繼テ討論ス、高田、大二意ヲ枉クル所アリ、岡山亦タ敢テ執拗ヲ擅ニセズ、(19ウ)議大二整ヒ、調停稍々行ハル、ヲ見ル、嗚呼、余、高田ヨリ帰リ政族ノ間ニ調停ヲ行フコト日トシテアラサルハナシ、而シテ相会スレバ必ナラズ異議紛然、終ニ余カ意ヲ満ス者アラズ、而シテ今日初メテ調停ノ端ヲ開ク、賀ス可キナリ、十一時會ヲ散ス、山一ト共ニ家ニ還ル、寒風骨ニ徹ス、一酌寢ニ就ク、

四日 昇校課書生、雜誌ノ事ヲ処ス、家ニ還リ山田ト東洋伝ヲ校正ス、伝全ク成ル、携テ東洋館ニ到リ之ヲ小野義真ノ閱覽ニ供セシム、手(20オ)塚ヲ訪フテ雜誌ノ事ヲ処ス、遂ニ蓬萊亭ニ赴ク、山田ノ別ヲ送ランガ為メナリ、政族及ヒ田原、坪内来リ会ス、十時各々酔ヲ尽シテ帰ル、

五日 宿醒、神氣爽ナラズ、校ニ昇ル能ハス、石田安来リ訪フ、今夜山一静岡ニ帰ラントス、酒ヲ置テ別ヲ送ル、今夜高田新聞疋田書ヲ寄セテ、東洋君追悼法会ヲ開クコトヲ報シ、余カ祭文ヲ促ス、

六日 昇校課書生、放課後高田ヲ訪ヒ雑誌ノ事ヲ話ス、初更家ニ帰ル、細雨霏々、衣ヲ湿ス、遂ニ(20ウ)覆盆ノ大雨トナル、

七日 休日、家ニ在リ祭文ヲ筆ス、秋元来リ話ス、踵テ田原来リ訪ヒ、三宅云々ノ事ヲ談ス、家大人来リ訪フ、夜間本田信教来ル、

八日 昇校課書生、放課後田原ヲ伴フテ高田ヲ訪ヒ、大ニ学校改革ノ事ヲ議シ、夜三時ニ至ル、遂ニ家ニ還ル能ハス、田原ト高田ノ家ニ宿ス、

九日 昇校雑誌ノ事ヲ処ス、家ニ還リ改革案綱領ヲ筆シ了ル、内藤於菟彦来リ訪ヒ、心事ヲ話ス、今夜三宅、高坪、天、田ト築土松風亭ニ会シ、改(21オ)草案ヲ議ス、衆皆ナ異見ナシ、即チ十時散ス、

十日 晴、昇校課書生、午時校ヲ辞シ高田ヲ訪フテ改革

案ヲ修正ス、今夜雉橋ニ憲法會議アリ、高田ヲ伴フテ行ク、少数ニシテ開会スル能ハス、帰路天野ヲ訪ヒ家ニ帰ル、

十一日 紀元節、家ニ在リ、改革案ヲ筆シ、祭文ヲ筆シテ高田ノ久代、疋田ニ郵送ス、宇尾野藤七来リ訪フ、十二日 昇校課書生、還家改革案ヲ筆シテ初更ニ到ル、(21ウ)

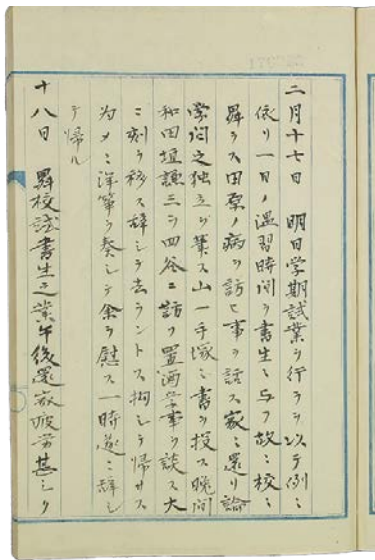
十三日 改革案ノ筆作終ラサルヲ以テ、午前校ヲ辞ス、一時筆作終ル、携テ校ニ昇リ高田等ニ示ス、書生ニ政治原論ヲ授ケテ帰ル、路々前島老ヲ訪ヒ改革案ヲ示シテ校主ニ致スノ介タラシメントス、在ラス、封書執事ニ致シテ家ニ還ル、

十四日 休日、家ニ在リ、専門学校書生石田清来リ、千葉県會議決ニ対スル不服ノ建議ヲ草センコトヲ托ス、蓋シ千葉県有志者ノ意ヲ伝フルナリ、諾シテ帰ス、本田来リ心事ヲ話ス、午(22オ)後田原ヲ訪フ、遇ハス、中原貞ヲ訪フテ帰ル、

十五日 昇校課書生、

十六日 休日、論学問之独立ヲ筆ス、此日天雪セントス、寒凜骨ニ徹シ筆ヲ執ルニ慵シ、得所凌烟ヲ携へ水道町ニ物ヲ贖ヒ、遂ニ旗亭ニ登リ一醉凌烟ト芳野世経ヲ大塚ニ訪ヒ、墨子ヲ借りテ帰ル、(以下、余巨)(22ウ)
 〈二二丁裏上部欄外〉「閱覧室」(朱印)

○第二卷



第2卷1オ

翻刻

「菰月蘋風樓日録 二」(イ四 一九一九 五一七)

〈表紙左端〉

「菰月蘋風樓日録 二卷」

〈表紙見返〉

「38—9303」(黒ナンバリング)

〈遊紙〉一丁

〈二丁表上部欄外〉「176782」(紺ナンバリング)

〈本文〉

二月十七日 明日学期試業ヲ行ラテ以テ例ニ依リ一日ノ温習時間ヲ書生ニ与フ、故ニ校ニ昇ラス田原ノ病ヲ訪ヒ事ヲ話ス、家ニ還リ論学問之独立ヲ筆ス、山一、手塚ニ書ヲ授ス、晚間和田垣謙三ヲ四谷ニ訪フ、置酒学事ヲ談ス、大ニ刻ヲ移ス、辞シテ去ラントス、拘シテ帰サス、為メニ洋箏ヲ奏シテ余ヲ慰ス、一時遂ニ辞シテ帰ル、

十八日 昇校試書生之業、午後還家、疲労甚シク(1オ)業ヲ執ル能ハス、徒ラニ盆裁ヲ弄ス、竹村来ル、東洋

伝ヲ与フ、

十九日 昇校試書生之業、還家鬱々、業ニ従フ能ハス、芳野世経、凌烟ヲ介シテ余カ乃祖ノ著擡言仲氏易ヲ借ランコトヲ求ム、即チ諾シテ之ヲ遣ル、

念日 朝餐前、香坂ヲ訪ヒ事ヲ話ス、昇校書生ヲ試ム、夜来天野来リテ雑誌草稿ヲ齎シ来ル、本田来リ心事ヲ話ス、

念一日 曉起、高田ノ書ニ接ス、朝餐終リ手塚ヲ（1ウ）訪ヒ雑誌ノ事ヲ話ス、岡山ヲ訪ヒ族事ヲ談ス、晚間家ニ歸リ山一、手塚等ノ書ニ接ス、

念二日 本日生徒ニ温習ノ時ヲ与フ、故ニ校ニ昇ラス、田原ヲ訪フ、遇ハス、高田ヲ訪ヒ心事ヲ話ス、遇々田原来ル、事ヲ話ス、即チ書ヲ坪兄ニ投ス、秋元ヲ訪フ、遇ハス、坊間梅一朶水仙数莖ヲ購フテ家ニ還ル、大人来ル、佐藤繁之丞上京ヲ報ス、即チ書ヲ岡山ニ投シテ其寓居ヲ問フ、石田清来リ建議案ノ事ヲ話ス、

念三日 朝、日本經濟会、青山覚、家弟²¹ノ書ニ接²⁰（2オ）ス、校ニ昇リ書生ヲ試ム、放課後前島老ヲ訪ヒ学校改

革ノ事ヲ話ス、家ニ還リ池亀整ノ書ニ接ス、蓋シ久保田八太郎ノ身事ニ関ス、即チ封シテ同人ニ郵送ス、書ヲ木下熊ニ投ス、今夜雉橋ノ憲法会ニ臨ム、前島老出席、十時家ニ還ル、木下ノ答書ニ接ス、

念四日 昇校試書生、本日政治科生徒試験問題ノ多クシテ時間ノ足ラサルヲ訴ヘ減センコトヲ請フ、余応セス、以之彼等相約シテ私ニ減センコトヲ盟フ、答案ヲ閱スルニ二百余名ノ生徒各²²（2ウ）々一問若クハ二問ヲ減ス、余思ラク、如斯ンバ徒ラニ生徒ヲシテ放恣ナラシメ校制為メニ乱レン、二三ノ生徒ヲ招キ懇切其不可ナルヲ慰シ、二十六日再タヒ試業ヲ執行センコトヲ揭示ス、放課後田原ト学校近傍ノ效外ニ散策、雜司谷鬼子母神社ヲ詣ス、一茶店アリ、鳥ヲ売ル、即チ入リテ割烹一酌シテ去ル、今夜大隈邸ニ学校改革ノ會議ヲ開ク、臨メハ議員講師皆ナ集マル、既ニシテ議事ヲ開ク、大概原案ヲ良シトセサルナシ、而シテ眼目取締ヲ²³（3オ）議員ヨリ挙クルノ一項ニ至テハ、衆議員私ヲ以テ異議ヲ唱フ、而シテ余等又タ情実ヲ開通シテ抗議スル能ハ

サル者アリ、遂ニ衆議員ノ姑息ノ計ニ従フ、余等ノ原案ヲ提出シテ取締ヲ置カンコトヲ望ムヤ意前島老ニ在リ、而シテ事成ラズ、不平ニ堪サル者アリ、今夜家ニ還リ佐藤伊三郎ノ書ニ接ス、梓君ノ死ヲ吊フナリ、

念五日 休暇日、家ニ在リ、呈内務大臣ノ書ヲ筆ス、池田、武市、大石、高木、安中等来リ、政治学一年二年生徒ヲ表シ、試験ノ失行ヲ謝ス、懇口ニ將」(3ウ)来ヲ戒メテ再試業ヲ罷ム、

念六日 曇、朝餐後坪内兄ヲ訪フ、相携テ墨堤ノ梅莊ヲ訪フ、花期未タ到ラス、去リテ浅草ノ梅園ヲ訪フ、湯島神台ノ洋食廊ニ哺シ、家ニ還ル、具刺土蘇頓英米憲法比較論²²ヲ讀ム、本田吉次来話ス、今夜高田、天野、田原、三宅ト築土松風亭ニ会シ校事ヲ議ス、

念七日 朝、香坂ヲ訪ヒ事ヲ話ス、校ニ昇リ雜誌ノ事ヲ処ス、午後内人ヲ携テ物ヲ上野ニ購フ、遂ニ浅草ニ遊ヒ、岡田ニ入り一酔、夕陽ニ到」(4オ)ル、墨堤ニ散策シテ家ニ歸ル、山一ノ書ニ接ス、書ヲ檜崎、高野、和田垣ニ投ス、

念八日 朝、内人ヲ番町ニ遣ル、東洋伝ヲ熊倉、山喜^(山田喜之助)ニ贈ル、檜俊来リ、雜誌ノ事ヲ話ス、中村常一朗、丸山和介来リ話ス、山一ノ書ニ接ス、本山、関野来リ、越佐親睦会大会ヲ三月三日求友亭ニ開クコトヲ報シ、余カ臨席ヲ請フ、諾シテ還ス、

三月一日 晴、木下ノ書ニ接ス、午前監獄論ヲ校ス、此日温暖春ノ如シ、書窓筆硯ニ親ムニ慵シ、凌烟ヲ伴ナフテ蒲田ノ梅莊ヲ訪フ、花將サ」(4ウ)ニ笑ヒ、奇香人ヲ襲フ、一酌興ヲ遣ル、既ニシテ爽然トシテ酔フ、歩シテ南品ニ到ル、時將サニ七時、一楼ニ登リテ飲ム、終ニ家ニ還ル能ハス、

二日 払曉働車ヲ僦フテ南品ヲ発ス、土橋ノ旗亭ニ朝餐シ家ニ還ル、山一、高野、檜崎、坪内等ノ書ニ接ス、坪、檜ニ答フ、凌烟ヲ木下ニ遣リ事ヲ処セシム、竹田来リ、事ヲ話ス、

三日 早起、窓ヲ推セバ、曖々四周皆ナ白シ、爐ヲ擁シテ雜誌草稿ヲ筆シ了リ、三益社ニ投ス、檜俊ノ書ニ接ス、午後求友亭ニ到リ越佐親睦」(5オ)会ニ列シ一

場ノ演説ヲ為ス、会散シテ家ニ帰ル、時正サニ九時、降雪未タ息マス、小川、岡山、天野ニ書ヲ投シテ明日鷗渡会ヲ開クコトヲ報ス、

四日 朝、雪晴、和泉、田原ノ書ニ接ス、田原ノ書ニ曰ク、今朝九時築土松風亭ニ講師会議ヲ開ク云々、朝餐前香坂ヲ訪ヒ事ヲ話ス、遂ニ午後石渡^(成)ヲ訪フコトヲ約ス、餐後築土ニ赴ムク、天野、田原、坪内ト学校規則ノ改定ヲ議ス、午時尚ホ終フル能ハズ、書ヲ石渡ニ投シ訪問ヲ辞ス、執筆改定ニ従事シ、午後六時ニ至リテ散^(5ウ)ス、今夜鷗渡会ヲ開クノ日ナリ、故アリテ延会、規則書類ヲ携ヒ高田ヲ訪ヒ議ス所アラントス、遇ハス、書類ヲ遣シ、明朝氏カ来訪ヲ伝テ家ニ還ル、家大人来リ訪フ、家人曰ク、檜崎、香坂来リ訪フト、檜崎、米穀経理記事ヲ齎ラス、書ヲ高田、檜崎ニ投ス、五日 晴、前橋ノ書ニ接ス、書ヲ坪内、手塚ニ投ス、香坂ヲ訪ヒ事ヲ話シ、遂ニ晩間、橋ヲ訪フコトヲ約ス、家ニ在リ、学校規則ヲ校訂ス、午時天野来ル、話次岡山本日夕陽ヲ以テ北越ニ赴ク云^(6オ)云ノ事ヲ談ス、

余聴テ忽チ車ヲ馳セテ西河岸ニ至ル、蓋シ事ヲ託セント欲スルナリ、到レバ岡山既ニ発ス、而シテ執事ニ問ヘバ千葉県ニ赴ムキタリト云フ、天野誤聞ヲ余ニ伝ヘタルナリ、乃チ家ニ還ル、田原来リテ坐ニ在リ、高田又タ踵テ来ル、相共ニ規則校訂ニ従事シ、晩間皆ナ散ス、晚餐後約ヲ履ムテ香坂ヲ訪フ、石渡及ヒ藤田四郎ニ邂逅ス、故アリテ今夜橋ヲ訪ハス、明旦訪ハンコトヲ約シテ家ニ還ル、家人告ク、檜崎来リタリト、山口勝治ノ書ニ接ス、^(6ウ)

六日 檜崎来リ、雑誌ノ事ヲ話ス、香坂来リ、与ニ橋槐ヲ訪ハントス、朝餐後馳車、橋ヲ訪フ、遇ハス、坪内ヲ訪フ、今日遠州掛川ノ富豪山崎千三郎ノ需ニ応シ、坪、高ト与ニ梅ヲ探ルノ約アリ、故ニ訪フナリ、高田ヲ待ツ、到ラス、既ニシテ約期ヲ過ク、坪兄ト共ニ先ツ發シテ浜町永富謙八ニ到ル、謙八余等ヲ東道セントスル者ナリ、山崎外ニ出テ未タ帰ラス、須臾ニシテ高田来ル、岡山定恒又タ来ル、而シテ山崎未タ来ラス、与ニ思ヘラク、山崎ヲ待ツ、或ハ刻ヲ移サン、請⁽⁷⁾

オ) 亀井ニ到リテ待タン、妓数名ヲ家根船ニ載セテ亀井ニ到リ天神ヲ詣シ、臥龍梅ヲ見ル、梅蕾半ハ放タズ、花期未タ到ラス、去リテ江東梅ヲ訪フ、臥龍ニ比スレバ花期早キカ如シ、橋本ニ入り一酌ス、山崎来ル、余岡山々崎ト対酌痛飲、陶然大ニ酔フ、晩間再タヒ船ニ乗リテ帰ル、帰路誤リテ水ニ投ス、高田余ヲ助ケテ大和町町⁽⁶⁷⁾ノ僑居ニ還ル、直チニ寝ニ就キ寒ヲ護ス、山一、田原、橋崎ノ書ニ接ス、田原来ル、困睡知ラス、内人遇接シテ還ス、」(7ウ)

七日 宿醒未タ覚メス、家人ニ酒ヲ命シテ一酌ス、稍々心氣ノ爽然タルヲ覚ユ、書ヲ山一、橋崎、手塚等ニ投ス、又タ書ヲ永富ニ投シ昨日ノ厚待ヲ謝ス、小川来リ事ヲ話ス、余贈ルニ草茅危言ヲ以テス、午後一時小川ヲ訪ヒ相携テ新橋停車場ニ到ル、小向井ノ梅ヲ訪ハントスルナリ、休憩所ニ到リ恒屋盛服⁽²⁴⁾ニ邂逅ス、盛服ハ壬午協会員ナリ、相見サルコト斯々二年有余、欵談刻ヲ移ス、恒屋朝鮮ノ改革党朴泳孝ト相識ル、今与ニ梅ヲ蒲田小向井ニ採ラントスルナリ、」(8オ) 同車大森

ニ抵リ小向井ニ再会ヲ期シテ別ル、勸車ヲ傭ヒ三十余町、路ヲ田間ニ取りテ荏原郡原村ノ梅莊ヲ訪フ、莊、立春梅園ト言フ、梅蕾未タ半ヲ綻カスト雖トモ地幽雅、亀井ニ優ルヲ覚フ、加藤政^(政助)、箕浦^(箕浦)、尾崎^(尾崎)、野村文夫等ノ諸人ニ邂逅ス、余等諸人ニ矢口社⁽²⁵⁾ニ詣センコトヲ勸ム、諸人聞カス、小向井ニ再会センコトヲ約シテ去ル、八町許矢口ニ抵ル、矢口社新田義興殺害ヲ祠ル、義興、義貞ノ庶子南朝ノ忠臣ナリ、畠山國清ノ為メニ難ニ遭ヒ水ニ投シテ死」(8ウ) ス、此社実ニ義人ノ墳墓ノ地ナリ、神社先年祝融⁽²⁶⁾ニ罹リ、未タ再築セス、只タ赤土ヲ見ルノミ、義興ノ碑ヲ見ル、服部南郭撰文シ、烏石ノ書ナリ、蓋シ有名ノ碑ナリ、碑文ノ写ヲ購フテ車ニ登ル、帰路畑間小祠ヲ看ル、之ヲ車夫ニ問フ、曰ク是レ即チ義興ノ旧祠ニシテ所謂矢口之渡ナル者此辺ヲ謂フナリト、桑滄ノ変人ヲシテ回顧去ル能ハサラシム、古市ヲ渡リテ南小向井ニ抵リ梅莊ヲ訪フ、箕浦、尾崎、諸人、恒屋及ヒ朝鮮人数名皆ナ先キニ来リ、花下榻ヲ置」(9オ) キ、置酒シ、将サニ酣ナリ、

余等モ亦タ榻ヲ両間ニ移シテ置酒、朝鮮ノ諸人ト献酬ス、朝鮮ノ諸人皆ナ血氣壯年、能ク呑ム、欸談時ヲ刻シ、薄暮相携テ帰路ニ就キ、往ク々々国事ヲ談ス、川崎ニ抵ル、時正サニ八時、待ツコト暫時、瀛車ニ駕シテ共ニ新橋ニ達ス、余等他日ノ再会ヲ期シテ別ヲ告ケントス、朴氏許ルサス、余等ト共ニ一酌セントス、遂ニ洋食廊サンラク亭ニ入り欸談数刻ニシテ別ル、朝鮮ノ人、姓名 Hio. Y. Pak (朴泳孝)、朴泳斌、[E.n](6ウ)

Hoe-youn (金浩然)、(一名姓名ヲ忘ル)、客臘革命ニ与リタル首謀者ノ連党ナリ、朴氏朝鮮ノ名族、先年海外ニ遊ビ、外語ニ通ス、風采優美、年齒未タ弱キモ、沈着老タルガ如シ、今日相会シテ交誼ヲ結フ、感慨勝ユ可ラサル者アリ、抑々諸人ハ皆ナ与ニ国難ニ遭ヒ、妻子屠戮セラレ、親縁残害セラレ、单身僅カニ脱シテ難ヲ我国ニ避ク、酒席相欸ムテ談笑献酬頗ブル快ヲ覚ユト雖トモ、諸人ノ心中ヲ忖度セハ慘憺タル意匠、人ニ語ル能ハサル者アラン、初更家^(前譯次郎)(10オ)ニ還リ檜崎手塚ノ書ニ接ス、又家人告ク、齊謙来リ訪フト、

八日 香坂ヲ訪ヒ伴ナフテ橘ヲ警視庁ニ訪ヒ、還家後香坂ト田中正彝⁽³¹⁾ヲ駒込ニ訪ヒ事ヲ話ス、帰路橘ヲ過キ家ニ帰ル、潦雨衣ヲ湿フス、檜崎ノ書ニ接ス、今夜小川ヲ訪フテ事ヲ議スルノ約アリ、故アリテ果サス、

九日 晴、和信^(和氣信)ノ書ニ接ス、直チニ之レニ答ヘ并セテ告クルニ内人懷孕ノ事ヲ以テス、香坂ト共ニ車ヲ馳セテ田中ヲ駒込ニ訪ヒ事ヲ弁⁽²⁹⁾「(10ウ)シテ還ル、書ヲ永富ニ投ス、凌烟ヲ三益社ニ遣リ事ヲ弁セシム、田原ヲ訪フ、遇ハス、高田ヲ訪ヒ明日余カ家ニ会シ憲法雜誌ノ事ヲ議サンコトヲ約ス、家ニ還リ、岡山、小川、天野ニ書ヲ投シテ、明後日玉川堂ニ鷗渡会ヲ開クコトヲ告ク、石川ノ書ニ接ス、直ニ答フ、香坂ヲ訪ヒ律書類纂ノ事ヲ話ス、書ヲ手塚ニ投シ、雜誌部数ヲ報ス、今夜上杉熊松ノ招ニ応シ香坂ト共ニ行キ饗待ヲ蒙ムル、上杉熊松ハ米沢藩侯ノ舍弟ナリ、香坂、其家ヲ借りテ居ル、而シテ香坂横浜ニ寓^(11オ)所ヲ転シ、余其居ヲ借ラントス、故ニ行テ接スルナリ、九時家ニ還リ一酌、寝ニ就ク、深更大伝馬町三丁目書肆東生亀次郎、

小川ノ書ヲ齎シ来リ、余ニ教課書^(ママ)編纂ノ事ヲ請フ、余諾シテ還ス、

十日 早朝、田原ノ書ニ接ス、餐後校ニ昇リ改革ノ事ヲ議シ、午後三時ニ到ル、前島老来リ、校主ノ意ヲ伝フ、前島老、余ヲ別室ニ延キ、小野梓君ノ遺稿編纂ノ局ニ当ルノ意ナキヤヲ問フ、蓋シ小野義真ノ意ヲ伝フルナリ、余思ラク、之レ^(11ウ)ヲ辞スル、或ハ他ノ政族ノ手ニ帰セント、自ラ力ヲ計ラズシテ之レニ当ランコトヲ答フ、四時家ニ還ル、高田ノ人森鉄五郎ノ書ニ接ス、書ヲ東生ニ投ス、

十一日 校ニ登ル、高、天、田等ト学校改革実行ノ事ヲ処ス、斎和ノ書ニ接ス、午後高田ノ家ニ到リ、昨日前島老ノ話ヲ伝フ、高田憤然タル色アリ、余懇切諭ス、大ニ悟ル所アルガ如シ、遂ニ憲法雜誌ノ事ヲ議シ中央學術雜誌^ト Nation 若クハ Edinburgh Review ニ倣ヒ記事ヲ学問ニ限ラス、広ロク政治等ノコトニ涉ランコトヲ決ス、^(12オ)晚餐後、共ニ組橋玉川堂ニ到ル、小川、天野、岡山来リ会ス、即チ鷗渡会ヲ開キ山一ノ身事ヲ

議シ、併セテ前刻余等計画ノ雜誌ノ事ニ及ブ、衆異議アルコトナク十時散会、家ニ還ル、丹呉勝吉ノ書ニ接ス、内人告ク、家大人来リ訪フト、

十二日 家ニ在リ、転寓ノ準備ヲ為ス、香坂ノ内人来リテ事ヲ話ス、午時坊間ニ散策シテ物ヲ購フ、手塚来ル雜誌印刷料ヲ与フ、日本經濟会、田原ノ書ニ接ス、晚間、家大人来ル、東生小学教科書類ヲ贈ル、蓋シ理科読本ノ参考ニ供セ^(12ウ)ンガ為メナリ、

十三日 校ニ昇リ事ヲ処ス、書ヲ山一、才東、高野ニ投ス、夜間家大人来ル、

十四日 凌烟ヲ永富ニ遣ル、高野ノ電音ニ接ス、十時半発ノ瀛車ニ駕シ、横浜ニ赴ムク、一時町会所ニ討論会ヲ開ク、来会者少数、討論ヲ罷メ余說話二題ヲ為ス、五時発ノ瀛車ヲ以テ東京ニ帰ル、還家高田、竹村等ノ書ニ接ス、夜間本田信教来訪ヒ、明日北越ニ帰省スルコトヲ報ス、

十五日 早朝本田来リ、別ヲ告ク、本日居ヲ小石^(13オ)川水道町五十四番地ニ転ス、家人準備ヲ為スニ忙ハシ、

田原ノ書ニ接ス、十時校ニ昇リ書生ニ課ス、夕陽家ニ還ル、家大人来リ訪ヒ、転寓ヲ祝ス、竹村来リ、事ヲ話ス、

十六日 朝、若桑信司来リ、東京専門学校ニ入ランコトヲ托ス、相携テ校ニ昇リ書生ニ課シ帰路高田ヲ訪ヒ文学講義会設立ノ事ヲ議シ、遂ニ規則数條ヲ定メテ家ニ還ル、書ヲ石川ニ投ス、晩間石川ノ書ニ接ス、佐藤行政学講義ヲ齎ラシ来ル、天野著經濟原論⁽³²⁾ヲ上郵真嶋信二贈ル、^(13ウ)

十七日 朝、若桑来リ訪フ、校ニ昇リ書生ヲ課ス、山下ノ書ニ接ス、三益社使ヲ遣ハス、印刷料ヲ与フ、家ニ還リ石川ノ書ニ接ス、日本經濟会、近時不景氣原因及救済策ヲ送ル、即チ点取文ヲ印刷ニ附セル者ナリ、晩餐了リ車ヲ飛シテ団々社ニ岡田ヲ訪フ、遇ハス、富山房ニ到リ東洋雜著及ヒ留客齋日記ヲ返却ス、遂ニ雉橋ニ到リ憲法会ニ臨ム、少数ニシテ議事ヲ開カス散ス、還家、文学講義会ノ趣意書ヲ筆シ了ス、一酌寝ニ就ク、時二十二時、^(14オ)

新・翻刻「春城日誌」(一)

十八日 風アリ、校ニ昇リ書生ニ課ス、頭痛ヲ覚ユ、即チ十一時辞シテ帰ル、団々社ニ岡田ヲ訪フ逢ハス、家ニ還リ雜誌ノ稿ヲ筆セントス、身体疼痛、執筆スルニ堪ヘス、鍼医ヲ聘シテ按腹セシム、即チ愈ユ、車ヲ馳セテ石川ヲ訪ヒ事ヲ話ス、書ヲ山一及ヒ前橋ニ投ス、高野ノ書ニ接ス、

十九日 暴風未タ収ラス、校ニ昇リ書生ニ課ス、土田虎太、上総久留里ノ人ノ意ヲ伝ヘ、同地ニ新設スル学校ノ開校式ニ余ノ臨席ヲ請フ、余繁忙、^(14ウ) 府外ニ足ヲ拳クルノ閑ヲ得ス、然レトモ将来此校ニ向テ期スル所アリ、高田ト商議シテ遂ニ之レヲ諾ス、明旦行ヲ啓カンコトヲ土田ニ約シ家ニ還ル、前橋ノ書ニ接ス、披バ雜誌原稿ヲ贈ルナリ、尺牘書方ノ改良ヲ筆ス、午後三時雨アリ、風又タ収マル、氣爽然タルヲ覚ユ、安田勲自搾ノ牛乳ヲ贈ル、爾後日々贈与センコトヲ約ス、書ヲ投シテ厚意ヲ謝ス、檜崎来リ話ス、久保田八太郎又来リテ身事ヲ話ス、

廿日 晴、払曉土田虎太来リテ門ヲ叩ク、輒チ起^(15オ)

床、直ニ結束シ車ヲ馳テ靈岸島ニ到ル、將サニ発船ノ時ナリ、福沢号ニ駕シテ発ス、前日暴風ノ為メ浪勢未

タ穏ナラス、然レトモ天氣清明、富峯奇觀ヲ呈シ、風光殊ニ佳ナリ、午前十一時木更津ニ着ス、海淺クシテ岸ニ遠カルコト十数丁、舢舨ヲ以テ漸ク上陸ス、同地ノ有志者、石川尚益出テ迎ヒ、一酒店ニ入り与ニ飲食シ、直チニ車ヲ僦フテ発ス、是レヨリ一望田野村落皆ナ荒涼、然レトモ道路甚タ悪カラス、車夫指示シテ曰ク、本県頃日道路開鑿ノ挙アリ、日ナラ」(15ウ)ズ工ヲ竣ントス、思フニ若シ工事ヲ落セバ京地ヨリ來遊ノ客ニ便ナルコト尠ナカラザルベシト、蓋シ目今通過ノ道路里程ハ木更津ヨリ久留里ニ到ル七里許、而シテ新開ノ道路ハ四里ニ充タズト云フ、小櫃川ヲ渡リ横田村ヲ經テ久留里ニ到ル、小塚方勝及ヒ土橋源二郎迎テ、驛端ニ在リ、小塚ハ専門學校法律得業生ニシテ聘セラレ、此地英學校ノ教師タル者、土橋ハ当地ノ富豪ニシテ英學校ヲ發起セル者ナリ、土橋、余等ヲ延テ其別墅ニ置キ、置酒」(16オ)勞ヲ謝ス、源次郎ノ老父及国

友作藏來リ接ス、既ニシテ皆ナ散ス、小塚独リ止マル、閑談数刻ヲ移シテ寢ニ就ク、

念一日 晴、朝黒田直養、原庫二、堤辰藏、池田源之助、橋本純皎、国友作藏、梶沼勝之助、武野宣明、門馬信義、土橋銀二郎、最木^(マキム)之助、武山慎吾、相携テ來リ訪ヒ、余來会ヲ謝ス、諸人ハ即チ英學校ノ持主ナリ、既ニシテ散ス、土田、小塚等ト散策、英學校ヲ看、城址ヲ望ム、即チ旧黒田氏ノ居城ナリト云フ、寓ニ帰レハ追踵千葉県會議」(16ウ)員木村理左衛門(常置委員)、斎藤仁平、森三左衛門來リ接ス、閑談数刻ニシテ開校式場ノ整理セルヲ報ス、即チ相携テ臨ム、式場ハ小学校ヲ以テ充テ、本県學務課長堅山理一郎、望陀郡長重城保等來リ会シ、各々祝辭ヲ述ブ、余モ亦タ一場ノ演說ヲ為シ、泰西學術ノ效要ヲ説キ、併セテ賀意ヲ表ス、衆大ニ感スル所アルガ如シ、式終リテ宴会ヲ開ク、衆又タ余ニ一場ノ演說ヲ請フ、數言ヲ述ベテ責ヲ塞ク、既ニシテ衆皆ナ酔フ、余等即チ辭シテ帰ル、重城、堅山等來リ」(17オ)訪フ、置酒相話ス、既ニシテ門馬來リ、

告テ曰ク、發起人皆ナ集マリテ学校ニ会シ、更ラニ一場ノ講談ヲ望ム、願クハ駕ヲ枉ケヨト、之レヨリ先キ、余、小塚、土橋等ト謀リ、本地ニ同攻会ノ支会ヲ設ケント欲ス、今タハ之レヲ商議スルノ好機会ナレバ、欣然即チ諾シ、相伴フテ臨席、学問ハ交際ノ良道ト云フ一題ヲ演シ、同攻会ノ事ニ及フ、衆奮ツテ支会ヲ設ケンコトヲ望ム、而シテ来集者少数ニシテ、半ハ祝酒ニ酩酊シテ事ヲ弁セズ、門馬曰ク、此事重大、輕忽定ム可ラズ、」(17ウ)冀クハ、一周日ノ猶予ヲ与ヘヨ、必ラス諸人ト商量シテ、東京ニ報道セント、余之レヲ諾シ、且ツ中央學術雜誌数部ヲ配与シ、厚待ヲ謝シテ歸ル、發起諸人酒肴ヲ贈リテ勞ヲ謝ス、聞ク、諸人余カ為メニ今夕親睦会ヲ開カントス、而シテ夜既ニ深更ナルヲ以テ之レヲ罷メ、酒肴ヲ以テ代リ謝スルナリ、武野武山来リ話ス、小塚ト後事ヲ話シテ寝ニ就ク、

念二日 曇、土橋離別ノ筵ヲ開キ、余等ヲ送ル、門馬、武山等来リテ別ヲ告ク、即チ発ス、土橋、余」(18オ)等ヲ送リテ木更津ニ到ル、時ニ午後一時ニ近ク、汽船

解纜ヲ告ク、急ニ飲食シテ土橋ト別ル、岡山ノ書生祝訴訟ノ事ヲ以テ此地ニ来リ在リ、事ヲ話シテ別ル、今日波平カニ風静ニ舟馳スルコト矢ノ如シ、二時間余靈岸島ニ達ス、路々石渡ヲ訪フ、遇ハス、岡山ヲ訪フ、遇ハス、三河町洋食廬ニ喫餐シテ土田ト別レ家ニ還ル、山一ノ書ニ接ス、

念三 晴、昇校課書生、還家、岡山、小川ノ書ニ接ス、蓋シ廿五日石渡ノ送別会ヲ開クコトヲ告クル」(18ウ)ナリ、直ニ之レニ答フ、同攻会規則ヲ久留里ノ有志者ニ贈ル、書ヲ土橋及ヒ石川ニ投ス、立憲機關論ヲ筆ス、土田虎太来ル、

念四 曇、昇校課生徒、書ヲ山一ニ投ス、本田信教ノ書ニ接ス、信教、小野君追悼演説ヲ北越ニ開クコトヲ報ス、小野伝十部ヲ上郵シ、且ツ書ヲ投ス、家ニ還レバ原玄朴来リ訪フ、玄朴ハ西村六平ノ六男ナリ、専門学校ニ入ランコトヲ請フ、其紹介ヲ諾ス、午後雨フル、

念五 雨、昇校書生ニ課ス、齋藤和太郎、政府更革」(19オ)之顛末一部ヲ贈ル、家ニ還リ理科読本ノ腹稿ヲ定ム、

三時岡山ヲ訪ヒ、前途ノ身事ヲ話ス、六時壬午協會員ト日本橋柏木ニ会シテ石渡ノ独逸ニ遊学スルヲ送ル、十時還家、高田及ヒ家弟ノ書ニ接ス、

念六 晴、宿醒校ニ昇ル能ハス、麦酒ヲ酌ムテ漸ク之レヲ解ク、書ヲ東生ニ投シ、念七日小川ノ家ニ会シ理科読本編纂ノ契約ヲ結締センコトヲ約ス、午後高田来リ訪フ、相携テ石渡ヲ越前堀ニ訪ヒ別意ヲ告ケ、遂ニ新橋ニ送リテ別ル、」(19ウ)小川又来リ会ス、洋食廊ニ飲食シテ家ニ還ル、日本經濟会ノ書ニ接ス、

念七 昇校課書生、高田、大隈老ノ意ヲ伝テ曰ク、吉田熹六、不日新潟新聞ヲ辞シ、英国ニ航遊セントス、代リテ文壇ニ登ル者ナカル可ラス、君之レヲ諾スルヤ否ヤ、余曰、事小ナラズ、北越ハ余カ郷土ニシテ知人少ナカラズ、余ノ到ル、或ハ我政族ノ為メ便ナラン、然レトモ啻々学校ヲ奈何セント、談話数刻、心稍々決ス、而シテ未タ明言セス、放課後大隈老ヲ訪ヒ新潟行ノ事ヲ話ス、」(20オ)老、余カ行ヲ慫慂シテ已マス、尾崎ニ議シテ決センコトヲ答ヒ、辞シテ去ル、路々前島老

ヲ訪ヒ又タ新潟行ノ得失ヲ問フ、老又タ切ニ之レヲ慫慂ス、家ニ還レバ北堂⁽³⁵⁾来リ訪フ、東生及ヒ丹呉勝吉ノ書ニ接ス、晚間尾崎行雄ヲ訪ヒ、北越行ヲ議ス、氏亦タ大ニ之レヲ慫慂ス、吉田熹六ノ上京ヲ待テ決センコトヲ約ス、図ラス和氣清太郎ニ邂逅ス、和氣素ト新潟新聞ノ主筆タリ、事アリテ余交ヲ絶ツ、而シテ今憐レムテ交際ヲ許ルス、小川ヲ訪フ、東生来リ会ス、理」(20ウ)科読本編述謝金ノ事ヲ議ス、明日ヲ以テ答ンコトヲ請フ、之レヲ諾ス、十二時家ニ還リ寝ニ就ク、

念八 晴、高野房太郎ノ書ニ接ス、斎藤謙次郎来訪ヒ心事ヲ話ス、余、氏カ官途ヲ退クヲ不可トシ、再就ヲ慫慂ス、稍々決スル所アルガ如クニシテ帰ル、佐藤慎来リ話ス、丹呉生二代リテ監視上官ニ呈スルノ書ヲ筆ス、蓋シ警吏ニ英学ノ必用ナルコトヲ論シ、其科程ヲ官署ニ設ケンコトヲ請フナリ、上野喜永次、新発田青年会」(21オ)ノ規則ヲ贈リ本日ノ開会ニ臨マンコトヲ請フ、丹勝来ル、建白草案ヲ与フ、東生来リ話ス、家大人来リ話ス、神保脩踵テ来リ訪フ、書ヲ山一二投シ北越行

ノ得失ヲ問フ、土橋源次郎、小塚方勝書ヲ投シテ、前
 日余カ開校ノ式ニ臨会セルコトヲ謝ス、檜崎ノ書ニ接
 ス、六時学校月次会ヲ大隈邸ニ開ク、今夜余等ヲ以テ
 議員ト為シ、他ノ新任講師ト区別スルコトヲ決ス、深
 更家ニ還ル、石川ノ書ニ接ス、

念九 朝佐藤来リ、桃花ヲ贈ル、十時昇校書生ニ」(21ウ)

課ス、久保田帰省ヲ告ク、五時家ニ還ル、愛川^{山田}ノ書ニ
 接ス、書ヲ斎藤和及ヒ手塚ニ投ス、田原女子拳クルヲ
 報ス、(以下余白)」(22オ)

(22ウ白紙)

「二三丁裏上部欄外」「閲覧室」(朱印)

○第三卷



第3卷1オ

翻刻

「菰月蘋風樓日録 三」(イ四 一九一九 五一八)

〈表紙左端〉

「菰月蘋風樓日録 三卷」

〈表紙見返〉

「38—9304」(黒ナンバリング)

《遊 紙一丁》

《一丁表上部欄外》「176783」（紺ナンバリング）、
「十九年」（鉛筆書）

《本文》

三十日 晴、昇校書生ニ課ス、還家後坊間ニ物ヲ購ヒ終
ニ岡山ヲ訪ヒ北越行ヲ議ス、兄愆慙シテ已マス、家ニ
還リ明治協會、石川等ノ書ニ接ス、家人告テ曰ク、和
氣清太郎及ヒ手塚来リ訪フト、書ヲ檜俊ニ投シ事ヲ托
ス、又タ石川ニ書ヲ投ス、浴後一酌、寢ニ就ク、

卅一日 晴、朝東生ノ書ニ接ス、佐藤慎来リ訪フ、昇校
書生ニ課ス、立憲改進黨書ヲ送りテ、来月四日井生村
樓ニ会議ヲ開クコトヲ報ス、檜俊ト事ヲ話ス、四時家
ニ還ル、原玄朴来リ話ス、」（1オ）

○

四月一日 昇校書生ニ課ス、坪内兄其近著書生氣質³⁷全部
製本成ルヲ告ケ、余ニ一本ヲ贈ル、還家爐ヲ擁シテ読
ミ、午後六時ニ到ル、山一書ヲ投ス、披ケバ即チ雜誌

原稿ヲ送ルナリ、岡山ノ書ニ接ス、来ル三日ヲトシ学
友社紀念会ヲ開クコトヲ報スルナリ、家大人来リ訪フ、
岡山ニ書ヲ投シ、前川亀次郎ノ住所ヲ問フ、

三日^{（二日）} 神武天皇祭、朝、原玄朴来リ訪フ、岡山ヲ訪ヒ事
ヲ話ス、渋谷ニ学校後任者周旋ヲ托ス、」（1ウ）片山

清太郎ヲ博聞社ニ訪フ、逢ハス、遂ニ駿河台西紅梅町
ノ寓居ニ訪ヒ、自著監獄論上梓ノ事ヲ托ス、路々尾崎
ヲ訪フ、吉田熹六ニ邂逅ス、余カ新潟行ヲ商議ス、吉
田曰ク、一昨日書ヲ以テ新潟ニ通報セリ、念フニ不日
回報アラント、辞シテ去ル、坊間ノ一酒店ニ飲食シ、
天野ヲ訪フ、偶々小川来ル、相携テ上野ニ散策ス、早
桜既ニ開キ、群客蟻ノ如シ、帰路坪内ヲ訪ヒ終ニ小川
ノ家ニ到リ、書籍若干部ヲ借りテ家ニ還ル、蓋シ手紙
書方の改良ヲ草スル参」（2オ）考ニ供セントスルナリ、
還家、尾崎及ヒ専門学校ノ書ニ接ス、家人曰ク、竹村
及ヒ丹呉養太、手塚等来リ訪フト、書ヲ改進黨事務所
ニ投シ、明日井生村樓ニ開会スル大会ニ臨席スルヲ辞
ス、又石川ニ投シテ事ヲ云フ、市島文吉ノ計ニ接ス、

四日 晴、神保来り、事ヲ話ス、手紙書方ノ改良ヲ筆ス、若桑信司来り訪フ、小川使ヲ遣ハス、万法精理⁽³⁸⁾ヲ返ス、堀口熊市及ヒ江坂氏ノ兒子来ル、家大人来り話ス、書ヲ坪内ニ贈リ、閑際漫筆ヲ返ス、香坂来ル、置酒款談、頃刻ニシテ去ル、佐愼来^(2ウ)ル、斎藤及ヒ坂井牧之助ノ書ニ接ス、

五日 雨、風氣強シ、佐静来り、入学生徒試験問題ヲ請フ、校ニ昇リ与シコトヲ答フ、九時校ニ昇リ入学生ヲ試ミ、書生ニ課ス、午後故アリ校ヲ罷メ、高田ヲ訪フテ家ニ還ル、三益社ノ書ニ接ス、手紙書方ノ改良ヲ校ス、原玄朴来り、明治法律学校ニ入ルコトヲ告ク、六日 晴、若桑来り話ス、校ニ昇リ書生ヲ課ス、本田信教ノ書ニ接ス、還家雜誌草稿ヲ三益社ニ郵致ス、若桑来ル、入学保証人タルヲ諾ス、午後^(3オ)霜岳^{(山田)郎}ノ書ニ接ス、蓋シ余カ新潟行ヲ可トスルナリ、家大人来り訪フ、

七日 晴、昇校課書生、還家武村来り訪フ、置酒款話ス、手塚又タ来り訪フ、書ヲ吉田熹及ヒ尾崎ニ投シ、余カ

新潟行ノ決定ヲ促ス、

八日 雨、昇校課書生、家ニ還リ石川ノ書ニ接ス、吉田熹六亦書ヲ送リテ新潟行ノ暫時延引スルコトヲ報ス、九日 晴、昇校書生ニ課ス、家ニ還リ泰西先哲瑣談ヲ筆ス、本田信教上京、真嶋信ノ描影ヲ持シ^(3ウ)来リ、余ニ与フ、高田来り訪フ、吉田、尾崎ニ到リ余カ身事ヲ話センコトヲ託ス、諾シテ去ル、尾崎、武市等連署ノ書ニ接ス、十四日ヲトシ柳橋亀清ニ吉田カ龍動行ヲ祝スル別会ヲ開クコトヲ報スルナリ、直チニ書ヲ投シテ之レヲ諾ス、

十日 晴、校ニ昇リ書生ニ課ス、高田、余ニ告クルニ昨夕吉田ヲ訪フテ余カ身事ヲ話シタル結局ヲ報ス、余概ね新潟行ノ破レタルヲ知ル、然レトモ亦タ吉田、尾崎等カ周旋ノ丁寧ナルニ感ス、斎和ノ書ニ接ス、家ニ還リ泰西詩家瑣談ヲ^(4オ)筆ス、石川ノ書ニ接ス、越後高田ノ中川源造、竹村ト共ニ来り訪ヒ、上京ヲ報シ、明日余ヲ誘フテ花ヲ墨堤ニ訪ハンコトヲ請フ、余之レヲ諾ス、晚間一浴、酒ヲ酌ムテ寝ニ就キ、

十一日 晴、早起、泰西詩家瑣談ヲ筆ス、小塚方勝書ヲ寄セ、余カ総地ニ漫遊以來ノ景況ヲ報シ、且ツ同攻会支会ヲ設ルコトヲ決シタリト告ク、蓋シ余カ奨励ニ由ルナリ、十時竹村ヲ訪ヒ洋食廊ニ午餐シ再タヒ竹村ノ寓ニ到ル、斎謙來リ会ス、相携テ本銀街越後屋ニ到ル、余先ツ須^(4ウ)貝、丹後⁽⁴⁾ニ老ヲ訪フ、逢ハス、名刺ヲ遺シ、中川ヲ訪フ、氏余等ヲ待テ寓ニ在リ、即チ相伴フテ発ス、此日、日曜ニ会ス人行絡駅織ルカ如ク、蓋叢相望ム、墨堤桜半ハ謝シ綠葉十カ三ヲ占ム、蓋シ連日烈風ノ為メニ害セラレタルナリ、江ヲ渡リテ淺草ニ到リ、一酒樓ニ飲ミ、終ニ芳街ニ到リ夜桜ヲ看ル、三更車ヲ馳テ余独リ寓ニ帰ル、家人告テ曰ク、横田敬太來リ訪フト、又石田清書ヲ遺シテ去ルト、此日石川ニ書ヲ投シテ事ヲ弁ス、」(5オ)

十二日 晴、佐藤來ル、水野禎三ノ書ニ接ス、書ヲ小塚ニ投シ同攻会設立ヲ賀ス、又中川ニ投シ、前日ノ待遇ヲ謝ス、泰西隨筆ヲ讀ム、前タノ暴飲氣爽ナラス、麦酒ヲ酌ムテ之レヲ解ク、本日学校生徒飛鳥山⁽⁵⁾ニ運動⁽⁴⁾

ヲ催ス、行テ見ントス、車ヲ命シテ出ントス、遽カニ細雨アリ、乃チ止ム、石田清來リ、建議書ノ校正ヲ請フ、諾シテ還ス、書ヲ東生ニ投シ來訪ヲ請フ、

十三日 晴、泰西詩家瑣談ヲ筆シ夕陽ニ到ル、余事ナシ、」(5ウ)

十四日 晴、自著監獄原論ノ目次ヲ編シ、副書シテ片山ニ投ス、西洋隨筆ヲ讀ム、石田清來リ接ス、午後高田、本田來リ話ス、五時柳橋龜清ニ到リ吉熹ノ送別会ニ臨ム、席上初メテ吉田祥三郎、井上寛一、久松義典、永井礫、岡野寛等ノ諸人ニ面ス、初更辭シテ家ニ還ル、家人告ク手塚來リ訪フト、

十五日 晴、書ヲ裁シテ星松三郎ニ投シ、氏カ著地方觀察錄⁽¹⁰⁾ノ寄贈ヲ請フ、星先キニ民間不景氣ノ真狀ヲ視察セントシテ各地ニ遊歴シ、足」(6オ) 跡幾ント海内ニ遍ク其得ル所モ亦タ尠カラス、親察錄ハ即チ其結果ナリ、校ニ昇リ書生ニ課ス、蓋シ運動会以來初メテ校ヲ開クナリ、坪兄近著内地雜居未來之夢ヲ贈ル、家ニ還リ矢島浦太郎ノ書ニ接ス、倉石庸太郎ノ入校紹介ヲ

請フナリ、書ヲ檐俊及ヒ手塚ニ投ス、呈内務大臣論千葉県會議決書ヲ校シ了ル、吉田熹六來訪、新潟行ノ事ヲ話ス、事稍々決ス、星親察録ヲ贈ル、石田來ル、建白書ヲ授ク、吉田ト酒ヲ酌ミ欸談刻ヲ移ス、夜間倉石來リ、入校ノ事ヲ托^(6ウ)ス、諾シテ還ス、家大人來リ話ス、

十六日 小雨、頭痛ヲ覺ユ、校ニ昇ス^(ラ脱)温臥半日ヲ消ス、午後半峯兄來リ訪フ、昨日吉田來話ノ事ヲ語ル、横田敬太來リ訪ヒ、明日余等ヲ上塾精養軒ニ招キ文学講義會ノ事ヲ決センコトヲ約ス、余之レヲ諾ス、晚間檐俊雜誌計算書ヲ携ヒ來リ商議ス、

十七日 雨、昇校書生ニ課ス、田原ト話シテ家ニ還ル、山下保馬ノ書ニ接ス、文学講義會趣意書ヲ筆ス、家大人來リ訪ヒ、事ヲ話ス、^(7オ)告クルニ身事ヲ以テス、書ヲ凌烟ニ投シテ交ヲ絶ツ、五時精養軒ニ到ル、高田、三宅、天野、横田來リ會ス、講義會ノ事ヲ商議シ喫餐、家ニ還テ寢ニ就ク、

十八日 細雨、日曜、家ニ在リ^(講)議義會緒言、手紙書方の

改良ヲ筆ス、北堂來リ訪フ、新潟行ヲ告ケ身事ヲ話ス、三益社ノ書ニ接ス、田原來リ訪フ、小川又タ接踵來リ訪フ、置酒閑談ス、

十九日 細雨、未タ止マス、早曉家大人來リ話ス、車ヲ飛ハシテ尾崎ヲ訪ヒ、新潟行ヲ話ス、家ニ^(7ウ)還リ雜誌草稿ヲ校シ、十時校ニ昇リ書生ニ課ス、午後心氣不快ヲ覺ユ、高田ヲ訪フテ家ニ還ル、手塚來リ訪フ、家大人ノ書ニ接ス、書ヲ田原ニ贈リテ事ヲ托ス、其答書ニ接ス、

二十日 木下ノ書ニ接ス、昇校書生ニ課ス、家ニ還リ家弟ノ書及ヒ石川ノ書ニ接ス、中央學術雜誌ヲ家弟ニ贈ル、人ヲ木下ニ遣リ、事ヲ弁セシム、書ヲ横田ニ投シ、三宅雄次郎⁽¹¹⁾ノ入會ヲ諾セルコトヲ報ス、書ヲ山下保馬ニ投シ、東洋君ノ写真ヲ還ス、^(8オ)

念一 曇、昇校書生ニ課ス、枝元ノ書ニ接ス、家ニ還リ人ヲ石川ニ遣リ事ヲ弁ス、晚間家大人、丹勝來リ訪フ、念二 晴、払曉車ヲ飛ハシテ須貝、丹後二老ヲ本銀街ノ旅寓ニ訪フ、談話頃刻、辞シテ校ニ昇リ書生ニ課シテ

家ニ還ル、日本經濟会ノ書ニ接ス、家大人来リ訪フ、頃刻ニシテ去ル、

念三 校ニ昇リ書生ニ課ス、還家立憲機関論ヲ筆ス、生徒ノ課書ニ充ント欲スルナリ、午後丹後老来リ訪フ、置酒心事ヲ話ス、家大人、北堂、^(8ウ)来リ会ス、晩間皆ナ去ル、本田来リ訪フ、

念四 晴、校ニ昇リ書生ニ課ス、還家機関論ヲ筆ス、半峯兄、政學講義会規則印本ヲ携ヒ来ル、与ニ校シテ之レヲ横田ニ送り改刪セシム、

念五 暴風、日曜、家ニ在リ機関論ヲ筆シ午後一時ニ到ル、小川ノ書ニ接ス、直チニ訪フ、新渴行ヲ議シ、余カ心大ニ決ス、宝氏政治談ヲ借り得テ帰ル、機関論ヲ筆ス、岡山ニ書ヲ投シ廿八日富士見軒ニ鷗渡会ヲ開クコトヲ報ス、中川ニ投書、出京ノ際ノ厚志ヲ謝ス、晩間浅酌、書ヲ尾崎ニ^(9オ)投シ、新渴行ヲ謝絶スルノ意ヲ通ス、蓋シ尾崎ヲシテ新渴ニ伝シメント欲スルナリ、

念六 晴、朝廁ニ行キ繩虫ヲ見ル、昇校書生ニ課ス、矢

野貞雄及ヒ前島老ノ書ニ接ス、放課後前島老ヲ訪フ、老小野遺稿ヲ余ニ託シ編纂上梓センコトヲ欲ス、即チ日本財政論、條約改正論ナリ、余之レヲ諾ス、尚ホ小野君建碑ノ事ヲ商議ス、老カ意、余カ思フ所ト投ス、晩餐終リ、辞シテ家ニ還ル、高田及ヒ石川ノ書ニ接ス、

念七 晴、昇校課書生、還家筆立憲機関論、読東洋^(9ウ)君日本財政論、

念八 雨、暁起、尾崎行雄ノ書ニ接ス、昇校書生ニ課ス、書ヲ枝元及ヒ霜岳ニ投ス、高田ニ事ヲ托ス、還家更ラ富士見町富士見軒ニ到ル、小川、天野、高田ト会ス、岡山来ラス、小野君遺書及ヒ建碑ノ事ヲ商議ス、在坂ノ家弟及ヒ石川ノ書ニ接ス、

念九 払曉若桑信司来リテ心事ヲ話ス、余事アリ昇校スル能ハス、書ヲ托シテ田原、高田ニ致サシム、半日機関論ヲ筆ス、午後和氣清太郎^(10オ)ノ書ニ投ス、^(後)帰郷ヲ報シ余カ新渴ニ至ランコトヲ望ム、得所叔来ル、小野君日本財政論ノ謄写ヲ請フ、他日日本財政史ノ志料ニ充テンカ為メナリ、明治協會ノ書ニ接ス、晩間家

大人来り訪フ、書ヲ在坂ノ家弟ニ投ス、

尽日 曇、昇校書生ニ課ス、高田兄ト事ヲ話ス、放課後
総理⁴⁶ヲ訪フ、在ラズ、前島老ヲ訪ヒ小野君遺稿及ヒ建
碑等ノ事ヲ話ス、還家機関論ヲ筆シ、夕陽ニ到ル、石
川ノ書ニ接ス、

○「(10ウ)」

五月一日 雨、早起、機関論ヲ筆ス、昇校書生ニ課ス、
高田ト事ヲ話ス、家ニ還リ書ヲ石川及ヒ木下ニ投ス、
竹村来訪、四日発程帰省ヲ報ス、機関論ヲ筆ス、

五月二日 日曜、払曉門ヲ叩ク者アリ、開テ之レヲ見
レバ洞巖ナリ、曰ク甲州ノ演説終リテ遂ニ上京セリ
ト、置酒無事ヲ祝ス、書ヲ高田、田原、及ヒ学校生徒
ニ投ス、頃刻ニシテ曾根桜間等来リテ山田ヲ訪フ、若
桑来リ接ス、倉石知蔵又タ来リテ上京ヲ報ス、横田来
リ、講義録ノ原稿「(11オ)」ヲ請フ、明後日之レヲ与
シコトヲ約ス、青地来リ訪フ、午後中川源造ノ書ニ接
ス、田原来リ話ス、晩間横田講義会規則数十部ヲ贈ル、
高田来リ話ス、明日鷗渡会ヲ開カンコトヲ約ス、

初三 早起、政治原理ヲ筆シ午時ニ至ル、蓋シ講義会ノ

印刷ニ附センガ為メナリ、午後校ニ昇リ書生ニ課ス、
書ヲ小川、岡山ニ投シ、本夕鷗渡会ヲ開クコトヲ報ス、
又タ書ヲ高田、竹村ニ投シ事ヲ弁ス、前島老ノ書ニ接
ス、直ニ之レニ答フ、放課後還家、山田ヲ伴フテ鷗渡
会ニ臨マントス、在「(11ウ)」ラス、之レヲ家人ニ訪
フ、余カ内人ヲ携テ亀井ニ到ルト、尾崎行雄ノ書ニ接
ス、新潟ノ人漸ク降参ノ意ヲ伝ヒ余カ承諾ヲ請フ、余
今夜鷗渡会員ニ謀ラント欲スルナリ、言ヲ山一ニ遺シ
車ヲ飛ハシテ蓬萊亭ニ赴ムク、途上高田ニ遇フ、相携
テ到ル、漸クニシテ会員皆ナ集マル、置酒欵談、十一
時ニ至リテ散ス、今夜床上山一兄ト政治上ノ事ヲ談シ、
傍ラ相互ノ身事ヲ議シ、曉大二到ル、本日午後、竹村
ノ書ニ接ス、

初四 山一兄、静岡ニ帰ラントス、置酒袂ヲ分ツ、「(12
オ)」校ニ昇リ書生ニ課ス、放課後旧総理ヲ訪ヒ新潟行
ヲ議ス、総理、余カ行ヲ慫慂シテ已マス、辞シ帰ル、
途々前島老ヲ過ク、遇ハス、還家疲勞甚シク平臥仮寝

ス、眠ヲ得ス、起テ政治原理ヲ筆ス、進文学社ノ書ニ接ス、余ヲ講師ニ委任スルナリ、前島老ノ書ニ接ス、小勝方勝、門馬信義上京、来リ訪フ、執筆忙ハシク接スル能ハス、余カ中心快カラサル者アルナリ、山一ヨリ横浜ヨリ書ヲ投シ雑誌ノ稿ヲ送ル、晩間疲労甚シク一醉寢ニ就ク、書ヲ田原ニ投シ明日昇校ヲ辞」(12ウ)ス、政治原理雑誌ノ稿執筆一日ヲ要スルヲ以テナリ、初五 早暁本田信教来リ訪フ、原理ヲ筆ス、横田人ヲ遣ハシテ原理ノ草稿ヲ請フ、既成ノ分ヲ与フ、水谷ノ書ニ接ス、監獄視察録ノ返還ヲ欲スルナリ、高田人ヲ以テ雑誌草稿ヲ送ル、午後一時原理草稿成ル、上郵ス、書ヲ家弟及ヒ横田ニ投ス、横田人ヲ遣ハシテ原理刻本ノ校正ヲ請フ、虞刺士蘇頓⁽¹⁷⁾ノ伝ヲ筆ス、雑誌ノ料ニ充ルナリ、筆シ了リテ之レヲ三益社ニ投ス、前島」(13オ)老ヲ訪フ、遇ハス、還家横田来リ訪ヘ、事ヲ話ス、初六 雨、昇校政治原理ヲ校シ、政学会ニ投ス、課書生、片山ト話ス、監獄論上梓ノ事、正サニ整ハントス、放課後前島老ヲ訪ヒ、山喜、義真ノ詞訟調停ノ事ヲ話ス、

家ニ還リ、原理印本ヲ校シ、雨ヲ衝テ尾崎ヲ報知社ニ訪ヒ新潟行ヲ話ス、事稍々決ス、岡山ヲ訪フテ新潟行ヲ話ス、岡山之レヲ可トス、還家斎藤謙、小塚方勝ノ書ニ接ス、方勝明朝来訪ヲ約スルナリ、晩間石川ノ書ニ接ス、」(13ウ)

七日 雨、困睡、昇校ノ時ヲ失ス、遂ニ校ヲ罷ム、横田書ヲ以テ金円ヲ贈ル、人ヲ木下、石川ニ遣リ、事ヲ弁ス、家人ト新潟行ノ準備ヲ為ス、午後、熊倉老ヲ訪ヒ心事ヲ話ス、晩間家ニ還リ政治原理ノ印本ヲ校ス、浴後一酌、寢ニ就ク、

八日 晴、昇校書生ニ課ス、高田兄ニ山喜、義真詞訟調停ノ事ヲ托ス、兄之レヲ諾ス、又来十一日ヲトシ蓬萊亭ニ謝労會ヲ開キ、田原力学校改革以来監督ノ勞ヲ謝サンコトヲ議ス、衆皆ナ之レヲ諾ス、高田、余ヲシテ此事ヲ幹セシコトヲ請」(14オ)ス、書ヲ前島老ニ投シ、高田調停ヲ諾セルコトヲ報ス、門馬信義、小塚方勝来リ訪フ、放課後両氏ヲ携テ家ニ還リ置酒、時事ヲ談ス、頃刻ニシテ去ル、書ヲ和氣及ヒ手塚ニ投ス、晩間本田

来リ話ス、

九日 晴、日曜、校ニ昇ラス、朝餐後物ヲ齋ラシテ田原ヲ訪ヒ、拳女ヲ祝シ、且ツ余カ心事ヲ語り事ヲ托ス、置酒款談、刻ヲ移ス、午時辭シ去リ、築土松風亭、越佐懇親会ニ列シ、先哲叢話ヲ演ス、午後家ニ還ル、小野義真、書ヲ副テ梓君遺稿類^(14ウ)ヲ贈ル、書ヲ投シテ之レニ答フ、手塚ノ書ニ接ス、直チニ之レニ答フ、晩間前島人ヲ以テ信書ヲ寄ス、小野義真、余、及ヒ高田ヲ饗応センコトヲ照会スルナリ、明旦答シコトヲ約シテ還ス、

初十 晴、早起、片山ヲ訪ヒ監獄學上梓ノ事ヲ話ス、渡辺安積⁽¹⁸⁾ニ邂逅ス、家ニ還リ校ニ昇リテ書生ニ課ス、書ヲ三宅ニ投シ、今夕蓬萊亭ニ会スルコトヲ告ク、放課後家ニ還リ、車ヲ飛ハシテ蓬萊亭ニ到ル、頃刻ニシテ高田、天野、坪内、田原、三宅、皆來集ス、開宴、田原ノ勞ヲ謝スル為メ、余^(15オ)場ノ演說ヲ為シ、衆ニ代リテ謝意ヲ陳ス、既ニシテ衆皆ナ酔ヒ、飲ヲ尽シテ散ス、時二十二時、

新・翻刻「春城日誌」(一)

十一日 晴、早晚横田敬太來訪、講義出版ノ條約ヲ締結、約書ニ捺印ス、手塚ノ書ニ接ス、書ヲ前島老及ヒ高田ニ投ス、本日故アリテ校ニ昇ラス、在坂家弟ノ書ニ接ス、前島老ノ書ニ接ス、西哲叢話ヲ校シ三益社ニ投ス、書ヲ上杉熊松ニ送り本夕來訪ヲ求ム、諾ス、家大人來リ事ヲ話ス、晩間上杉來ル、置酒款談ス、家弟ノ書ニ接ス、講義録印刷成ル、檢印ヲ捺シテ遣ル、手^(15ウ)塚來リ雜誌ノ事ヲ話ス、

十二日 昇校書生ニ課ス、放課後手塚ヲ訪ヒ雜誌印刷ヲ促ス、岡山ヲ訪フ遇ハス、太田生ニ事ヲ遺シ、天野ヲ訪ヒ雜誌ノ事ヲ告テ家ニ還ル、家弟ノ書ニ接ス、

十三日 晴、風アリ、尾崎ノ書ニ接ス、曰ク、(改行・ママ)只今新潟ヨリ返書有之、種々申訳ヲ致セル末、至急赴任シ呉レトノ事ニ御座候、但シ当方ヨリハ論争類似ノ書面ヲ差出候事故、是ト同時ニ旅費ヲ請求スルモ如何ト存シ、^(16オ)旅費丈ハ黙々ニ附シ置候、云々、

新潟行初メテ決ス、新潟行ノ決セサル于茲一月有半ヲ

余セリ、彼レ人ニ対スルノ道ヲ知ラス、無礼咎ム可キ者歟カラス、余豈ニ之レカ招聘ヲ快シトスル者ナランヤ、只タ余ハ他ニ目的ヲ有ス、新潟ノ聘ヲ謝絶スル、余カ目的ヲ併セ損スルヲ奈何セン、而般ノ思想、一ハ惹キ一ハ推ス、而シテ余カ辞セサル者、余カ有スル目的ノ少ナラサル者アレバナリ、昇校書生ニ課シ、尾崎ノ書ヲ高田ニ示シ、且ツ田原ト事」(16ウ)ヲ話ス、還家、佐藤慎来リ、渋谷云々ノ事ヲ話ス、蓬萊亭人ニ物ヲ齎ラシメ来リ贈ル、蓋シ前タノ集会ヲ謝スルナリ、乗車、小野田元熙ヲ訪フ遇ハス、予テ借受セル監獄視察録ヲ還シ併セテ物ヲ贈リテ謝ス、倉石ヲ訪フ遇ハス、遂ニ岡山ヲ訪ヒ渋谷ニ邂逅シ、余カ学校後任者ノ周旋ヲ托ス、渋谷、萩原朝之助ヲ薦ム、余今夜萩原ヲ訪フテ決センコトヲ約シテ家ニ還ル、書ヲ手塚ニ投シ、雜誌印刷ヲ促ス、倉石ノ書ニ接ス、直ニ之レニ答フ、黒岩規ガ内室ノ計ニ接ス、吊書ヲ」(17オ)裁シテ上郵ス、田原金円ヲ送ル、書ヲ山田ニ投シ新潟行ノ決セルヲ報ス、晚餐後尾崎ヲ訪フ、又萩原ヲ訪フ、萩原ニ托スル

ニ余カ後任ノ事ヲ以テス、一兩日ヲ刻シ決答センコトヲ約ス、

十四日 小雨、昇校、大隈老ヲ訪フ遇ハス、尾崎ノ書ヲ執事ニ托シテ見セシム、高田ノ書ニ接ス、兄今日校ニ昇ラス、代リテ書生ヲ試ム、書ヲ前島老ニ投ス、直チニ答書ニ接ス、書ヲ尾崎及ヒ萩原ニ投ス、還家山一ノ書ニ接ス、前島、高田、小野ヲ訪フ、

十五日 晴、暑氣如蒸、尾崎ノ書ニ接ス、昇校高田、」(17ウ)天野、田原等ト事ヲ話ス、旧総理ヲ訪フ、病ヲ以テ謝ス、午時高田ノ家ヲ訪ヒ新潟行ヲ話ス、三時与ニ携テ新橋ニ赴ク、横浜ノ同政会支会演説会ニ臨マントスルナリ、路々久松ヲ国文社ニ訪フ、時將サニ発車ノ刻ニ近シ、車ヲ飛バシテ停車場ニ抵ル、天野、黒川ニ会ス、相携テ車ニ上ル、横浜高野ノ家ニ投ス、今夜演説会ヲ薦座ニ開ク、余「支那人学ブベシ学ブ可ラズ」ノ一題ヲ演ス、三浦、毛受駒太郎、内藤於菟彦等来リ接ス、十一時辞シテ東京ニ還ル、還家尾崎」(18オ)ノ書ニ接ス、

十六日 晴、倉石、小川、佐藤慎、斎藤謙、古田鎮三等
来り訪フ、十一時小川ト共ニ山喜ヲ訪フ遇ハス、政学
講義会事務処ヲ過キ横田ト話ス、遂ニ小川ヲ訪ヒ上野
池畔ニ徜徉ス、再ビ小川ノ家ヲ訪ヒ、書ヲ荻原ニ投シ
決定ヲ促シテ家ニ還ル、家大人待ツコト久シ、閑談刻
ヲ移ス、田原、物ヲ
贈ル、

十七日 晴、山喜ヲ訪ヒ小野義真ノ意ヲ告テ葛藤ヲ調停
シ、且ツ事ヲ托ス、石川ヲ訪ヒ事ヲ約ス、牟田（元吉）口ヲ訪
フ遇ハス、遂ニ氏ヲ壬午銀（18ウ）行ニ訪ヒ事ヲ托
ス、辞シテ尾崎ヲ報知社ニ訪ヒ氏カ書札ヲ得テ再ヒ壬
午銀行ニ行ク、書ヲ藤田茂吉ニ与ンガ為メナリ、遇ハ
ス、書ヲ托シテ去ル、荻原ヲ文部省ニ訪フ、氏今夜ヲ
以テ決答センコトヲ約ス、書ヲ学校ニ投シ、本日欠勤
ヲ報ス、午時炎暑仲夏ノ如シ、車ヲ馳セテ家ニ還ル、
更ニ熊倉老ヲ訪フ、客アリ、事ヲ話スル能ハス、辞シ
テ家大人ノ居ヲ訪ヒ北堂ニ北越行ヲ告ケ、晩間家ニ還
リ、政治原理ヲ筆ス、夜半高田来り訪フ、田原又タ追
摂来ル、与ニ将来ヲ（19オ）談シ、余力去後ノ事ヲ

托ス、荻原、人ヲ遣ハシ書ヲ贈ル、氏カ諾否未タ決セ
ス、横田原稿用紙ヲ贈ル、

十八日 晴、北堂来り訪ヒ事ヲ話ス、政治原理ヲ筆シ午
後一時ニ至ル、内人ヲ山田喜ノ家ニ遣リ事ヲ処セシム、
弁セズシテ帰ル、学校ニ到リ旧総理ヲ訪ヒ別ヲ告ク、
書生ニ会シ論理学ノ質義ニ答フ、六時家ニ還ル、小雨
アリ、既ニシテ風雨甚シ、車ヲ飛シテ富士見軒ニ到ル、
蓋シ専門学校、壬午協会、報知社ノ諸人相会シテ余カ（19ウ）行ヲ送ラントスルナリ、会スル者、前島、北
畠、大隈英麿、尾崎、犬養（憲）、箕浦、波多野伝、関、片山、
高橋周治、股埜時中、天野、岡山、高田、小川、渋谷、
吉田祥三郎、桐原、中橋、枝元、三宅、田原、門馬等
二十余人、尾崎、波多野、天野等送別ノ演説ヲ為ス、
余之レヲ謝シ又タ志ヲ告ク、十時散会、家ニ還リ政治
原理ヲ筆シ深更寝ニ就ク、
十九日 雨、若桑来り別ヲ告ク、佐藤来り事ヲ話ス、家
大人又来り話ス、原理ヲ筆ス、荻原ノ書ニ接ス、偶々
田原来り訪フ、荻原ノ書ヲ与ヒ高田（20オ）等ト商

議セシム、集成社人ヲシテ新聞用紙ノ見本ヲ齎ラサシメ、新潟新聞社ニ致サンコトヲ託ス、原理ヲ筆ス、午後神楽坂求友亭ニ到ル、生徒等、余カ行ヲ送ラントシテ斯ニ宴会ヲ開クナリ、会スル者五十余名、皆ナ立ツテ懇篤余カ薫陶ヲ謝ス、余モ又タ一場ノ演説ヲ為シ志ヲ告ク、家ニ還レバ本田追撰シ来リ、別ヲ告ク、佐藤来リ事ヲ話ス、横田又タ来ル、新潟行ヲ報シテ別ル、夜間原理ヲ筆ス、上杉ヲ訪フテ明日発程ヲ報シ別ヲ告ク、石川ノ書ニ接ス、人」(20オウ)ヲシテ書ヲ齎ラシ山田ニ到ラシム、其答書ニ接ス、

念日 晴、本日北越ノ行ヲ啓カントス、家人ニ命シテ行李ヲ整ヘシム、大人、北堂来リ訪ヒ別ヲ告ク、小川、上杉、又タ来リテ別ヲ告ク、馳車熊倉老ヲ訪ヒ袂別ス、午後十時遂ニ小石川ヲ発ス、上野停車場ニ到レバ河内広余等ヲ待ツ、告クルニ余等ニ伴フテ北越ニ帰ランコトヲ以テス、時尚ホ十時卅分ニ至ラス、内人ヲ携テ一酒楼ニ飲食シ直ニ停車場ニ到ル、枝元、余カ行ヲ」(21オ)送ラントテ来リ会ス、既ニシテ発車ノ刻

至ル、枝元ニ別ヲ告ケ三人火車ニ駕ス、北行途次ニ滯淹スルヲ欲セス、信州路知音多シ、或ハ旅中日子ヲ徒費センヲ恐ル、故ニ道ヲ清水ニ取ラントスルナリ、午後三時半、前橋停車場ニ着ス、車ヲ僦フテ逆旅油屋ニ投ス、本日講義録ヲ筆シ了センコトヲ欲ス、故ニ日高キモ道ヲ貪ラサルナリ、河内独リ明日相会センコトヲ約シテ発ス、講義録ヲ筆シ、高田ニ投ス、」(21ウ)

念一日 曇、早天腕車ヲ僦フテ発ス、車上尾崎著微候ノ伝ヲ読ム、晩間湯原ノ駅ニ投宿ス、駅温泉アリ、一浴ス、温泉透明少シク塩味ヲ帶ブ、此辺街道最僻ノ処、飲食皆ナ口ニ適セス、

念二日 晴、腕車湯原ヲ発ス、行二里余、車ヲ通セセス、人ヲ僦フテ内人ヲ負ハシメ河内及ヒ一路客ト与ニ歩ス、Bundoニ至レバ将ニ午時ナリ、一店ニ入り喫餐シ清水峠ヲ攀ツ、中腹以上、残雪未タ消セス、降路図ラス道ヲ失シ深谿ニ入ルコト数十町、僅カ二人ノ為メニ助ケ」(22オ)レ、終ニ内人等ニ会フ、四時清水駅ニ達シ車ヲ僦フテ六日町ニ入ル、時ニ日既ニ暮ル、即チ円方樓

二投ス、今夜信書ヲ裁シ高田兄ニ投ス、

念三日 晴、乗船、六日町ヲ発シ午後三時長岡ニ達ス、
恰カモ瀛船解纜ノ時ニ会ス、即チ駕ス、船中寺崎至ニ
邂逅ス、午後九時新潟ニ達シ、小山九平ニ投ス、偶々
丹呉老⁽⁵¹⁾、匹志宇等淹留シテ在リ、互ニ別後ヲ話シテ相
歎ブ、書ヲ鈴木長蔵、佐瀬⁽⁵²⁾ニ投シ、着港ヲ報ス、尚ホ
書ヲ家大人、本所、高田、天野、田原、尾崎等ノ諸人
ニ投シ、安着ヲ報ス、」(22ウ)

念四 曇、鈴木長、来リ訪フ、踵テ佐瀬、小崎懋⁽⁵³⁾、大桃相
資⁽⁵⁴⁾来リ訪フ、頃刻ニシテ皆ナ辞シ去ル、既ニシテ佐瀬書
ヲ遣シ、今夜相会センコトヲ請フ、諾ス、次テ小崎ノ
書ニ接ス、又今夕新潟新聞社員相会シ宴席ヲ張ランコ
トヲ請フナリ、余未タ答ス、佐瀬ヲ新聞社ニ訪ヒ此事
ヲ図ル、佐瀬曰ク、余請フ、一楼ニ行テ君カ来ルヲ待
タン、君先ツ小崎等ノ需ニ応スヘシト、坂本宗次郎ニ
接ス、新潟新聞ヲ訪ヒ社員ニ接ス、既ニシテ辞シ去リ、
栗林ヲ訪ヒ深ク将来ヲ托ス、帰寓後、書ヲ広井一⁽⁵⁵⁾、久
代、正田等ニ投シ、着港」(23オ)ヲ報ス、晩間、新

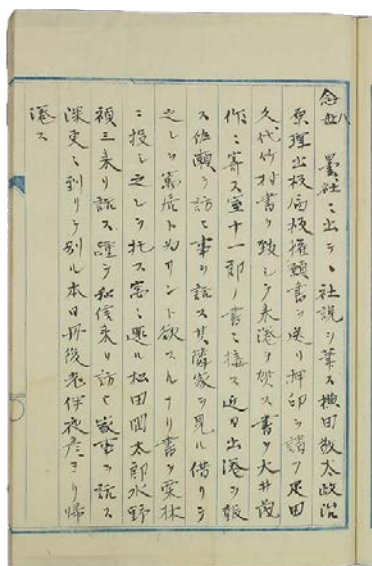
潟新聞社員来リ訪ヒ、余ヲ伊太利軒ニ招テ饗ス、散会
後、佐瀬ヲ島清ニ訪ヒ歎談痛飲、深更寓ニ帰ル、

念五日 晴、書ヲ佐藤伊三郎ニ投ス、山一、河内ノ書ニ
接ス、川崎芳之助ヲ伴フテ白山祠内ニ逍遙シ、遂ニ延
寿亭ニ飲ム、川崎ハ此行ノ路伴、東京某社ノ商人ナリ、
頃刻、寓ニ帰ル、小崎、坂口五峯ヲ伴ヒ来リ、明治協
会支会ノ事ヲ議ス、既ニシテ里村太利又タ来リ訪フ、
談笑数刻、皆ナ去ル、晩間佐瀬来リ訪フ、置酒歎談ス、
本日丹」(23ウ)

(第三冊ここまで、以下第四冊に文章が続く)

〈二三丁裏上部欄外〉「閲覽室」(朱印)

○第四卷



第4卷2オ

翻刻

「菰月蘋風樓日録 四卷」(イ四 一九一九 五一九)

〈表紙左端〉

「菰月蘋風樓日録 四卷」

〈表紙見返〉

「38—9305」(黒ナンパリング)

〈遊紙なし〉

「一丁表上部欄外」(176784) (紺ナンパリング)、

「十九年」(鉛筆書)

〈本文〉

(本文は三卷より続く)

呉老、新潟ヲ発シ伊夜彦^(赤彦)ニ赴ク、

念六

(以下余白) (1オ)

(1ウ 空白)

念八

⁽⁵⁷⁾

曇、社ニ出テ、社説ヲ筆ス、横田敬太、政治原理

出版届板権願書ヲ送り押印ヲ請フ、疋田、久代、竹村、

書ヲ致シテ来港⁽³⁸⁾ヲ賀ス、書ヲ大井茂作⁽³⁹⁾ニ寄ス、室十一

郎ノ書ニ接ス、近日出港ヲ報ス、佐瀬ヲ訪ヒ事ヲ話ス、

其隣家ヲ見ル、借リテ之レヲ寓居ト為サント欲スルナ

リ、書ヲ栗林ニ投シ、之レヲ托ス、寓ニ還ル、松田国

太郎、水野禎三来リ話ス、踵テ和信来リ訪ヒ、家事ヲ

話ス、深更ニ到リテ別ル、本日、丹後老伊夜彦ヨリ帰

港ス、」(2オ)

念九 晴、寓ニ在リ社説ヲ筆ス、十時新聞社ニ到リ事ヲ
処ス、和信来リ訪フ、携テ新渴「ホテル」ニ喫餐シ社
ニ還ル、前島老ノ書ニ接ス、感冒未タ愈ス、寓ニ帰リ
温臥ス、大坂屋弥吉来リ訪フ、夏衣ヲ整ハシム、寺崎
至来リ話ス、和信来リ訪フ、頃刻ニシテ去ル、真嶋信
城来リ話ス、書肆片桐来リ、尾崎著微候伝售売ノ事ヲ
話ス、就寢後原信水名刺ヲ通シ、明日来訪ヲ約シテ還
ル、(以下余白)」(2ウ)

卅日 晴、日曜、感冒稍々愈ユ、丹呉老西條ニ還ル、越
中新聞印牧順作ノ書ニ接ス、和信書ヲ送り帰泉ヲ報
ス、阿部欽次郎来リ久情ヲ話ス、栗林ヲ訪ヒ其家人ト
共ニ新居ニ到リ移転ノ準備ヲ為ス、栗林頗ル周旋ヲ勉
ム、厚志謝スヘシ、寓所ニ還リ明日ノ社説ヲ筆ス、中
村久孝来訪、久情ヲ話ス、晩間乳母来ル、又タ東富五
郎、高橋富吉来リ話ス、書ヲ尾崎及ヒ横田ニ投ス、
尽日 在京得所叔ノ書ニ接ス、出社事ヲ処ス、大井茂作、
広井一、竹村良貞ノ書ニ接ス、寺崎和吉」(3オ)来訪、

久情ヲ話ス、在坂家弟ノ書ニ接ス、直ニ之ニ答フ、書
ヲ石川清一、及ヒ原川権平ニ投ス、晩間一酌ス、金沢
頼三、小崎懋来リ訪フ、相携テ偕楽館ニ呑ム、既ニシ
テ大ニ酔ヒ、三会ニ転シテ更ニ呑ム、酔倒寓所ニ帰ル
能ハス、酔裡金円ヲ失フ、

六月一日 宿醒覚メス、寢臥午時ニ到リ漸ク社ニ出ツ、
佐藤伊三郎、丹呉勝吉ノ書ニ接ス、為換ヲ尾崎及ヒ大
人ニ贈ル、書ヲ和信ニ投シ内人ノ帰渴ヲ促ス、⁽⁶⁾横田敬
太ノ電音ニ接ス、晩間真」(3ウ) 嶋信城、寺崎和吉、
大橋富作等追撰来話ス、

二日 晴、家大人ノ書ニ接ス、出社社説ヲ筆ス、原川権
平ノ答書ニ接ス、午後帰寓ノ途次、栗林ヲ訪フ、帰寓、
内人五泉ヨリ帰ル、今夜水曜会ニ臨ムノ約アリ、故ア
リテ辞ス、晩間速水金治、片桐等来リ話ス、書ヲ勇吾
叔ニ投ス、

三日 晴、内人ヲ携テ栗林ヲ訪ヒ、遂ニ新居ニ到ル、本
日移転セントス、親故旧縁皆ナ集マリテ準備ヲ助ク、
社ニ出テ社説ヲ筆ス、午時家ニ還リ、諸人ト転居ノ祝

酒ヲ挙ク、再ヒ社ニ抵ル、室」(4オ)十一郎来リ訪フ、相携テ家ニ還リ、遂ニ寺崎至ヲ訪フ、竹島安太郎ニ邂逅ス、晩間共ニ堀田楼ニ飲ム、市島久三郎来リ訪フ、

四日 小雨、出社々説ヲ筆ス、尾崎行雄ノ書ニ接ス、坪内、未来之夢ヲ贈ル、午後家ニ還ル、久三郎、信城、栗林老母来リ訪フ、初更速見金治、大沢邦太郎来リ訪フ、与ニ久情ヲ話シ将来ノ事ヲ約ス、

五日 雨、出社、事ヲ処ス、午時寓ニ帰ル、栗林婦人来リ訪フ、大沢亦タ門ヲ叩ク、事ヲ話シ数刻ニ」(4ウ)シテ別ル、出社再ヒ事ヲ処ス、帰寓後高橋、新喜太郎及ヒ中学校ノ諸生数輩来リ話ス、鈴木長蔵書ヲ送りテ鍋茶屋ニ招ク、浜正弘、室、其他商人数輩ニ会ス、晩間家ニ還ル、佐瀬、萩原来リ訪フ、置酒歎談ス、五泉ヨリ荷物到来ス、

六日 休暇日、家ニ在リ、佐瀬来リ訪フ、政治原理ヲ筆ス、大桃相資来リ話ス、置酒刻ヲ移ス、大沢邦太郎来リテ別ヲ告ク、市島久来リ訪フ、大橋来話ス、今夜、書ヲ昆田文次郎、川上淳一郎、丹後直平、佐藤伊三郎

等ノ諸人ニ発ス、蓋シ来港ヲ」(5オ)報シ、将来ノ誼ヲ厚フセンコトヲ求ムル也、阿部使ヲ遣シテ物ヲ贈ル、(以下余白)」(5ウ)

(六行余白)

七日 出社々説ヲ筆ス、帰寓政治原理ヲ筆シ夕陽ニ至ル、原理稿成ル、大橋来リ訪フ、

八日 晴、出社、講義ヲ校シ高田ニ投ス、社説ヲ筆シ事ヲ処ス、午後、和田義軌ヲ訪ヒ久田ヲ訪」(6オ)フ遇ハス、阿部ヲ訪フ、真嶋信城ト途上ニ邂逅シ遂ニ信城ノ寓ヲ訪ヒ、栗林ヲ訪ヒ、身事ヲ話ス、夕陽家ニ還リ一醉寝ニ就ク、

九日 晴、出社々説ヲ筆ス、午時大橋富作物ヲ齎シ来リ、和泉氏ノ改革ノ事ヲ話ス、

十日 出社、々説ヲ筆シ事ヲ処ス、書ヲ高田、岡山、小川、本田ニ投ス、今井信友ノ書ニ接ス、帰寓後市島恵喜多来リ接ス、恵喜多、久三郎ノ養子ナリ、初メテ相見ル、置酒、閑話ス、小崎来リ訪フ、」(6ウ)

十一日 曇、出社、社説ヲ筆シ事ヲ処ス、午時帰寓、真

嶋叔母大山ノ釀一樽ヲ携へ来り贈ル、久情ヲ閑談スル
コト頃刻ニシテ別ル、書ヲ家大人ニ投ス、

十二日 炎暑如蒸、寒暖計九十度ニ登ル⁽⁶²⁾、出社々説ヲ筆
ス、小見桂作ノ書ニ接ス、通信者タランコトヲ請フナ
リ、之レヲ諾ス、午後、丹後兄ノ答書ニ接ス、昆田文
次郎及清水忠四郎来り訪フ、途上師岡泰平ニ邂逅ス、
夜間、昆田、清水来話ス、

十三日 小雨、本所叔ノ書ニ接ス、市島サダ^(マ)「ノ訃」

(7オ)ニ接ス、吊状ヲ發ス、佐藤伊三郎ノ書ニ接ス、
田原、校則ヲ贈ル、栗林貞吉来り話ス、今井信友、城
戸某ヲ携へ来ル、真島桂^{桂次郎}、追撰又來訪ス、午後明治協
会ニ臨ム、初メテ樋口元周二面ス、昆田、清水ヲ訪ヒ
遂ニ真桂ヲ旅寓ニ訪フ、遇ハス、晩間再訪ヲ告ケテ家
ニ還ル、家人告ク、師岡泰平、島興七来り訪フト、同
攻会雜誌ヲ領手ス、田原書ヲ以テ学校ノ近況ヲ報ス、
晩餐後真嶋ヲ山口屋ニ訪フ、両新聞併同ノ得失論シテ
家ニ還ル、政学講義録ヲ領手ス、」(7ウ)

十四日 出社事ヲ処ス、本日真嶋ヲ訪フノ約アリ、事ア

リテ到ラス、午後信城及ヒ片桐来り訪フ、田原規則書
ヲ贈ル、

十五日 川上淳一郎ノ書ニ接ス、中野老母物ヲ携テ来リ
訪ヒ久情ヲ話ス、出社々説ヲ筆ス、帰寓一浴、新津町
桂重章、服部保人、金津村中野貫一等、物ヲ齎ラシ来
リ、事ヲ託ス、蓋シ諸人ハ皆ナ石油ヲ業トスル人ナリ、
頃日、坑法ニ違犯スルヲ以テ券状ヲ引上ラル故ニ来リ
テ之レヲ商量スルナリ、」(8オ)

十六日 晴、出社社説ヲ筆シ事ヲ処ス、午後帰寓、信城、
政之助等来り訪フ、今夜水曜会ナリ、例刻臨席ス、初
メテ篠崎^{五郎}県令ニ接ス、又タ今井成秀ニ邂逅ス、成秀、
新津病院院長ナリ、頃日衛生会ニ臨席スル為メ来港セル
ナリ、帰寓家人告ク、久三郎妻、坂口仁一郎、栗林貞
吉等来り訪フト、坊間康熙字典ヲ購フ、

十七日 晴、出社々説ヲ筆ス、佐藤伊三郎物ヲ齎ラシテ
来り訪フ、相携テ家ニ還リ、久情ヲ話シ心事ヲ告ケ將
来ノ事ヲ議ス、頃刻ニシテ別」(8ウ)ル、午後家ニ
還ル、栗林、大橋、中野等來話ス、家大人ノ書ニ接ス、

出社間、今井玄秀来り訪フ、晚間近藤玄泰、野口竹二郎来り訪ヒ、新潟区内水道敷設ノ計画ヲ話シ、其請願書ノ斧正ヲ請フ、諾シテ還ス、本日午後、斎藤軍八郎来話ス、氏、学友会員ニシテ本港商法学校⁶³ノ教員ナリ、又信城来り、教ヲ受ク、

十八日 雨、真柄富衛、桂等ノ添書ヲ齎シ来り、願書ノ刪正ヲ請フ、諾シテ還ス、栗林ヲ訪ヒ貞吉ト坊間ニ漫步シ物ヲ買フテ家ニ還リ、^(9オ)終ニ出社々説ヲ筆ス、石川ノ書ニ接ス、書ヲ山一、斎藤、坂井ニ投シ、新聞ノ交換ヲ需ム、還家、信城来り訪フ、即チ課ス、野口来り訪フ、願書ヲ作りテ送ル、石川ニ答フ、

十九日 雨、河水暴漲、門前ニ到ル、出社々説ヲ筆ス、星松三郎書ヲ越中富山ヨリ發シ、本日來港ヲ報ス、高田ヨリ雜誌原稿用紙到達、領手ス、大務新聞社才東^(前巻)坂井等ニ發電シテ、自由党拘引ノ事ヲ問フ、午後答電ニ接ス、問柄来り訪ヒ物ヲ贈リテ請願書ノ校刪ヲ請フ、帰寓、在坂家^(9ウ)弟ノ書ニ接ス、高早自著通信教授政体学ヲ贈ル、⁽⁶⁴⁾渋沢栄一來港シ、本タヲトシテ堀

田樓ニ港地ノ有力者ヲ招ク、余又与ル、六時小崎ト共ニ行ク、來集スル者、無慮七八十名、県官、若クハ港地ノ紳商ナリ、新交ヲ結ブ人少ナカラス、宴散シ、浜正弘ト三会ニ飲ミ、遂ニ家ニ還ル、星松三郎、角屋ヨリ書ヲ遣ハシ來港ヲ報ス、

念日 休暇日、大桃来り訪ヒ社事ヲ話ス、星ヲ訪フテ別後ノ事ヲ話シ、本地ノ近況ヲ告ク、相携^(10オ)テ家ニ還リ置酒款談ス、午後、尾崎、小坂、本田ノ書ニ接ス、本田亦タ余カ政治学講義ヲ郵送ス、午後、信城ト共ニ同窓会ニ臨ム、同会ハ中学校生徒ノ立ル処、出席員七十余名、余為メニ一場ノ演説ヲナシ、了リテ家ニ還ル、大沢邦太郎来訪ヒ、亀田協會ノ講師タランコトヲ請フ、諾シテ還ス、中野平弥来り訪フ、真柄來訪、請願書ヲ校訂シテ贈ル、

念一日 晴、佐瀬ト話シ本日星ヲ鶴揚樓ニ招クコトヲ約ス、星ヲ角屋ニ訪フ、星置酒シテ話ス、帰^(10ウ)家、喫餐シテ社ニ到リ、社説ヲ筆シ事ヲ処ス、天野ノ書ニ接ス、蓋シ新著再版成り、広告ヲ托スル也、家ニ還リ

一浴ス、栗林老母来り訪フ、晩間星ヲ訪ヒ相携テ鶴揚
楼ニ到ル、佐瀬及ヒ星カ随行、日野友四郎来り会ス、
歎話十二時ニ到リテ散ス、佐瀬ト明日星カ為メニ懇親
会ヲ開カンコトヲ約ス、本夕伊太利屋^軒ノ招ヲ受、果サス、
念二日 晴、出社々説ヲ筆シ事ヲ処ス、坂井、牧ノ書ニ

接ス、小崎ト懇親会ノ事ヲ商量ス、午時家ニ還ル、信
平子来り訪フ、四時星、日野来り訪フ、(11オ)小崎
又タ追撰シテ来ル、相携テ堀田楼ニ到ル、今夕懇親会
場ナリ、会スル者十余名、酔ヲ尽シテ還ル、家人告ク、
久三郎来り訪フト、

念三日 晴、星ヲ訪フト別ヲ告ク、出社々説ヲ筆シ事ヲ
処ス、午後家ニ還リテ講義録ヲ筆ス、物ヲ中野省吾及
ヒ鈴長ニ贈ル、晩間、遠山千里ノ書ニ接ス、

念四 晴、出社事ヲ処ス、渡辺収税長⁶⁶ノ書ニ接ス、明日
余ヲ伊太利軒ニ招カントスルナリ、講義録ヲ筆ス、書
ヲ大務社ニ投ス、家ニ還ル、栗林貞⁶⁷(11ウ)来り訪フ、
念五 出社事ヲ処ス、午後家ニ還ル、家人告ク、久田督、
佐藤伊来り訪フト、再タヒ出社、講義録ヲ筆ス、家ニ

還、佐藤伊来話ス、片桐来り訪フ、伊太利軒ニ到ルノ
約アリ、応接ヲ辞ス、六時同所ニ到ル、官民ノ紳士来
会、盛宴ヲ開ク、皆ナ渡辺収税長ノ招ニ応スルナリ、
鈴木昌司、荒川才ニ二邂逅ス、還家々人告ク、佐々木
徹、木戸保吉来り訪フト、

念六 晴、朝在家、講義録ヲ筆ス、本所叔ノ書ニ接
ス、壬午銀行請取書ヲ領ス、出社事ヲ処ス、講義録
ヲ⁶⁸(12オ)筆シ家ニ還ル、大橋来話ス、書ヲ栗貞ニ
投シ来話ヲ請フ、頃刻ニシテ来り訪フ、托スルニ事ヲ
以テス、明日演説ノ服稿ヲ定ム、今宵十時、内人頻リ
二服部ヲ傷ム、蓋シ胎ノ動クナリ、看護天明ニ到リテ
尚ホ治マラス、

廿七日 早天婢ヲ馳セテ産婆ヲ迎ヘテ看セシム、今日分
娩スベシト報ス、家人集マリテ準備ヲ為ス、之レヨリ
先キ、余、内人ヲ提ケテ清水ノ蹊ヲ越ユ、撰生甚タ怠
ル者アリ、故ニ竊カニ安産ヲ祈ル、試ミニ医ニ問フ、
医臨月ニ到ラサル⁶⁹(12ウ)ヲ患フ、余亦タ心大ニ安
カラス、人ヲ五泉ニ馳セテ此事ヲ報ス、余、今日湊座

ニ演説ヲ為スノ約アリ、紛雜ノ所ニ身ヲ居ク適セズ、
信城ヲ伴フテ偕楽館ニ到リ喫餐、腹稿ヲ定ム、正午家
ニ還ル、途次大橋ニ遇フ、曰ク安産セリト、家ニ還レ
バ家人報ス、九時分娩、男子ヲ挙ク、母子共ニ健ナリ、
余カ喜知ルベシ、電音在京ノ家大人ニ報ス、午後一時
湊座ニ到リ疑論ヲ演ス、本日偶々日曜ニ属シ、聴衆堂
ニ溢ル、終リテ島清ニ到ル、島清ハ余ヲ招クノ懇親會
場ナリ、且クシ⁽⁶⁶⁾シテ衆皆ナ集マル、皆ナ区
内有名ノ人ニシテ、余カ旧識殊ニ多シ、大沢開會ノ趣
意ヲ述ベ、余モ又一場ノ演説ヲ為シテ答フ、会衆五十
余名、近來稀ナルノ盛會ナリト云フ、

廿八日 出社事ヲ処ス、広井一、横田敬太、丹呉宗吉ノ
書ニ接ス、昨夕ノ宿醒、尚ホ散セス、心氣不快ヲ覺フ、
小崎、大桃、下村ト白山延寿亭ニ到リ一浴対酌、家ニ
還リ高早ノ書ニ接ス、袂別來ノ事ヲ報シ、小野君建碑
ノ事ヲ告ク、

廿九日 島興七、松木久、栗林等物ヲ贈リテ分婉^(13ウ)
ヲ賀ス、出社事ヲ処ス、講義録ヲ筆ス、桑田房吉來訪、

置酒款談、数刻ニシテ別ル、

卅日 晴、講義録原稿ヲ上郵ス、本日五泉和泉ヲ訪ハン
ト欲ス、書ヲ小崎、大桃ニ投シ、出社ヲ辞シ、朝餐後
発ス、坊間物ヲ購フ、安藤達ニ邂逅ス、九時瀛船ニ
駕シ龜田ニ到ル、更ニ車ヲ僦フテ五泉ニ抵ル、時二午
後二時ナリ、叔父母等ニ遇ヒ別後ヲ話シ、且ツ和泉家
改革ノ事ヲ議ス、偶々漆山大愚來訪、閑話深更ニ到リ
テ別ル、今夜和泉氏ニ泊ス、^(14オ)

○

七月一日 晴、第四時起キ、和泉ノ家人ト発、午前九時
着港、出社事ヲ処ス、今日、児ヲ命シテ機ト称ス、晚
間、坂口五峯來話ス、久三郎又タ來リ訪フ、

二日 晴、郵便局ニ到リ為替ヲ取組ミ家大人及ヒ本所叔
ニ贈ル、出社事ヲ処ス、小坂、高田ノ書ニ接ス、家ニ
還リ、嶋興七、長谷川文作來リ訪フ、藤井姉來ル、嶋
等ト白山公園内ニ飲ム、遂ニ漆屋ニ転飲シ、深更家ニ
還ル、^(14ウ)

三日 大橋佐平、⁽⁶⁶⁾安孫石太郎⁽⁶⁷⁾來リ訪フ、朝餐後出社、事

ヲ弁ス、石川ノ書ニ接ス、信城来話ス、

四日 日曜、栗林ヲ訪ヒ貞吉ト坊間ニ散策シ、終二日和山ニ遊ヒ、行形亭ニ午哺シ家ニ還ル、家人報ス、大沢山口才一郎、小崎、佐瀬等来リ訪ヒリト、唯七来リ訪フ、坊間ニ茶器ヲ購ハシム、今夜和信ヲ角屋ニ訪ヒ、携テ夜行、五泉ニ送ル、発船ノ時、将サ二十時ニ近シ、五泉和泉ニ到レハ夜既二三時、直チニ寝ニ就ク、

五日 和泉叔ト話シ、頃刻辞シテ発ス、午後二時」(15オ) 家ニ還ル、得所叔ノ書ニ接ス、社説ヲ筆シテ四時ニ到ル、晩間笠原文作来話ス、

六日 朝家大人ノ書ニ接ス、出社事ヲ処ス、大沢ノ書ニ接ス、午時家ニ還レハ真嶋叔母及ヒ良三郎子物ヲ贈リテ賀ス、晩間野口孝太郎来訪、物ヲ贈リテ前日ノ事ヲ謝シ、且ツ再タヒ願書ノ起草ヲ托ス、諾シテ之レヲ還ス、藤村長吉来話ス、丹呉叔来リ訪フ、

七日 早起、野口依托ノ願書ヲ筆ス、市島惠喜多物ヲ齎ラシ来リ賀ス、丹呉叔ヲ櫛九ニ訪ヒ、頃」(15ウ) 刻再会ヲ約シテ出社、事ヲ処ス、野口来リ接ス、願書草

稿ヲ与フ、午後、丹呉叔ヲ訪ヒ談話数刻、水曜会ニ列

ス、帰路長谷川寛治ヲ訪ヒ児カ診察ヲ託シテ家ニ還ル、本日書ヲ横田敬太及ヒ久代ニ投ス、田原ノ書ニ接ス、

八日 出社事ヲ処ス、畠山嘉三ノ書ニ接ス、十一日亀田協会ニ出席ヲ請フナリ、書ヲ投シテ之ヲ諾ス、書ヲ田原及ヒ和泉ニ投ス、午時家ニ還リ得所叔ノ書ニ接ス、午後出社、坂口五峯書ヲ行形亭ヨリ遣ハシ、林格太郎ノ意ヲ伝テ、余」(16オ)ヲ招ク、即チ到ル、談笑数刻、遂ニ再思樓ニ登リ夕陽家ニ還ル、長谷川寛来リ、児ヲ診ス、

九日 出社事ヲ処ス、高田ノ書ニ接ス、午時家ニ還ル、家人告ク、長谷川文作物ヲ携テ来リ訪フト、書ヲ小坂及ヒ広井ニ投ス、疲労甚シ、一浴一酌、直ニ寝ニ就ク、夜来風雨アリ、

十日 雨、出社事ヲ処ス、永富謙八書ヲ寄セ、八日発京、来港ヲ報ス、新潟病院長三浦省軒ノ書ニ接ス、来十三日、医学校生徒卒業式ニ臨席ヲ請フナリ、信城来リ、業ヲ受ク、」(16ウ)

十一日 雨、朝漚船ニ搭シテ亀田ニ赴ムク、同所ノ協会ニ臨マンガ為メナリ、大沢嘉登屋ニ在リテ待ツ、談話頃刻、会場ニ到ル途ニ大倉ヲ訪ヒ、遂ニ会場ニ到ル、會員畠山嘉三、玉井貞太郎、渡辺貞次郎、大沢邦太郎、山川惣太、小林恒敬、小沢晋作、大沢徳次、佐藤八四三、村木慎二郎、児玉晋爺、大倉悌次、来リ会ス、皆ナ当地富豪ノ子弟ナリ、談話協会将来ノ事ヲ議シ、遂ニ会員タルコトヲ諾シ、毎会臨席講義ヲ為スコトヲ約ス、先ツ政治学第一回講義ヲ為ス、終リテ置酒、余」(17オ) 立テ一場ノ演説ヲ為シ、協会及ヒ書籍館設立ヲ賀ス、終ニ辞シテ帰港、家ニ還ル、時將サニ七時、家人告ク、佐藤玄信来リ訪フト、晩間石井謙三来リテ事ヲ話ス、踵テ長谷川文作来話ス、

十二日 晴、出社事ヲ処ス、和泉ノ書ニ接ス、書ヲ横田及ヒ星ニ投ス、社業了リ社員ト白山公園ニ散策シ、偕樂園ニ飲ミ、晩間家ニ還ル、佐藤玄、社ニ余ヲ訪フ、石井又タ余ヲ家ニ訪フ、

十三日 晴、書ヲ横田ニ投ス、亀田協会ノ謝状ニ接ス、

又大沢ノ書ニ接ス、出社事ヲ処ス、新潟学」(17ウ) 校卒業式ノ招状ニ接ス、家ニ還ル、赤塚姉、物ヲ携来リテ分婉ヲ賀ス、永富東京ヨリ来ル、行テ訪フ、頃刻別レテ医学校卒業式ニ臨ミ、晩間家ニ還ル、信城来リ訪フ、家大人及ヒ和泉ノ書ニ接ス、

十四日 晴、朝、森衛来リテ身事ヲ話ス、論シテ還ス、出社事ヲ処ス、久田督書ヲ致シテ曰ク、和田近日辞職出京、為メニ送別ノ会ヲ開カント、諾書ヲ贈ル、社業終リ永富ヲ訪ヒ、遂ニ堀田楼ニ到リ、和田ノ送別会ニ臨ム、余席上一場ノ演説ヲ為シ、会主ニ代ハリ和田ノ勞ヲ謝ス、深更家」(18オ) ニ還ル、家人告ク、丹呉鼎吉物ヲ携来リテ分婉ヲ賀スト、

十五日 晴、出社事ヲ処ス、小田嶋儀一郎、竹村良真、鈴木湊ノ書ニ接ス、午後赤塚夫人、大安寺ニ帰ル、和泉ノ書ニ接ス、本日新潟学校卒業式ニ臨ムノ約アリ、事アリテ辞ス、永富人ヲ遣ハシ伊太利軒ニ会食センコトヲ請フ、諾ス、既ニシテ鈴木長蔵来リ訪ヒ社事ヲ談セントス、即チ行形亭ニ飲ミ与ニ談ス、書ヲ永富ニ贈

リ違約ヲ謝ス、十一時家ニ還ル、斎藤ノ書ニ接ス、

(18ウ)

十六日 晴、丹呉鼎吉来訪、頃刻ニシテ別ル、出社事ヲ
処ス、信書ヲ裁シ鼎吉ニ托シ、俊平叔ニ致サシメント
ス、鼎吉既ニ去ル、故ニ之レヲ郵ニ上ホス、午後永富
ヲ訪フ、家ニ還ル、家人告ク、伊太利軒、人ヲ以テ余
ヲ招クト、既ニシテ吉田一策、川俣庄太郎書ヲ寄セテ
余ヲ行形亭ニ招ク、即チ伊太利軒ヲ辞シテ行形亭ニ赴
ムク、小須戸、三条等ノ紳商来リ会ス、漆山大愚、余
ヲ行形亭ニ訪フ、蓋シ和泉詞訟ノ事ヲ議センガ為メナ
リ、本夕再会ヲ約シテ別ル、九時家」(19オ)ル、漆
山来訪、詞訟ノ事ヲ談シ深更ニ到リ更ニ明日ヲ約シテ
別ル、

十七日 和泉事件ノ為メニ一日欠社ス、漆山、大橋来訪、
和泉氏訴訟及ヒ改革ノ事ヲ談シ、遂ニ永富ヨリ伝テ岡
山ニ鑑定ノ依頼ヲ托サンコトニ決ス、午後漆山、大橋
ト共ニ永富ヲ旅寓ニ訪フ遇ハス、終ニ偕楽館ニ訪フテ
相共ニ三会ニ到リ、談話数刻、永富、岡山ニ伝ヘンコ

トヲ約シテ別ル、晩間再タヒ永富ヲ訪ヒ鍋茶屋ニ飲ム、
永富、明日ヲ以テ此地ヲ發セントス、即チ今夜別ヲ告
(19ウ)ク、深更家ニ帰ル、鈴木長藏、野口竹次郎ノ
書ニ接ス、

十八日 大橋ヲ訪ヒ書ヲ桑田房吉ニ致サシム、今日午
後、堀田楼ニ会シテ和泉詞訟ノ鑑定ヲ請ハントスルナ
リ、家ニ還ル、真嶋桂次郎来訪、佐瀬来話ス、出社新
聞紙改革ノ事ヲ談ス、星松三郎、日野友四郎、市島恵
喜多ノ書ニ接ス、星又訪荒録ヲ贈ル、午後漆山、大橋
ト堀田ニ到ル、代言人石井大介、桑田房吉又来リ会ス、
即チ詞訟ノ鑑定ヲ請ヒ、夜ニ入りテ家ニ還ル、岡山」
(20オ)ノ電音ニ接ス、書ヲ高早ニ投ス、

十九日 晴、出社事ヲ処ス、漆山来話、本夕藤井忠太郎
ヲ堀田楼ニ招キ和泉家改革ノ事ヲ話センコトヲ約ス、
午後五時、漆山ヲ伴ヒ堀田楼ニ到ル、藤井又来ル、談
論数刻、改革案ヲ定ム、余、漆山ニ伴ナハレテ繡治楼
ニ飲ム、酔倒家ニ還ル能ハス、家弟ノ書ニ接ス、
念日 還家、中埜省吾ヲ訪ヒ事ヲ談ス、了リテ只七ト寓

居ヲ捜ス、既ニシテ家ニ歸リ社説ヲ筆ス、漆山、大橋、中野等來話ス、中野姉來リテ分婉」(20ウ)ヲ祝ス、熊倉老ノ訃ニ接ス、石川、小田島ノ書ニ接ス、東京ヨリ荷物到着ス、疲労甚シク客ヲ謝シテ早く寝ニ就ク、

念一日 五十嵐席三郎、旗野、藤井ノ旨ヲ承ケテ來話ス、出社事ヲ処ス、午後還家、小竹某來リ訪フ、某ハ中野ノ姻戚ナリ、五泉ノ家事ヲ担当セシメンカ為メニ托セルナリ、直チニ結束、小竹ヲ伴ナヒ汽船、満願寺ニ到リ、初更和泉ニ投ス、改革ノ事ヲ談シテ深更ニ到ル、決セス、尚ホ明日、余ノ淹留ヲ要ス、小崎ニ与フルノ書ヲ裁シ、脚」(21オ)夫ニ附ス、明朝之レヲ新渴ニ致サシメンガ為メナリ、

念二日 淹留五泉ニ在リ、叔父ト事ヲ議ス、遂ニ叔父上京、岡山ト協議スルコトニ決ス、午後可月亭ニ到リ涼ヲ納レ、家大人、岡山、香坂、石川、昆田、大沢、高田、山田ニ与フルノ書ヲ裁シテ、和泉ニ歸ル、更ニ議ヲ継キ、初更ニ到ル、脚夫、新渴ヨリ還リ、家大人ノ書ヲ齎ラス、書ヲ熊倉ニ贈リ吊詞ヲ述フ、小野君財政

論草稿ヲ漆山ニ托シ高早ニ致サンコトヲ約ス、今宵漆山ト可月亭」(21ウ)ニ飲ミ遂ニ一宿ス、

念三日 別ヲ告ケテ帰港ス、倉石、小坂、岡田庄四郎、大橋等ノ書ニ接ス、書ヲ得所叔ニ投ス、小崎來話ス、大沢、温海ヨリ書ヲ寄ス、信城ニ課ス、夜來大橋來話ス、上野喜永次、亦タ帰省、訪ヒ來ル、

念四 大橋ト玉木土用松ノ家ヲ見ル、借リテ居ランコトヲ欲スルナリ、出社事ヲ処ス、信城ニ課ス、五十嵐席三郎來話ス、(以下余白)」(22オ)

(22ウ、23オ白紙、25ノ27日欠)

念八 出社事ヲ処ス、原川權平書ヲ寄セ上京ヲ報ス、久保田熙納社事ヲ報ス、還家上野成了、保倉為七來リ訪フ、相携テ堀田樓ニ飲ミ、深更家ニ還ル、家弟ノ書ニ接ス、

念九 助次郎來リ接ス、小竹來リテ和泉ノ事ヲ話ス、書ヲ信平子ニ投ス、晚間政之助來ル、助次郎身上ノ事ヲ話ス、緑屋人ヲ遣ス、金円ヲ贈ル、

卅日 五十嵐席、信平子ノ書ヲ齎ラシテ林事件ノ急ナル

ヲ告ク、大橋、小竹ヲ訪フテ商議スル所アリ、策ヲ五十嵐ニ授ケテ還ス、出社事ヲ処」(23ウ)ス、山一、上野成了ノ書ニ接ス、漆山又タ廿七日和泉叔ト着京セ、ルコトラ報ス、(以下余白)(24オ)

(24ウ白紙)

〈二四丁裏上部欄外〉「閲覧室」(朱印)

注

(1) 早稲田大学大学史編集所『小野梓全集』五(早稲田大学出版部、一九八二年)収載。原本は国立国会図書館憲政資料室所蔵(寄託資料)。

(2) 一八三六―一八九一。広島藩医の子として生まれ、維新後は民部省、内務省に出仕、一八七七年(明治一〇)二月に团团社を設立、同年三月、滑稽諷刺雑誌『团团珍聞』を創刊し好評を博した(北根豊「野村文夫」、『国史大辞典』ジャパナレッジ版)。

(3) 『改進黨新聞』の記者。同紙は立憲改進黨系の新聞として一八八四年八月、『開花新聞』を改題して創刊した。社主兼印刷人・手塚盛寿、編集人・箕浦勝人、三益社刊。『開花新聞』、さらにそのまへの『有喜世新聞』を発行し、そ

の後も中心として活動した寺家村逸雅が改進黨に入党したことで、改進黨系の新聞となった。塚本三天「改進黨新聞」(『国史大辞典』ジャパナレッジ版)。

(4) 竹村良貞。一八六二年(文久元)新潟生。慶應義塾に学びその後帰郷、春城の高田新聞社社長時代には、同社の印刷長としてともに下獄。出獄後は『報知新聞』に勤務、さらに帝國通信社社長、東京市会議員、衆議院議員にもなった。日本風土民族協会編刊『越・佐傑人譜』(一九三八年)、「裁判言渡」(『愧存経歴文書』、春城資料 八九五)参照。

(5) このときまとめた草稿は四月に博聞社からの出版計画が進んでいるが(三卷2オ)、実際には刊行されずに終わったようである。この草稿と思われるものが、のちに東北帝國大学付属図書館に寄贈され、同大学の木村亀二が『獄政論』として全文を翻刻、刊行(有斐閣、一九四六年)、原本は現在も東北大学附属図書館に収蔵されている(同館OPACによる)。これとは別に、草稿のうち七―一〇章を収めた下巻のみが「獄政論 下」(春城資料 七五九)として伝わっている(但し、一〇章は後欠)。また、高田事件に関連して投獄された春城が、収監中に「監獄論」を執筆、出獄後に改めてその内容をまとめたことは「自叙伝材料録」二(春城資料 七五二)にも記されている。解題注(7)参照。

(6) 雪のこと。「膝六」は伝説中の雪神の名(『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版)。

(7) 早稲田大学図書館に春城旧蔵本あり(請求記号・ヘ二〇一四五)。

(8) 熊倉美雅(槐堂)。角市・市島家では熊倉家から妻を迎えたことがあり、縁戚関係にあり、春城の謙吉という名も美雅が付けたものだという。美雅は、維新後は佐渡民政庁に勤務、さらには上京し工部省に出仕していたことから、東京暮らしをはじめた春城たちも頼りにしていた。解題注(7)、(9)③など参照。

(9) 春城の父、直太郎(正克、節斎、一八三九―一九〇二)、角市・市島家五代当主。「自叙伝材料録」一参照。

(10) 静岡県奥津名産のアマダイ。『日本国語大辞典』ジャパナレッジ版。

(11) 一八五七年、大垣生。同地の中学教員などを経て上京、岡山兼吉の知遇を得、東京専門学校に入学、卒業後は岡山のもとで働く。こののち一八八七年に旧大垣藩主戸田氏共にともない渡欧、ウィーン大学、ベルリン大学などで法学を学び、帰国後は衆議院議員となった(『日本現今人名辞典』、同辞典発行所、一九〇〇年)。

(12) 小野梓の伝記や遺著出版に春城がかかわったことは本資料でも触れられているが、最終的には次のような形で完成

する。遺稿集・高田早苗編『東洋遺稿』上・下(富山房、一八八七年)、伝記・山田一郎編『東洋小野梓君伝』(同攻会、一八八六年)、記念碑・「小野梓君碑」(中村正直撰、大内青巒書、大隈重信篆額、一八八七年)。記念碑は小野の生地である高知県宿毛市の清宝寺にある。

(13) 一八三九―一九〇五、土佐国宿毛に生まれ、明治政府で大蔵少丞などを務めた後、岩崎弥太郎にその能力をかわれ三菱会社に入社し顧問として活躍した。小野梓の妹と義真の弟が結婚している。「自叙伝材料録」二参照。

(14) 前川亀次郎述刊『学術叢談』(一八八五、一八八六年)。

(15) 一八六五―一九一九、越後生。明治―大正時代のジャーナリスト。尾崎行雄の文相時代に秘書官をつとめる。弟の進午(一八七〇―一九三九)は国際法学者で東京商科大学教授、さらに早稲田大学教授をつとめ、その蔵書が一八九九年、遺族により早稲田大学に寄贈され現在早稲田大学中央図書館に「中村進午文庫」(文庫五)として収蔵されている。『日本人名大辞典』ジャパンナレッジ版、「中村進午文庫」(『ふみくら 早稲田大学図書館報』十五「館蔵特殊コレクション摘報」七一、一九八八年)参照。

(16) 雉橋は東京飯田町二丁目の大隈重信旧邸、雉子橋邸とも。大隈はこの屋敷に一八七六年(明治九)一〇月から一八八四年(明治十七)二月まで居住し、その間は雉橋老などと呼

ばれていたが、その後早稲田の新邸に移り、早稲田老、早

稲田伯などと称される。雉子橋邸は一八八七年に渋沢栄一に売却されている。春城たちはこの後何度か「雉橋」で会合を開いているが、あるいは大隈転居後の邸宅を使用していたものか。中嶋久人「雉子橋邸を知っていますか」一「[五]」〔早稲田大学ホームページ〕トピック。

(17) 『東洋小野梓君伝』(同政会、一八八六年)。編者として山田一郎が挙がっている。

(18) 新潟県(越後国)出身、一八八五年東京専門学校政治学科卒。一九〇二年、東京専門学校が早稲田大学となるにあたり寄宿舎長となっている。『早稲田大学百年史』第一巻参照。

(19) 一八四九～一九二七、東京府会議員や同議長、衆議院議員などを歴任。『日本人名大辞典』ジャパンナレッジ版参照。

(20) 角市・市島家二代、岱海(名・肅文、通称・次郎吉、一七五七～一八一三)によるもので、現在、「據言西河仲氏易草稿」の資料名で新潟県立図書館の春城文庫に収蔵されている(請求記号・春城一)。清の毛奇齡の撰による易に関する解釈である「仲氏易」三〇巻に岱海が註を加えたもの。一八二二年(文化九)の序がある。「自叙伝材料録」一、および近藤春雄『中国学芸大事典』(大修館書店、一九七八年)、新潟県立図書館ホームページ「郷土文庫の

紹介

(21) 春城の弟・豊次郎。解題注(9)②参照。

(22) Gladstone, W. E. 1809-1898, 『英米憲法比較論』草間時福訳、日野九郎兵衛、一八八六年。

(23) 一八五五～一九〇九、明治時代の国家主義者。日清戦争時には朴泳孝とともに朝鮮に渡り、内政改革に関与。その後、頭山満らと国民同盟会を組織。『日本人名大辞典』ジャパンナレッジ版参照。

(24) 岡山兼吉らが興した政治、法律、経済の研究會。岡山は明治「十五年東京専門学校創立の計画に加わり、代言人として活躍の傍ら、法律学科で、数課目に亘って講義を行った。また講義の傍ら吉田熹六、島田三郎らと壬午協會を起し、政治・法律・経済の研究機關とし、更に市島、山田一郎らと『内外政事情』という新聞を発行して、政治思想の啓蒙運動を行い、倦むところを知らなかった」(『早稲田大学百年史』第一巻四八五ページ、第十一章「創設当時の講師たち」二その他の講師群像)。

(25) 新田神社(現・東京都大田区矢口)。祭神・新田義興。

(26) 火災の意。『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版参照。

(27) 「矢口新田神君碑」服部南郭撰、松下烏石書。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」参照。

(28) 桑畑が海に変わること。有為転変のはなはだしいことの

たとえ。滄海桑田。『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版参照。

- (29) 春城は後にこの時の朴泳孝（一八六一～一九三九）らとの邂逅と歓談の思い出を随筆で詳しく述べている。「朴氏泳孝と観梅」（『随筆春城六種』、早稲田大学出版部、一九二七年）、のち「侯爵朴泳孝と観梅」と増補改題して『回顧録』（中央公論社、一九四一年）に収載。さらに春城の随筆に触れた朴泳孝が観梅の思い出を詩にして春城に届けたことが、こちらも春城の随筆「侯爵朴泳孝の贈詩」（『春城筆語』、早稲田大学出版部、一九二八年）に記され、そのなかで春城はこの詩を表装して部屋に掛けていたと述べている。この詩幅は一九九〇年、角市・市島家を守っていた市島栄治氏より早稲田大学図書館に寄贈された（『春城日誌』余滴、『早稲田大学図書館紀要』三六、一九九二年）。
- (30) 一八八四年十二月に朴泳孝ら、朝鮮の開化派がおこしたクーデター、甲申政変。
- (31) 一八四九～一九一七、幼名栄三郎、眼湖と号す。寺門静軒に学び、その孫娘と結婚する。維新後左院出仕、さらに大蔵省、内務省に勤め、一八八六年に退職。詩文に長じ、書道も巧みであり、各地の石碑に正勢の筆による碑が建立されている。「熊谷デジタルミュージアム」参照。

- (32) 天野為之『経済原論』（富山房、一八八六年）。

- (33) 真島信城。北蒲原郡濁川村（現・新潟市。北蒲原郡は一八七九年に蒲原郡から分置）の豪農、真島権兵衛の子。春城の父、直太郎の妹であるらく（楽）が権兵衛に嫁いだことから信城やその兄・桂次郎と春城との間に交流があった。信城は露邨の号を持ち漢詩文集『露邨小稿』（真島信城、一九〇一年、国立国会図書館デジタルコレクション）がある。日本風土民族協会編刊『越・佐傑人譜』（一九三八年）、「自叙伝材料録」一参照。

- (34) 『政府大改革之顛末』上編（静岡大務新聞社、一八八六年、国立国会図書館デジタルコレクション）。

- (35) 春城の母・シゲ。北蒲原郡中条町西条の豪農・丹呉家の出身。戊辰戦争の混乱期、角市家は一時シゲの実家である西条に住んでいたことがある。「自叙伝材料録」一参照。

- (36) 大隈重信、小野梓、河野敏鎌、沼間守一といった立憲改進党のメンバーらが発起人となって一八八二年十二月に設立。発会式では会長に前島密が選出されている。「交通協和ノ道ヲ開キ各人互ニ相利シ之ヲ推シテ社会ノ公益ヲ裨助スル」（『明治協会会則』、刊年不明、早稲田大学図書館所蔵）ことを目的とし、月三回の例会と雑誌（箕浦勝人編輯『明治協会雑誌』）の刊行をおこなった。春城の名も、同誌第一号収載の「明治協会会員姓名簿」に見える。小野梓「民法之骨」、山田一郎「政論と政談との別を弁す」、成島柳北

「能狂言起原の答」など話題は多岐にわたる。国立国会図書館デジタルコレクションに第一号から三四号（一八八三年一月～十二月）が収載されている。

- (37) 春のやおぼろ（坪内逍遙）戯著『読三嘆 当世書生氣質』十七冊（晚青堂、一八八五年六月～一八八六年一月、さらに同年四月に合本版二冊として刊行）。日本近代文学館編『日本近代文学大事典』机上版（講談社、一九八四年）。

- (38) 『万法精理』孟德斯鳩（Montesquieu, Charles de Secoudat, baron de）著、何礼之重訳・刊（一八七六年）。「法の精神」の翻訳。

- (39) 政学講義会幹事。政学講義会では「専門ノ学校ニ入学スル余暇ナキ者ノ為ニ政治、経済、歴史、法律等ノ処世須要ノ学課ヲ教授スルヲ目的」として、一八八六年（明治十九）五月から東京専門学校講義録の刊行を始めた。「政学講義会設立の趣旨」、『中央學術雜誌』二七、一八八六年四月、『早稲田大学百年史』一（解題注21）、六〇一ページ収載。高田早苗が埼玉県に巡回公演に赴いた折に講義録発刊に話が及び、同地在住の横田がそれに賛同、上京して刊行の実務にあたることとなったという（『早稲田大学百年史』一、第二編十五章「学苑内外の活動」校外教育）。

- (40) 星松三郎述刊『親察録』（一八八六年）。

- (41) 三宅雪嶺、一八六〇～一九四五、雄二郎とも。加賀国

に生まれ、市島らと同時期の東京大学に学び、一八八三年（明治十六）の卒業とともに東京大学文学部「准助教教授兼編輯方」、一八八六年には文部省編輯局で『日本仏教史』などの編纂をおこない、東京専門学校講師として哲学を講じることとなった（佐藤能丸「三宅雪嶺」、『国史大辞典』ジャパンナレッジ版）。春城が横田敬太と書を交わしているところから、この「入会」は政学講義会を意味すると思われる、この後三宅の講義録として「論理学」が刊行される（三宅雄二郎講述『論理学』、横田敬太、一八八九年、国会図書館デジタルコレクション）。

- (42) 宝節徳（Fawcett, Henry）原著、渋谷慥爾訳『政治談』（自由出版会社、一八八三年）。

- (43) なむそう。蛇の異名（『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版）。

- (44) いずれも小野梓自筆本と思われるものが早稲田大学図書館に収蔵されている。「日本財政論」（春城資料、八一四。書誌には春城写とあるが、「条約改正論」と同筆であることから、小野の自筆と思われる）、『東洋遺稿』下に収載。「条約改正論」（ワ二〇 五九五）、『東洋遺稿』上に収載。前掲注（12）参照。

- (45) 市島勇五郎。春城の父・直太郎の弟。憲、字・士章、号・得所。儒学者・肥田野築邨に学び、のち奥平謙輔に認

- められ佐渡民政局に出仕した。①市島成一『家廟之紙碑』増補（継志会、一九六五年）、②阪口五峯『北越詩話』（目黒甚七、一九一九年）、③『越佐人名辞書』（解題注35①）。
- (46) 立憲改進黨総理・大隈重信。ただし大隈は一八八四年に脱党しているので、この時点では後にあるように「旧総理」である。
- (47) グラッドストーン、Gladstone, William Ewart 1809-98。イギリスの政治家。『岩波世界人名大辞典』（ジャパンナレッジ版）。
- (48) 一八五九―一八八七。英吉利法律学校幹事。「創立者は十八人 渡辺安積」（『タイムトラベル中大125 1885―2010』第二版pdf版）。
- (49) 「政治原理出版契約書」横田敬太（政学講義会幹事）、市島謙吉、一八八六年五月一〇日（『愧存経歴文書』、春城資料、八九五）参照。
- (50) 尾崎行雄著刊『経世偉勲』（集成社発兌、売捌報知社、一八八六年）。ヴィクトリア女王のもとで首相を務めたブーコンズフィールド伯ディズレーリ（Disraeli, Benjamin, Earl of Beaconsfield）の伝記。
- (51) 春城の母・シゲの父である丹呉宗平。春城の日誌には丹呉家の人々が多く登場する。主な人物としては、宗平の子（春城の叔父）俊平、その後が続く鼎吉、康平らの名がみえる。『人事興信録』十二版下（人事興信所、一九三九年）。
- (52) 佐瀬精一。会津藩士・佐瀬得所の次男として生まれ、改進黨系の『大阪新報』記者から新潟に転じていた。一八八七年には成瀬仁蔵、阿部欽次郎らとともに「新潟女学校」設立発起人となっている。一八八九年、函館で発刊された『北海』の主筆となり、新潟を離れる。片桐芳雄「新潟女学校と成瀬仁蔵 キリスト教教育をめぐる」、『愛知教育大学研究報告 教育科学編』六六、二〇一七年）。
- (53) 佐渡の生まれ。明治の初めに新潟に出て坂口仁一郎（後掲注56）の詩社に入る。藍川の号を持つ。のち、『新潟新聞』主筆となる。『越佐人名辞書』（解題注35①）。
- (54) 当時新潟新聞社長であった鈴木長蔵の腹心として、こののち鈴木が『新潟新聞』を去る時にともに退社している（解題注36）。
- (55) 古志郡東山村（現・小千谷市）生、一八八五年東京専門学校卒。のち、『越佐新聞』の経営にあたり、中越地域の改進黨系の中心的役割を果たした。『越佐人名辞書』（解題注35①）。
- (56) 坂口仁一郎、一八五九―一九二三。新潟新聞社長、衆議院議員。作家、坂口安吾の父。新潟を拠点に活躍するジャーナリストにして政治家という点で春城と共通し、さらには漢詩文や印趣味といった点でも交流があった二人だった。

特に春城が所有する高芙蓉（一七二二～一七八四）の印を五峰に所望された際、詩を一篇作成することを条件として了承し、五峰はこれに応え「鶏血石歌」を春城に贈ったという逸話は有名である。『越佐人名辞書』（解題注35①）、市島春城「印の結婚」（『随筆春城六種』、早稲田大学出版部、一九二七年）。

(57) 「念七」と書いたものを「八」と見せ消ちしてあり、以下三〇日まで同様になっている。

(58) 新潟に来ること。

(59) 新潟県高田の人、通軒と号す。一八七九年（明治十二）の第一回県会議員選挙に当選（中頸城郡）、一八九〇年には高田町長となる。一八八二年の上越立憲改進黨結成に参加。『越佐人名辞書』（解題注35①）、解題注（45）参照。

(60) 和泉家のある五泉（現・五泉市）に帰ること。

(61) 春城の妻ユキは和泉佳逸の娘。帰省直後のこの頃、実家の和泉家（五泉）に戻っていたようである。

(62) 華氏九〇度＝摂氏約三二度。

(63) 尾崎行雄が新潟県内の商業振興と人材育成を提唱し、それをうけ創設された「北越興商会」の付属商業学校として一八八三年に開校（現・新潟県立新潟商業高等学校）。斉藤軍八郎は初代校長。新潟県立新潟商業高等学校ホームページより。

(64) 高田早苗『政体論』（東京専門学校政治科講義録）。

(65) 渡邊襲、漁村と号す。佐渡相川の生まれ。修教館の句読師を経て新潟県に出仕、収税属となる。漢詩人として作品を残す。『越佐人名辞書』（解題注35①）。

(66) 一八三五～一九〇一、長岡生。維新後は越後府に出仕、さらに一八八一年に『北越新聞』、『越佐毎日新聞』を創刊。一八八六年上京、翌年博文館を開業、出版社として成功する。一九〇一年、私財を投じて大橋図書館を創設するが、開館を見ずに死去。図書館は佐平の子、新太郎により翌年開館。春城も開館して間もない図書館の見学に訪れている。『越佐人名辞書』（解題注35①）、「我楽多誌」五（春城資料、一一〇）。

(67) 安孫子石太郎は春城と同じく越後国水原の生まれで、城南と号し、大野耻堂、中村敬宇らに学び、のち水原町長となった。春城とは「広業館（弘業館とも）」の同窓。広業館は水原陣屋におかれた学問所にはじまり、維新後の一八六九年に広業館となった。春城は一八七〇年、安孫子はその翌年に入学している。拙稿「春城市島謙吉、若き日の政治論 翻刻紹介・市島春城「還魂紙料」」（『日本史攷究』四〇、二〇一六年）参照。